目次

02 静岡近代美術年表稿 昭和戦後編 5 立花 義彰

24 平成30年度浜松市楽器博物館における他機関との共同プログラム実践報告 浜松市楽器博物館 嶋 和彦
〜リードオルガン・インドネシアの芸能・羊毛フェルトの絵〜

32 ひなびたり 南張富士講、200年のあゆみ 富士市 文化振興課
〜「南張富士講関係資料」の分析を中心に 元富士山かぐや姫ミュージアム 井上 卓哉

42 ふじのくに茶の都ミュージアムにおける静岡茶の愛飲促進に向けた教育普及の取組について（事例報告） ふじのくに茶の都ミュージアム 学芸課 新間 知子・永谷 隆行

46 新収蔵品紹介 公益財団法人上原美術館 菅野 龍磨
上原美術館所蔵 大日如来坐像

48 展覧会「須田国太郎-上原美術館コレクションから-」報告と、その空間表現技法の一考察 公益財団法人上原美術館 齊藤 陽介

62 静岡県博物館協会 研究紀要投稿規程
1960年代前半、本稿が主な典拠とする静岡の地元紙には、安保闘争を含む様々な事件について、選挙の記事が溢れ、々々の甲子園大会と県大会の試合、茶の生育状況・市況もまた大きく取り上げられている。しかし、文化・美術面に関する記事は少ない。『静岡新聞』『浜松民報』『河和』を例にとっても、広報誌はこの時期ほとんどの目にする事が少ない。さらに前報は静岡、後者は浜松編重であり、全国はおそらく全県的な視野すら欠き、閉塞的とも言える文化状況が見て取れる。

唯一全県的なものとと言える、県美術展覧会も昭和36（1961）年に、他の芸術部門と合同の県芸術祭美術部門の第1回展として改組された。

県行政組織上の変化では、県民会館改組と県教育委員会文化課新設がある。県民会館（1961）年4月それまでの、県美術展覧会文化課と引き継いで、県教育委員会文化課が新設された。この事以上に、県民会館のという時期より衰退に向か大型の要因として指摘されているのは、昭和36（1961）年3月、現職である斎藤寿夫が四選を含めた県知事選挙の影響である。

同年2月3日の読売新聞記事『機能マヒの県民会館』では、県民会館とあわせて事務所を置く「郷土をよくする会」についてふれ、「この県知事選挙のなかで二つの人づくりセンターの機能が根付か崩れてしまった」とする。「初代県民会館館長」の塩谷一夫氏は「選挙選挙」「四選選挙」を端末にして知事選に立候補し、きのうまで住えてきた斎藤知事と激しく争ったが、現在の県民会館は文化活動の「手足」を奪われ、文字通りの貸し部屋職となっているし、同会館内に事務局を置く「郷土をよくする会」はもはや名残職員が知事選に影響したと呼ぶ。それでも斎藤、塩谷両派は分かれて相争い、いまは数人の平職員がなすべき仕事を手がつかず途方にくれている始末。ま、県民会館の職員の中にも」云々と報じた。

この選挙を原因とする認識は、他紙も共有しており、同年3月2日付の朝日新聞は、斎藤県政の課題と題する連載の中で、「県民会館、抜き？」として取り上げた。「これまで県の広報部門を担当して来たのは、県庁と道府県が併せてた
1963 昭和38年
1/1 野島青薔（うさぎ）（静岡1/1）
1/1 新春作品展於静岡扇子屋（31）。（静岡1/1,5,朝日駿豆版1/10, 読売新聞B版1/11）
1/3 江尻広海逝去。（静岡1/4,6,朝日伊豆版1/5,毎日静岡,中西部版1/5）
1/ 寂藤大・日下泰水色彩展於伊東伊豆画館（10）。
(朝日伊豆版1/6)
1/5 第14回秀作美術展於東京日本橋三越（13）。
中島多茂都（殿）近藤浩一・《朝露を歩んで》上田雨牛（裸本A）北川民次（花）出品。
1/ 向井潤吉（岡野喜太郎肖像）沼津市立駿河図書館に寄贈される。（黎明1/6, 沼津朝日1/8）
1/9 横山大観展於靜岡安心堂（20）。（浜松民報1/5, 静岡9/1,12, 読売新聞B版1/9）
1/13 寂藤磐・望月俊男展於静岡谷島屋書店（20）。
(静岡1/12,朝日駿遠版1/13, 読売新聞B版1/13)
1/14 果巻道雄展於東京山本春秋画廊（20）。
1/14 内田公雄・相沢常樹・冬木徹三洋画三人展於沼津丸運ビル静岡新聞津波支局（18）。（沼津朝日1/12,15,静岡1/14,19,朝日駿豆版1/16）
1/ 坂本辰夫油絵展於静岡吉見書店（20）。（静岡1/19, 読売新聞B版1/19）
1/16 広重五十三次版画展於静岡東海銀行静岡支店（23）。（浜松支店（28）2/2）。（静岡1/17,朝日駿豆,駿遠版1/18, 読売新聞B版1/18, 中日遠州版1/30）
1/21 杉山良雄東海道五十三次名跡展於県民会館（30）。（静岡1/19,26,2/2,3/30, 朝日駿遠版1/20, 読売新聞B版1/23）
1/ 柴田秀二個展於清水中電ショールーム（27）。
(朝日駿豆版1/25, 読売新聞B版1/25)
1/22 永井正御・市野亮三個展於浜松松崎（27）。
(浜松民報1/9,24）
1/25 チャーチル会津展第1回展於津和四国（29）。（沼津毎日1/1, 聖徳丸1/19, 沼津朝日1/22,26,朝日駿遠版1/24,26,三島民報1/25,30）
1/25 大場厚作水彩展於浜松ナカムラ画廊（30）。 （浜松民報1/25,28,朝日駿遠版1/30）
1/26 荒木省三・五十嵐二朗・服部雄子展於静岡美術（30）。（朝日駿遠版1/24）
1/ 石田善彦展於吉原市民会館（30）。
(朝日駿豆版1/29)
1/29 羽生幸吉個展於清水戸田書店（31）。（朝日駿豆版1/27）
2/ 仲安義宣・藤原順展於清水久松（15）。
(読売新聞B版2/3, 静岡2/6)
2/ 藤田嘉一郎・駒田かづ子展於浜松松崎（10）。
(浜松民報1/23,30,2/9）
2/3 「機能マヒの県民会館」（読売新聞B版2/3）
2/ 渡辺恵仙一雄展於清水戸田書店（9）。
(朝日駿遠版2/8)
2/ 太田重範・中森泰吉・中森三九九彫刻展於静岡扇子屋（15）。（静岡2/9, 読売新聞B版2/9,14）
2/ 大内枝展於清水中電ショールーム（17）。
(読売新聞B版2/14,朝日駿遠版2/16）
2/15 山家初枝（希望の像）除幕式於伊東高校。
(朝日伊豆版2/17)
2/ 川島啓・木下昭子・木下厚子展於清水中電ショールーム（23）。（読売新聞B版2/21,朝日駿遠版2/22）
2/19 ムゲデンノ第2回展於浜松松崎（24）。
(浜松民報2/19, 毎日静岡西部版2/20）
2/ 多々良勝博・小谷和夫二人展於静岡扇子屋（28）。
(静岡2/23)
2/25 牧本誠夫個展於清水久松（35）。（朝日駿遠版2/25）
2/26 国立近代美術館開催現代写真展於県民会館（3/3）。
(朝日駿遠版2/26,3/12, 静岡2/28）
3/ 久保田文吉展於清水久松（31）。（静岡3/24）
3/ 「県民会館・骨抜き」（朝日駿遠版3/2）
3/ 第15回読売アンテナバンバン展於東京都美術館（16）。
鈴木慶則・斎藤司郎出品。
3/ 第23回美術文化協会展於東京都美術館（16）。
(毎日静岡西部版3/5, 浜松民報3/7）
3/ 中島清之富士十題展於浜松松崎会館（13）。
(浜松民報3/9, 中日遠州版3/9）
3/11 重岡健治《あけぼの希望の海》除幕式於伊東中学校。（毎日静岡中, 西部版3/12, 朝日伊豆版3/13）
3/ 在住画家油絵展於伊東伊豆画廊（24）。
(朝日伊豆版3/16)
3/ 山田安小品展於静岡扇子屋（30）。（静岡3/23）
3/ 中村義雄・書《西行心》を下田小学校に寄贈。
(朝日伊豆版3/17, 静岡3/18）
3/18 第22回水彩画連盟展於東京都美術館（31）。

入選者。（毎日静岡中部版3/13，朝日新聞版3/16）

3/18 牛島嘉之展於浜松ナカムラ画廊（24）。
（浜松民報3/18,22,朝日新聞版3/23）

3/21 坂元正一三橋良一平馬学（青雲の像）除幕式於下田旧加賀野小学校。（静岡4/2,7,朝日新聞版2/9）

3/ 水上優展於静岡吉見書店（31）。朝日新聞版3/27,談談静岡版3/27,29,27,29。

3/30 青木達弥，第1回岡尾美術展受賞授賞、難関生京3/30,31,每日静岡中日西版3/30,朝日伊豆新聞版3/30,31。

3/ 岩崎良平（石内直太郎胸像）除幕式於沼津市立高校。（朝日新聞版3/27）

4/1 第13回モダンアート展於東京都美術館（19）。毎日新聞版4/1。

4/ 野崎利喜男両拝作品展於静岡吉見書店（7）。
（静岡3/30,朝日新聞版3/31）

4/1 青梅展於靜岡市立美術館（7）。静岡4/6,7,談談静岡版4/6,7,朝日新聞版4/6,7。

4/ 河西賢太郎展於清水久松（15）。静岡4/6,13。

4/8 佐藤直子江村展於県美術館（13）。毎日静岡中日西版4/5,静岡4/7。

4/10 鈴木三朝展於浜松松栄（14）。浜松民報4/6,12,朝日新聞版4/10。

4/11 下村正三展於静岡市桜坂（13）。静岡4/9。

4/ 大内義三展於浜松商工会館（14）。浜松民報4/12,13,毎日静岡市立西版4/12,朝日新聞版4/12）

4/11 第11回彩京展於東京都美術館（5/2）。

4/16 二重作龍夫展於東京兜屋画廊（21）。

4/16 神谷広展於浜松松栄（21）。浜松民報4/13,22,中日新聞版4/14,朝日新聞版4/16。

4/ 浚沢清志展於静岡市立美術館（21）。
（静岡4/20,朝日新聞版4/20）

4/20 静岡創価学会第7回展於県民会館（24）。静岡4/20）

4/20 墨象十三展於靜岡市美術館（5/5）。
（静岡4/27,談談静岡版4/3）

4/22 第37回国際展於東京都美術館（5/8）。

4/22 青木達弥《白の光》浜川光志（書）東風一念《夜岳山頂》観野と月《野田好子》《夢の中》伊藤館《望風》《呼びかけ》栗山茂《叙情（五月）》《五月の市歌》中川雄太郎《伝説（水）》《伝説（泉）》山口源（登記の記録B）《河口のふるさと》出雲（中日新聞版5/14）入選者。（毎日新聞版4/19）

4/22 第40回春陽展於東京都美術館（5/5）。

4/22 日本画作家協会展於東京美術館（27）。
（毎日新聞版4/5,静岡新聞版4/5）

4/23 「北川民次《花と稲穂》作品展於舞台」（中日新聞版4/23）。

4/23 隆州美術第7回展於浜松松栄（29）。中日新聞版4/23,浜松民報4/24,27,5/2,朝日新聞版4/26,30。

4/24 上出雅美展於浜松松栄（28）。朝日新聞版4/24,浜松民報4/29。

5/1 創元会於松平本家展於浜松松栄（5）。毎日新聞版4/3,朝日新聞版4/5,静岡新聞版4/5。

5/ 平井俊之塚城展於清水久松（15）。読売新聞版5/12。

5/ 小林義司展於静岡市立美術館（14）。静岡5/4,朝日新聞版5/4,朝日新聞版5/5,静岡新聞版5/7。

5/ 大野靖義展於伊東市美術館（6）。朝日新聞版5/3。

5/4 鈴木三朝展於清水市立ショールーム（9）。静岡5/5,朝日新聞版5/5,静岡新聞版5/5。

5/ 寺島紫明展於松平商工会館（-）。浜松民報5/8。

5/7 杉林會第4回展於浜松松栄（12）。
（浜松民報5/7,14）

5/ 柏木俊夫展於伊東市美術館（13）。朝日新聞版5/11。

5/ 武者小路市展於清水市立美術館（15）。静岡5/15,朝日新聞版5/5,朝日新聞版5/23。

5/10 第7回日本国際美術展於東京都美術館（30）。

5/10 北川民次《花と稲穂》佐野繁次郎《生物no.16》中島多郎《赤い行者》野田好子《追想》山口源《静かなる湖》。

5/11 柴田俊子展於清水市立ショールーム（14）。
（読売新聞版5/11,朝日新聞版5/11）

5/ 髙木倉アルミ製作展（読売新聞版5/16）。

5/15 清川泰次展於東京清川倉（浜松民報6/6）。

5/15 小栗正展於浜松谷立美術館（19）。朝日新聞版5/15,浜松民報5/15。

5/16 斎藤準展於清水久松（31）。読売新聞版5/16,朝日新聞版5/5,静岡新聞版5/5。
毎日静岡中部版5/21, 静岡5/26)

5/16 平井俊男スケッチ展於清水中電ショールーム(21)。
（毎日静岡中部版5/16）

5/16 佐村真一展於浜松ナカムラ画廊(22)。（中日遠州版5/17,浜松民報5/17,21,朝日駿遠版5/19,每日静岡西部版5/19）

5/17 加田裕子個展於静岡扇子屋(22)。（静岡5/18,読売静岡B版5/21,朝日駿遠版5/21）

5/20 青島三郎・生崎好時・戸塚晃水・本多夫二男展於浜松谷本屋書(26)。（浜松民報5/15,27,朝日駿遠版5/21）

5/21 壮炎会第18回展於浜松松菱(26)。（毎日静岡西部版5/23,浜松民報5/27）

5/22 丹羽勝次グレアス画展於静岡扇子屋(31)。（静岡5/25,朝日駿遠版5/23,読売静岡B版5/24,29）

5/23 長谷川純作品展於清水中電ショールーム(28)。（読売静岡B版5/23,毎日静岡中部版5/23,朝日駿遠版5/26）

5/24 小堀義威・成瀬信・志賀旦山三人展於沼津市公会堂(26)。（沼津朝日S5/22,沼津毎日S5/22,黎明5/22）

5/24 平井俊男個展於清水戸田書店(30)。（朝日駿遠版5/23,読売静岡B版5/23,静岡5/29）

5/24 小林孝琉ヒューム展於静岡産業会館(26)。（静岡5/22,読売静岡B版5/25）

5/26 青美会第2回展於熱海観光会館(28)。（熱海3/28,5/28）

5/27 池田龍雄・中村宏・山下節二展於東京青木画廊(6/8)。

5/28 浜松市体育館へ田辺三重松(夏の雄阿寒岳)斎藤真一(港)二人展於谷月昌作(夜あけ)寄贈される。
（毎日静岡版6/19）

5/30 清川泰次渡来。（浜松民報6/6）

6/ 柴田俊・柴田哲男二人展於静岡扇子屋(15)。
（静岡6/8）

6/5 増田大昇展於浜松松菱(9)。（浜松民報6/4,中日遠州版6/4,毎日静岡西部版6/6）

6/5 堅山南風社中翠風会展於浜松商工会館。(7)。
（浜松民報6/4,10）

6/ 丹羽勝次個展於静岡吉見書店(16)。
（朝日静岡版6/13,静岡6/15）

6/11 加藤満治・藤田喜弘展於浜松松菱(16)。
（浜松民報6/11,朝日駿遠版6/14）

6/12 バサイナ美術展於三島市立図書館(16)。（朝日駿豆版2/27,4/21,6/12,三島民報6/15）

6/13 水彩連盟静岡支部展於県民会館(16)。（静岡6/12）

6/15 山田安雄個展於静岡扇子屋(30)。（静岡6/15,読売静岡B版6/21,19）

6/ 島本善雄愛展於伊東伊豆美術館(24)。（毎日静岡中部版6/20）

6/18 井上恒也日本画展於東京三越(23)。

6/18 馬場喜好展於吉原市民会館(21)。（朝日駿豆版6/16）

6/ サロンド21世紀協会設立。（静岡6/23,8/24,31）

6/21 中村聖雲小品展於清水中電ショールーム(24)。（毎日静岡中部版6/19,読売静岡B版6/21,静岡6/24）

6/21 朝比奈誉美子個展於清水久松(7/5)。
（読売静岡B版6/21）

6/24 山下充展於東京文芸春秋画廊(29)。

6/29 武田喜和子・杉山幸子・吉沢ゆう美色三人物於静岡扇子屋(7/7)。（静岡6/29,読売静岡B版7/5,6）

6/30 円沢紅巢富士百景展於沼津市公会館(7/3)。（沼津毎日6/30）

7/1 志賀旦山《夏風》沼津朝日よりカラマスー市民へ寄贈される。（沼津朝日7/1）

7/2 沼津市民文化会館開館（沼津朝日S34/11,13,12,18, S35/2,25,37/1,21,12,15,沼津毎日S33,4/23, S34/6,11,18,11,22,12,6,36,2/4,25,6/8,S37,6/5, S38,6,9,27,7,21,黎明S32,2,6,S34,6,16,S37,12,16,S38,6,9,28,29,静岡6/29）

7/ 木梨泰伯個展於清水久松(31)。（静岡7/13,読売静岡B版7/13）

7/ 潮原塗彩絵個展於静岡扇子屋(15)。（静岡7/13）

7/ ふじえだ同仁展於静岡吉見書店(12)。（朝日静岡版7/17）

7/10 県文化財保存協会創立総会於県民会館。（朝日駿豆,静岡,遠州版7/2,静岡7/12）

7/12 入間展於清水中電ショールーム(16)。（朝日駿豆版7/11,12,7/13）

7/13 伊藤弥太個展於沼津市民文化会館(15)。（沼津朝日S7/11,14,黎明7/11,沼津毎日7/14,静岡7/15）

伊藤弥太(牛の祖上り松)沼津市駿河図書館に寄贈。（黎明8/4,沼津毎日8/6,朝日駿豆版10/2）

7/14 県文化センター建設委員会第1回会合、高島逹四郎出席。（熱海7/14）
7/15 大森聰衛個展於浜松ナムラ画廊(-21)。（中日速州版7/14,毎日静岡西部版7/17）
7/16 油絵四人展於三島市立図書館(-21)。
（朝日駿豆版7/21）
7/16 中島清之展於浜松商工会館(-20)。（浜松民報7/15,朝日速州版7/17,毎日静岡西部版7/18）
7/16 渡辺俊明展於浜松松栢(-21)。（浜松民報7/11）
7/18 県写真サロン第7回展於県民会館(-23)。（朝日駿豆,静岡,速州版6/1,18,19,21,22,23,25,26,28,29,30,7/16,19）
7/18 佐野和夫個展於清水中電ショールーム(-23)。
（読売静岡B版7/17）
7/18 坂本勝彦スタイル画展於清水戸田書店(-25)。
（静岡7/22）
7/21 静岡県美術家協会,静岡県美術家連盟に改組。
（浜松民報6/21,7/25）
7/22 藤野嘉市・池田正司展於静岡吉見書店(-28)。
（静岡7/17,朝日静岡版7/21）
7/28 伊藤純也個展於浜松ナムラ画廊(-8/3)。
（浜松民報7/29,毎日静岡西部版7/30）
7/30 藥師寺主計展於東京日本橋三越(-8/5)。
（熱海7/14）
7/30 形象派浜松支部展於浜松松栢(-8/1)。
（浜松民報7/24）
7/31 国際写真サロン展於静岡田中屋(-8/5)。
（朝日静岡版7/28,8/1）
8/1 保坂昌男個展於静岡扇子屋(-7)。（朝日静岡版7/31,読売静岡B版8/1,静岡8/3）
8/2 平井俊男九州一周スケッチ展於清水久松(-15)。於
中電ショールーム(22-27)。（静岡8/3,朝日静岡版8/3,毎日静岡中部版8/6,読売静岡B版8/27）
8/ 佐野和夫水彩画展於清水フレンド(-15)。（静岡8/3）
8/ 河原宏小品展於静岡扇子屋(-15)。（静岡8/10,朝日静岡版8/11,読売静岡B版8/13）
8/6 伊藤淳彦水彩画展於浜松松栢(-11)。（浜松民報
8/6,朝日速州版8/7,毎日静岡西部版8/10）
8/10 山内武志展於浜松谷島屋書店(-13)。
（浜松民報8/5,15）
8/13 新象作家8人展於浜松松栢(-18)。（浜松民報8/8,16,朝日速州版8/13,朝日速州版8/14,毎日静岡西部版8/14）
8/16 小林義司個展清水久松(-9/15)。（読売静岡B版8/15,16,95,13,毎日静岡中部版8/16,朝日静岡版8/16,静岡8/17）
8/ 杉山幸子染色展於静岡扇子屋(-23)。（静岡8/17,朝日静岡版8/20,読売静岡B版8/20）
8/ 山家初枝《人魚》於伊東湯川横瀬海岸。
（朝日駿豆版8/20）
8/20 鈴木慶康個展於清水フレンド(-9/15)。（読売静岡B版8/18,9/5,13,満寿美協8）
8/20 静流会・遠州美術 県東西美術交流展於県民会館
(-24)。（浜松民報8/17,沼津朝日8/18,静岡8/20,朝日8/20,読売静岡B版8/23）
8/20 松島太郎展於浜松松栢(-25)。（浜松民報8/21,23）
8/24 長崎泰典展於吉原市民会館(-27)。（毎日静岡中部版8/16,朝日駿豆版8/24）
8/24 山本正幸個展於静岡扇子屋(-31)。（朝日静岡版
8/24,静岡8/24,読売静岡B版8/24）
8/26 熊切澄夫個展於清水戸田書店(-31)。
（読売静岡B版）
8/26 サロンド21世紀協会第1回展於静岡吉見書店
(-9/1)。（静岡6/23,8/24,25,31,毎日静岡中部版8/25,朝日静岡版8/25,読売静岡B版8/25,31）
9/1 第48回図展於東京都美術館(-20)。
北川民次《母子家族像》（美術年鑑S.39*）入選者。
（毎日静岡西部版8/29,朝日駿豆,静岡,遠州9/1）
9/1 第48回図展於東京都美術館(-20)。中島多茂也
《長崎三題》（崇福寺・眼鏡橋・大浦聖堂）[文部
大臣賞受賞]小栗正《休息の時》鈴木三朝《湿原
晴秋》（美術年鑑S.39*毎日静岡,西部版8/31）
9/1 第18回活動美術展於東京都美術館(-20)。
入選者。（毎日静岡中,西部版8/28）
9/1 静岡県水彩画協会第13回展於県民会館(-4)。（毎日
静岡中,西部版9/1,朝日駿豆,静岡9/1,2,静岡
9/2,読売静岡B版9/3,4）
9/ 望月康男四国スケッチ展於静岡扇子屋(-9/7)。
（静岡8/31,毎日静岡中部版9/5,朝日静岡版9/5,読
売静岡B版9/6）
9/ 青木鉄夫・長谷川守弘・藤原和夫三人展於静岡
吉見書店(-8)。（毎日静岡中部版9/5）
9/ 鈴木新一・杉山幸子展染色於清水中電ショールーム
9/8 新井弘徳展於沼津アートコーヒー（-15）。
（沼津日9/8）

9/10 千葉平男展於漁港町美術館（-10）。
（千葉日9/8）

9/11 大久保作次郎展於浜松商工会館（-15）。
（浜松民報・9/11）

9/12 佐藤孝スケッチ展於静岡常子屋（-14）。
（静岡9/7）

9/12 朝日漁具展於静岡中部版（9/12）。

9/15 平田栄・柴田俊・村上晴三人展於清水中電ショールーム（31）。
（毎日静岡中部版9/14）

9/15 伊藤勉・覚悟『ぼうひろし』詩画展於静岡常子屋（-21）。
（静岡9/14）

9/16 三橋良朋（村村文吉彫像）除灾式於東伊豆稲取中学校。
（静岡9/17）

9/16 写実派協会展於静岡吉見書院（-22）。
（朝日静岡版9/15）

9/17 現代浮彫第一回展於浜松市民文化会館（-22）。
（浜松民報・9/10）

9/17 六灯展於浜松松妻（-22）。
（浜松民報・9/16）

9/17 中根峰雄・加賀智計イーズ展於清水久松（-30）。
（日刊静岡版・9/14）

9/17 高田英司個展於清水フレンド（-30）。
（静岡9/18）

9/19 岡部勇『座裸婦』（朝日駒豆, 静岡, 達州版9/19）

9/20 藤本一良北海道スケッチ展於東京松屋（-25）。

9/22 第27回新作展於東京都美術館（-10）。
秋野不二（原田拓人・落合）『空岳とまり』出品。
（美術年鑑S.39）

9/24 佐藤藤堂展於浜松松妻（-29）。
（朝日静岡版9/27）

9/25 吉野不二太郎近作展於県民会館（-30）。
（朝日静岡版9/24）

9/28 月見里シゲル展於清水中電ショールーム（-10）。
（朝日静岡版9/28）

9/30 開拓第3回展於静岡吉見書院（-5）。
（静岡9/28）

10/1 田村俊男展於清水フレンド（-31）。
（静岡10/14）

10/1 朝日野展於静岡常子屋（-20）。
（朝日静岡版10/16）

10/1 田村俊雄水彩個展於清水久松（-15）。
（静岡10/14）

10/2 浜松美術協会展於浜松商工会館（-6）。
（毎日静岡版9/15）

10/3 長谷川晶展於浜松ナカミラ美術館（-9）。
（朝日静岡版9/20）

10/4 清水久男展於沼津市文心会館（-6）。
（沼津10/2）

10/5 《清水俊二胸像》除災式於清水食品。（静岡10/5）

10/8 第2回国際形展於東京三越（-20）。

10/8 北川民次《母系家族》花出品。

10/8 新橋秀社静岡支部展於静岡吉見書院（-13）。

10/9 第3回伊豆郡美術展於伊豆郡美術館（-10）。

10/10 複製世界の名画展於静岡田中屋。（朝日静岡版11/11）

10/11 山下清作品展於清水市青少年会館（-14）。
（毎日静岡版9/20）

10/12 第31回独立展於東京都美術館（-30）。

10/12 第17回二宮会展於東京都美術館（-30）。
水野拓三（無）

10/12 第27回自由美術展於東京都美術館（-30）。
入選者。（朝日駒豆, 静岡, 達州版10/10）

10/14 井上三郎・木下光・伊田駒太郎三人展於静岡吉見書院（-20）。
（静岡10/16）

10/15 清水秀雄展於浜松松妻（-20）。
（浜松民報10/14, 16）
11/13 県芸術祭第3回展於県民会館・静岡松坂屋・田中屋・吉見書店（-17）。審査員：中村善策、斎藤義重、藤野正正、石川延和、中島多茂、原田美雄、大坪重規。（静岡11/12、13、17。毎日静岡中西部版11/13、朝日稲豆、静岡、遠州版11/5、13、14。読売静岡版11/13、中日遠州版11/13）
11/14 上坂浩之斯ケツ展於清水中電ショールーム（-19）。 （読売静岡版11/12、静岡11/14、朝日静岡版11/16）
11/16 藤野嘉行展於清水久松（-30）。 （静岡11/13、読売静岡版11/15、16）
11/17 朝倉文夫（斎藤和一郎）展於美術館於吉野工業高校。（朝日稲豆、静岡、遠州版10/3、静岡11/18、中日遠州版11/18）
11/17 梶本邦一（錦織三郎）展於藤枝東高校。（静岡11/13、18）
11/17 梶本邦一（学びの塔）展於藤枝小学校。（静岡11/13、18、朝日静岡版11/20）
11/19 寺田誠展於静岡吉見書店（-24）。 （静岡11/23）
11/19 杉山悠貴・平尾尚子日本画展於静岡吉見書店（-24）。 （静岡11/23）
11/20 沼津市立高校美術回顧展於沼津市文化会館（-26）。 （読売静岡版11/27、静岡版11/27、静岡版11/27、静岡版11/27）
11/22 池田正司個展於清水七田書店（-30）。 （読売静岡版11/27、静岡版11/27、静岡版11/27）
11/23 野放生展於松本ナカムラ画廊（-12/1）。 （浜松民報11/25、30）
11/26 曽宮一念新作展於東京児童画廊（-12/1）。 （読売靜岡版11/26、27、27、27）
11/28 伊藤隆史作品展於清水七田書店（-12/3）。 （読売静岡版11/27、読売静岡版11/27）
11/30 第7回安井賞候補新人展於東京国立近代美術館（-12/24）。 （中村豪（飛行機不時着）野田好子（夢の中）静岡版12/28）
11/30 小林幹於・白波 î美展於東京竹都画廊（-12/5）
12/1 「抽象絵画入門」講演会於清水市教育会館。長島泰典他。 （毎日静岡中部版11/29、静岡民報11/29）
12/2/3 楠木三織・江川和宏・松本好三人展於伊東伊豆
12/ 2 山田義雄個展於東京白木屋 (-4)。
（昭和毎日9/3, 静岡12/4）
12/ 3 一ノ瀬昌堂展於靜岡商工会館 (-12/5)。
（朝日静岡版12/3）
12/ 5 加藤大之象日本画展於清水中電ショールーム (-10)。
（毎日静岡中央版11/29, 読売静岡B版12/4, 朝日静岡版12/5, 清美協no.18）
12/ 5 松岡たか子小品展於清水久松 (-15)。
（朝日静岡版12/6, 読売静岡B版12/7, 静岡12/7）
12/ 7 山田義雄《マンゴの街路樹》沼津市へ寄贈（静岡12/8, 毎日静岡中部版12/8, 沼津毎日12/8, 黎明12/8）
12/ 9 上田臥牛展於東京文藝春秋画廊 (-15)。
12/ 9 杉山良雄個展於静岡吉見書店 (-15)。
（静岡12/4, 11, 12, 読売静岡B版12/12）
12/10 高橋信彦展於浜松ナカムラ画廊 (-17)。
（浜松民報12/7, 13, 朝日遠州版12/10）
12/10 青美会第1回展於浜松松栢 (-15)。（毎日静岡民報12/11, 毎日静岡西部版12/11, 朝日遠州版12/11）
12/11 静岡県版画協会第28回展於県民会館 (-16)。
（読売静岡B版12/15, 静岡12/16）
12/11 日本版画協会国内巡回静岡展-ユーロ・スラビア招待作品展於県民会館 (-16)。（静岡12/8, 朝日静岡版12/14）
12/12 内外複製名画展示即完会於静岡村上開明堂 (-25)。
（静岡12/11）
12/ 斎藤幸光展於清水久松 (-31)。（毎日静岡中部版12/25, 読売静岡B版12/25）
12/ 藤野嘉市小品展於靜岡扇子屋 (-30)。（毎日静岡中部版12/15, 24, 静岡12/26, 朝日静岡版12/17, 読売静岡B版12/17）
12/17 杉山有次展於県民会館 (-23)。（静岡12/24）
12/22 昭和初期洋画展於奈良県立近代美術館 (-39.2/16), 北川民次《二人の女》《メキシコ静物》
岡田紅陽居士百景写真展於浜松松栢 (-29)。
（朝日遠州版12/27）
1964 昭和39年
1/ 1 山口源《天に昇る》（静岡1/1）
1/ 1 山口源《朝の眺望》（沼津朝日1/1）
1/ 新春作品展於静岡扇子屋 (-31)。（静岡1/4, 13）
1/ 一ノ瀬・吉野展於静岡產業会館 (-9)。
（読売静岡B版1/8）
1/ 5 深沢作とその後展於東京国立近代美術館 (-2/16)。
北川民次《日本婦人像》《山のタスコの山》《ランチェローの呗》《かまどと敷く人々》《花》出品。（静岡1/16）
1/ 5 第15回秀作美術展於東京三越 (-12)。中村岳峰《雪霧》北川民次《花と雲霧》野田好子《夢の中》
1/ 向井良比《パターン64》佐治東洋電気にて制作。
（朝日1/1, 沼津朝日1/5）
1/ 7 佐々木真一展於清水戸田書店 (-12)。（朝日静岡版1/5, 読売静岡B版1/5, 朝日静岡版1/10）
1/ 7 野村サンプル第1回展於浜松松栢 (-12)。（朝日遠州版1/7, 浜松民報1/9, 朝日遠州版1/10）
1/ 10 尤友会第2回展於沼津西武 (-18)。（毎日静岡中部版1/7, 11）
1/ 10 萩田俊展於清水中電ショールーム (-14)。
（朝日静岡版1/7, 読売静岡B版1）
1/ 13 内田公鶴個展於沼津東洋ビル (-19)。
（朝日1/8, 沼津朝日1/9, 朝日静岡版1/12）
1/ 14 大塚友吉展於浜松松栢 (-19)。（毎日静岡西部版11/1, 浜松民報1/18）
1/ 15 曽宮一念, 千葉医大病院退院の足で来浜。
（浜松民報2/19）
1/ 15 超一流写真展於静岡田中屋 (-20)。（毎日静岡中部版1/12, 15, 朝日静岡版1/19）
1/ 17 青木達弥油彩小品展於県民会館 (-20)。
（読売静岡B版1/16）
1/ 21 鈴木勉展於静岡谷尾星書店 (-26)。
（朝日静岡版1/21）
1/ 杉沢高好《久保夜像》静岡大里西小学校。
（毎日静岡中部版1/23）
1/ 23 工藤士太郎日本画展於清水中電ショールーム (-28)。
（静岡1/18, 朝日静岡版1/23, 読売静岡B版1/24）
1/ 26 湯場男《吟遊之碑》（神代将像）除幕式於沼津大瀨崎。
（沼津朝日1/1, 黎明1/1, 読売静岡B版1/16, 静岡1/21, 朝日駿豆版1/21, 毎日静岡中部版1/27）
1/ 28 菊地秀一個展於静岡吉見書店 (-2/3)。
（静岡1/25, 29, 2/1）
1/ 28 あーとくる—ぷ鷹第1回展於静岡産業会館 (-31)。
（朝日静岡版1/29）
1/ 30 濱世絵名作展於静岡松坂屋 (-2/2)。（静岡1/26, 30, 中日静岡版1/29）

石川和彦作品展於清水久松(29)。（読売静岡B版2/8, 清美協no.20）

安田醉竹画展於沼津商工会議所(4)。（沼津朝日1/29, 2/6, 黎明1/29, 沼津每日1/31, 静岡1/31）

長岡展於東京サエカ画廊(8)。

山下清作品展於沼津長崎屋(11)。（沼津朝日1/14, 沼津每日1/29, 2/5, 黎明1/29, 朝日讀豆版1/17, 沼津2/4, 5, 静岡2/5, 中日靜岡版2/11）

鈴木康司日本画色紙展於清水フレンド(3/5)。

（朝日靜岡版2/5, 中日靜岡版2/5, 清美協no.20）

土井俊泰個展於東京寫生堂ギャラリー(12)。

斎田武夫個展於清水中電ショールーム(16)。

（清美協no.20）

ナカムラ画廊「ものくろーム」創刊。（浜松民報2/19）

中村宏個展於東京内科画廊(22)。

第8回新橋樹社展於東京都美術館(3/1)。

入選者発表。（静岡2/21）

近代作家の回顧展於東京国立近代美術館(3/29)。

太田聡雨他。

増田大友色紙展於静岡産業会館(27)。（静岡2/21, 朝日静岡版2/2, 読売静岡B版2/23, 25, 毎日静岡中部版2/25）

梅原秀雄作品展於清水中電ショールーム(3/3)。

（中日静岡版2/27, 読売静岡B版2/29, 朝日静岡版2/29, 清美協no.20）

テーマを持ったグループ展於東京春近代画廊(6)。

中村宏他。

下岡連枝遺作展於下田センター(3)。（静岡2/4, 毎日静岡版2/29, 朝日讀豆, 静岡3/2）

硝子絵締合美術展於県民会館(7)。内田六郎, ガラス絵於浜松市に寄贈表明。（静岡2/21, 22, 26, 3/1, 毎日静岡中部版2/25, 27, 3/5, 読売静岡B版2/28, 29, 中日静岡版3/4, 朝日靜岡版3/6）

大谷久子展於浜松ナカムラ画廊(7)。

（毎日静岡西部版3/5）

第24回美術文化協会展於東京都美術館(16)。

会員推挙・入選者。（朝日遼州版3/5, 浜松民報3/5）

鈴木幾雄(風をうけて立つ子)除幕式於掛川西南郷小・第一小。（朝日遼州版3/1）

鳴川展於浜松松菱(8)。（浜松民報2/24, 毎日静岡西部版2/27, 朝日遼州版3/1）

花房美樹展於浜松東海銀行浜松支店(9)。（朝日遼州版3/3）

サロード21世紀協会展於清水中電ショールーム(10)。（静岡3/2, 7, 読売静岡B版3/4, 10）

《友情の像》除幕。（朝日讀豆, 伊豆版S37, 10/12, S38.3.17, 静岡3/7, 毎日静岡中部版3/7, 中日静岡版3/7, 朝日靜岡版3/9）

新井農作品, 浜松市へ寄贈される（毎日静岡西部版3/8, 朝日遼州版3/13）

針生一郎・池田龍雄講演會於清水市教育会館。（毎日静岡中部版3/5, 読売静岡B版3/8, 清美協no.22-23）

米治一《悉平太郎像》除幕式於磐田見附天神。（静岡3/4, 毎日静岡西部版3/8, 中日遼州版3/8, 8/9, 静岡版S39.3.9）

第5回国際具象派美術展於東京上野松坂屋(15)。

北川民次《砂礫置場の海子》掛井五郎《ヘロデヤの女》

伊藤勉油絵個展於県民会館(12)。（静岡3/10）

静流会研究画談会第1回於沼津丸運ビル。（講師：山口源, 沼津朝日3/10）

中島清之・中島多茂都・高岡球子三人展於東京上野松坂屋(22)。

第23回水彩連盟展於東京都美術館(30)。

入選者発表。（静岡3/14, 浜松民報3/19）

重岡建治《自故の像》除幕式於熱海中学。（熱海3/10, 伊豆毎日3/10）


境脇三世一撮影展於熱海長崎屋(19)。

（熱海3/22）

099第2回展於浜松商会館(29)。（浜松民報3/27）

安田醉竹展於静岡産業会館(28)。（朝日靜岡版3/22, 中日靜岡版3/24, 読売靜岡B版3/25）

相沢常樹個展於沼津丸運ビル(30)。（黎明3/19, 沼津朝日3/28）

佐々木栄軒展於清水中電ショールーム(31)。（中日静岡版3/26, 朝日讀豆, 静岡版3/27）

大村政夫《教育の像》除幕式於焼津東小学校。（静岡3/26, 読売静岡B版3/26）

中村宏“観光芸術”宣言。”
4/1 第14回モダンアート協会展於東京都美術館 (-10)。前田守一、会員も推挙、加藤清治、会員も推挙。（静岡4/25）入選者発表。（静岡4/3）
4/1 第32回日本版画協会展於東京都美術館 (-19)。古橋紀子、横澤紀子、小野寺（木原）柳川（女）協会賞受賞。前田守一、会員も推挙。（静岡4/25）
4/1 早川実展於清水市電ショールーム（5）。（朝日静岡版4/2）関西静岡版4/2、中日静岡版4/2、清美協22-23
4/1 望月良蔵個展於清水久松（30）。（朝日静岡版4/2、中日静岡版4/15、清美協24）
4/1 山田安範新作展於静岡相生屋（10）。（毎日静岡中部版4/3、中日静岡版4/3、静岡4/4、読売静岡版4/4）春潮会第1回展於浜松カナムラ画廊（8）。（読売民報3/30、4/9）
4/4 児島善三郎個展於東京国立近代美術館（5/17）。《熱海夜景》《熱海》《伊豆の海》《西伊豆》他。（美術年鑑5/40）
4/5 野上義富作品展於富士宮公民館（11）。（静岡4/3）
4/6 近村加代・露木芳部二人展於沼津丸運ビル（11）。（沼津朝日4/7、8 静岡4/8、4/10）
4/6 柴田家族新展於清水市電ショールーム（12）。（毎日静岡中部版4/8、読売静岡版4/11、清美協22-23）
4/8 エコール・ド・ノーヌ第3回展於沼津市文化会館（12）。（中日静岡版4/5、4/8、沼津朝日4/9）
4/10 堤達男《おおぞらの像》除幕式於下田幼稚園。（静岡3/30）
4/ 高橋千賀子モードデッサン小品展於静岡相生屋（20）。（静岡4/11、毎日静岡中部版4/14、朝日静岡版4/14、読売静岡版4/15、中日静岡版4/15）
4/12 第12回日影展於東京都美術館（5/2）。浅井行雄《裸婦立像》澤田政憲《天女試作》重岡建治《手鏡》堤達男《凪の幻想》藤岡文一《そろる老水彩画家像》和田金剛《女》（出品目録）
4/14 渡辺俊明展於浜松市（19）。（浜松民報4/11、16、朝日静岡版4/12、毎日静岡西部版4/14）
4/ 向井良吉《勝利者の椅子》《蘇生》沼津にて制作。（沼津朝日4/18、黎明4/21）
4/18 井出寛芳、渡仏、サザンに学ぶ。（朝日静岡版3/29）
4/20 鈴木丸回顧展於沼津静岡新聞沼津支局（25）。
野田好子『雲上夢』(雲上華)中島多茂也『寂』山口
源『獲』(獲)村田政(矢絨子)の赤塚(庭のある
静物)村村宏『聖火千里行』上田順子『裸木』(日本
美術年鑑S.40)
赤塚善心選(毎日静岡中部版5/10)
5/11 岡崎平一作品展於縣民会館(-15)。(毎日静岡5/9,14,
毎日静岡中部版5/9,読売新聞B版5/10,12)
5/13 ビクトリア・アルバート美術館所蔵英国銀器美術展
於静岡松坂屋(-7)。(毎日静岡中部版5/10,静岡
5/13,朝日新聞,読売新聞,遠州版5/16)
5/13 島村碧紫作品展於縣民会館(-18)。(静岡5/12,
14,15,読売新聞B版5/13,朝日新聞版5/15)
5/14 静流記第19回展於沼津市文化会館(-17)。
(沼津日朝5/12,14,15,黎明5/15,静岡5/18)
5/14 杉山青樹個展於静岡谷島屋書店・扇子店(-20)。
(静岡5/9,14,読売新聞B版5/15)
5/14 ビクレト現代巨匠展於静岡産業館(-17)。(静岡5/6,
8,9,毎日静岡西部版5/8,朝日新聞版5/17)
5/19 静岡市美術館展於県民会館(-23)。
(読売新聞B版5/19)
5/19 伊藤松松・中岡信寿・原田晴華・市野三接展於浜松
松菱(-24)。(毎日静岡西部版5/21,浜松民報5/21)
5/19 坂本幸彦・村村次郎・酒井常之良展於
浜松商工会館(-23)。(浜松民報5/20,22,毎日静岡
西部版5/20)
5/20 真田カズシゲ個展於清水戸田書店(-26)。
(静岡5/23,清美協no.25)
5/ 青森展於静岡谷島屋書店(-27)。(静岡5/26)
5/23 伊藤弥太個展於沼津市文化会館(-24)。(沼津日朝
4/25,5/10,23,黎明5/13,沼津5/21)
5/25 柴田敏・柴田哲男二人展於清水中電ショールーム
(-31)。(朝日新聞5/24,清美協no.25)
5/26 十人の木版画展於東京秋山画廊(-6/1)。
前田守子出品。
5/29 小堀倉雄・成瀬憲・志賀丈山三人展於沼津市
文化会館(-31)。(沼津日朝5/26,沼津5/26,沼津毎
日5/27,朝日新聞5/29)
6/1 広住道夫個展於静岡扇子屋(-16)。(毎日静岡中部版
5/29,読売新聞B版5/6,3,静岡6/4)
6/1 鷹坂せつ子個展於清水久松(-30)。(読売新聞B版
6/2,毎日静岡中部版6/6,清美協no.26)
6/6 高橋真吾展於伊東中央ギャラリー(-7)。
(朝日新聞5/6,3)
6/4 伊藤敬『大井川港』,大井川町,スケッチ集刊行。
(静岡6/4,7)
6/ 杉村尚(立)於御殿場国立中央青年の家。(静岡6/9)
6/11 熱海美術大学展於熱海長崎屋(-15)。
(熱海5/9,6/12)
6/11 冬木微個展於沼津静岡新聞沼津支局(-15)。
(静岡6/9,12,沼津朝6/13)
6/11 植野嘉市個展於静岡扇子屋(-20)。(静岡6/11)
6/13 内田コレクション・ガラス展於神奈川県立近代美
術館(-7/26)。(浜松民報5/29,7/4)
6/13 チェコ・ガラス展於静岡松坂屋(-19)。
(読売新聞B版5/13)
6/15 第52回日本水彩画会展於東京都美術館(-27)。
(読売新聞B版5/13)
6/15 林鶴雄展於大阪高島屋(-21)。(浜松民報5/12)
6/20 アンデパンタン「64於東京都美術館(-7/3)。
伊藤隆史,鈴木慶二出品。
6/22 山下光作品展於東京文宮新春画廊(-27)。
6/23 井上恒也日本画展於東京三越(-27)。
6/25 榊山良展於静岡谷島屋書店(-30)。(静岡6/25)
7/1 静岡県版画協会第29回展於縣民会館(-6)。(静岡
6/4,10,30,7/1,9,毎日静岡中部版6/24,30,朝日新聞
版7/3)
7/1 現代日本版画展於縣民會館(-6)。(静岡6/27,7/1,
読売新聞B版7/2,3,4)
7/1 斉藤兼次個展於静岡扇子屋(-10)。(毎日静岡中部
版6/30,7/5,朝日新聞版7/1,7,8,朝日新聞版7/2)
7/3 高木倉すけ直展於靜岡產業會館(-5)。
(朝日新聞版7/2,朝日新聞版7/5)
7/3 山口照回個展於沼津市文化会館(-5)。(沼津毎
日5/23,6/20,沼津朝5/16,21,7/5,沼津6/22,黎明6/23,
毎日静岡中部版6/24,静岡7/3,4,朝日新聞版7/5)
7/6 十人の彩刻展於東京駒河台画廊(-18)。
掛井五郎出品。
7/8 県写真サロン展於県民會館(-11)。(朝日新聞,静岡
県出版5/11,13,14,15,16,17,18,19,20,21,静岡版
版7/5,8,11,読売新聞B版7/8)
7/9 美術人会第3回展於熱海長崎屋(-13)。
7/9 上坂浩通・望月鏡一油彩二人展於清水中電ショールーム・(14)。（朝日静岡版7/9、靜岡7/10、読売静岡B版7/14、清美協no.26.27）
7/9 新風会第2回展於静岡扇子屋（20）。（毎日静岡中部版7/15、静岡7/16）
7/9 望月工芸館展於清水戸田書店（-18）。（毎日静岡中部版7/16、静岡7/17）
7/14 斎藤栄一展於浜松松幸。（浜松民報7/7,16,毎日静岡西部版7/8,朝日遠州版7/14）
7/14 増田大右北海道スケッチ展於県民会館（-25）。（毎日静岡中部版7/12, 読売静岡B版7/15,16）
7/16 佐野疏風・楠木秋持有展於清水中電ショールーム（-21）。（毎日静岡中部版7/15）
7/16 赤塚展於東京新宿スクリーンビル（-26）。（毎日静岡中部版7/19）
7/21 杉山幸子染色展於静岡扇子屋（-31）。（静岡7/23, 読売静岡B版7/24,25）
7/21 県善部図展於浜松松幸。（朝日遠州版7/15,8/23,浜松民報7/20,22）
7/26 『宮本亀時胸像』写生於浜松。（毎日静岡西部版7/25, 朝日遠州版7/28）
7/26 伊東深水門下作品展於浜松商会館（-30）。（浜松民報7/29）
7/27 山田勇哲刻展於沼津丸運ビル（-8/1）。（沼津朝日7/30, 静岡7/11,28）
7/27 曽我一念『流鶴のわた』刊行。（毎日静岡中部版6/6, 静岡6/18）
7/27 杉山隆雄『東海道五十三次』刊行。（朝日8/2）
7/27 濱沢清水彩ガッシュ展於県民会館（-）。（読売静岡B版8/1）
8/1 国際写真サロン展於県民会館（-5）。（静岡6/28,8/1, 読売静岡B版8/1,2）
8/1 柴田善・柴田秀夫設計展於静岡扇子屋（10）。（読売静岡B版8/5, 毎日静岡中部版8/5, 静岡6/2, 清美協no.28）
8/1 鈴木孝子スタイル画個展於清水戸田書店（-9）。（毎日静岡版8/1, 静岡6/6）
8/1 喫茶アート開店。（浜松民報7/28）
8/1 渡辺重明・花崎伊平・河野修治三人展於靜岡谷島屋書店（-6）。（静岡6/6）
8/10 杉山邦彦個展於清水戸田書店（-20）。（読売静岡B版8/15, 静岡6/6）
8/10 鈴木政一展於静岡扇子屋（-18）。（朝日静岡版11, 毎日静岡中部版8/11, 読売静岡B版8/12, 静岡8/13）
8/14 てら・やす第3回展於静岡谷島屋書店（-19）。
8/15 平井俊男展於清水中電ショールーム（-21）。（毎日静岡中部版8/14, 朝日静岡版8/15, 読売静岡B版8/16）
8/17 咲江・樋口・山口部展於浜松ナカマラ画廊（-24）。（於富士宮美術館9/9-9）。（浜松民報8/17,20, 朝日遠州版8/19, 読売静岡B版8/9）
8/18 佐々木謙二展於富士山陽堂（-22）。（毎日静岡中部版8/19）
8/19 イタリア武具美術展於静岡松坂屋（-30）。（朝日御用, 静岡,遠州版8/18,20, 静岡8/19, 読売静岡B版8/20）
8/19 武藤セイ子個展於沼津丸運ビル（-21）。（沼津朝日8/8, 20,26）
8/21 鈴木新一展於清水戸田書店（-31）。（清美協no.28）
8/21 大坪昌平・浦原肇二人展於静岡扇子屋（-31）。（毎日静岡中部版8/21, 朝日静岡版8/21, 読売静岡B版8/22,29, 静岡8/28）
8/25 グループ大村デザイン展於県民会館（-30）。（毎日静岡中部版8/21,25, 読売静岡B版8/28）
8/28 秋野不恵展於東京格近代画廊（-9/8）。（朝日18/24）
8/28 沢村美佐子展於東京格近代画廊（-9/8）。
8/2 第2回観光芸術展於東京歴史画廊。中村宏。
9/1 第49回二科展於東京都美術館（-20）。
9/1 北川民次『三人の女客』『花』（静岡9/10）
9/1 新入選者（朝日静岡,遠州版8/29）
9/1 第49回院展於東京都美術館（-20）。
9/1 中島処多『室戸町』鈴木三雄『赤蜂』鈴木大麻『熱帯花鳥』
9/1 人選者。（毎日静岡中部版8/31, 読売静岡B版8/31）
9/1 小林義司個展於静岡扇子屋（-9）。（読売静岡B版9/1, 静岡9/3）
9/1 グループ東展於浜松市立図書館（-6）。（浜松民報8/29,9/2, 朝日遠州版9/1）
9/ グループ3人展於清水戸田書店（-13）。
9/ グループ中部展於静岡中部版9/3）
9/2 静岡県水彩画協会第14回展於県民会館（-7）。（浜松民報8/31, 読売静岡B版9/1, 朝日静岡版9/3）
9/3 鈴木村一展於清水中電ショールーム（-8）。（毎日静岡中部版9/3, 朝日静岡版9/3, 読売静岡B版9/4）
9/8 羊羹会展於静冈吉見書店(-13)。（毎日静岡中部版9/5,読売静岡B版9/8,朝日静岡版9/11）
9/10 渡辺照夫-柴田哲男二人展於清水中電ショールーム(-15)。（静岡9/10,朝日静岡版9/10）
9/11 望月隆男個展於静岡屋子屋(-20)。（静岡9/10,毎日静岡中部版9/10,読売静岡B版9/11,15）
9/13 世界製名作展於静岡市立図書館(-10/3)。（静岡9/13,19,朝日静岡版9/25）
9/15 第3回インターナショナル展於東京日本橋三越(-27)。（北川民次《百合》,工場の昼休み）
9/15 秋野不矩展於東京日本橋高島屋(-20),《平版》（美術年鑑S.40,朝日9/15）
9/15 武蔵野美術大学校友展於静岡吉見書店(-20)。（静岡9/17,毎日静岡中部版9/18,朝日静岡版9/19,読売静岡B版9/19）
9/16 七丈南畑個展於県民会館(-30)。（毎日静岡中部版9/9,20,朝日静岡版9/25）
9/ 岡崎幸彦展於清水中電ショールーム(-11）。（読売静岡B版9/20）
9/ 串田孫一淡彩展於浜松ナカムラ画廊(-25)。（富士宮美術館10/8-15）。（宮城一郎,雨田光平,賛助出品。（毎日静岡西部版9/22,朝日遠州版9/22,浜松民報9/24,静岡10/1）
9/20 戦後の現代日本美術展於神奈川県立近代美術館(-11/8)。（北川民次,「築地の工場風景」（メキシコ市場の一隅）高島達四郎《熱海眺望》（静物）
9/21 柏木俊一展於三島ララ洋菓子店(-10/2)。（三島民報9/25）
9/21 杉山栄次郎個展於静岡屋子屋(-30)。（毎日静岡中部版9/25）
9/22 第28回新生作展於東京都美術館(-10/10)。（秋野不矩《少女（ガンジス河畔の少女）》掛井五郎《ハバ》出品。（日本美術年鑑S.40）
9/ 小林等・大井秀夫-富谷謙三郎三人展於静岡美術館(-27)。（毎日静岡中部版9/23,静岡9/25）
9/23 秋野不矩個展於浜松商工会館(-27)。（浜松民報9/15,24,朝日遠州版9/23）
9/29 静岡県美術家連盟第1回展於県民会館(-10/4)。（朝日静岡版9/30,読売静岡B版9/29,10/1）
9/29 六灯会第8回展於浜松松樹(-10/4)。（浜松民報9/29,30,10/5,毎日静岡西部版9/29,10/5）
9/ 杉山良雄東海道新幹線スケッチ展於東京交通博物館(-31),静岡松坂屋(-10/8-10）。（朝日静岡版9/5,毎日静岡中部版9/26,静岡9/26）
9/29 朝倉聖子彫刻個展於静岡堀町(-10/4)於浜松商会館(-10/5)（静岡9/29,10/1,浜松民報10/5）
10/1 増田大正油絵展於東京北堂教保館(-7)。（静岡10/1,読売静岡版10/6,9）
10/ 吉野不二太郎展於県民会館(-9)。（朝日静岡版10/2,毎日静岡中部版10/6）
10/ 堤達男《靴と帯》他個展（静岡10/7）
10/2 東京オリンピック記念特別展於熱海美術館(-31)。（熱海8/28）
10/6 新槐樹社展於静岡吉見書店(-11)。（毎日静岡中部版10/6,読売静岡B版10/9）
10/6 後藤一夫展於浜松松塚(-）。（浜松民報9/30）
10/8 サロン・デ・クリエート第3回展於静岡工業美術館（-11）。（静岡9/15,10/6,9,毎日静岡中部版10/6,朝日静岡版10/6,読売静岡B版10/7）
10/11 保坂昌男油絵個展於清水中電ショールーム(-17）。（清美協no.30）
10/11 三木福喜新作展於静岡屋子屋(-18)。（静岡10/17）
10/12 依田寿久・志茂武彦-前沢曽紀九三人展於東京都中央公論画廊(-18）
10/12 斎藤喜一展於東京文博春秋画廊（-18）。（朝H1/12）
10/12 伊藤隆史個展於清水戸田書店（-18）。（清美協no.30）
10/12 第18回二紀会展於東京都美術館（-30）。（佐野繁次郎《街》（どっかへ行く））入選者発表。（静岡10/9）
10/12 第32回独立展於東京都美術館（-30）。（山道栄助《64・JA》〈64・OS〉）入選者発表。（静岡10/9,読売静岡B版10/9）
10/13 青木達弥ヨーロッパスケッチ展於静岡美術館（-18）。（朝日静岡版10/12,毎日静岡中部版10/13,静岡10/14,読売静岡B版10/15）
10/ アリエ会第4回展於静岡美術館（-18）。（静岡10/14）
10/19 前田守一小品版画展於清水戸田商店。(25)（静岡10/18,19,20,静岡版B10/22,毎日静岡中刊B10/23,静美書B30）
10/19 勉使河原倉淵講演会於浜松聴講館。
（浜松民報10/7）
10/21 北川民次の画展於東京国際画廊（28）。
（朝日10/19）
10/23 松永哲於版画展於静岡扇子屋（31）。（毎日静岡中刊10/22,朝日静岡版10/22,静岡10/24,読売静岡B10/27）
10/25 土佐川独步展於東京親書画廊（11/5）。
10/ 写実派協会展於静岡吉見書店（11/2）。（毎日静岡中刊B10/29,読売静岡B10/31）
11/1 第7回乃於東京都美術館（12/6）。
野島清枝（姉妹）藤本虎一良（塔の有る屋）澤田政廣（湖畔に立つ橋（水浴する木の花咲く橋））杉本武一（肖像）和野親光（裸婦）土屋達男（母）平野敬吉（楽園）和田金剛（人）二橋美衡（影の秋草）（日本美術年鑑S.40,静岡11/6,12）沖六鶴，審査員。
（静岡6/10）館野親光（裸婦）特選。（刊読売静岡版10/21,朝日静岡版10/27,28,静岡10/28）
11/1 日下泰治展於伊東中央ギャラリー（5）。
（毎日静岡中刊10/29,朝日絵葉版11/1）
11/1 増気二，巻本辰夫二人展於静岡扇子屋（10）。（読売静岡版11/3,毎日静岡中刊11/4,静岡11/5）
11/3 山根七郎治，県知事表彰。（静岡10/25）
11/3 壮炎会第19回展於浜松松栄（8）。（毎日静岡西部版11/4,朝日絵葉版11/4,浜松民報11/10）
11/4 澤田政宣（名取萊一胸像）除幕式於沼津大手町会館。（沼津朝日8/21,20/10,11/3,沼津毎日10/29,
黎明11/3,静岡11/4,5,毎日静岡中刊11/5,朝日絵葉版11/8,沼津静岡11/9）
11/6 高木箚レリーフ展於東京松屋（11）。
11/9 赤堯尚展於沼津市公会堂。（15）。（沼津11/6,沼津毎日11/8,朝日絵葉版11/10,毎日静岡中部刊11/11）
11/10 清水秀展於浜松松栄（15）。（浜松民報11/10,12,朝日静岡11/12,毎日静岡西部刊11/12）
11/11 静岡県芸術祭第4回展於県民会館・静岡松坂屋・田中屋・吉見書店（15）。（審査員：杉生一郎，森芳雄，
村内克，加山又造，間野準一郎，小池岩太郎，荻野
康見，上田桑雄。（静岡7/31,11/7,10/12,16,浜松民
報7/31,8/22,沼津毎日10/21,毎日静岡中,西部版
10/29,11/11,朝日絵葉,静岡,遠州版7/31,11/10,12,読売静岡版11/11,14）
11/11 枡山茂版画第4回展於静岡扇子屋（20）。
（読売静岡版B11,11,静岡11/13）
11/12 上野久美子展於沼津靜岡新聞沼津支局（14）。
（静岡11/13）
11/12 江崎金彦カラー写真展於静岡松坂屋（15）。
（静岡11/12）
11/12 内山北郎陶展於浜松鴨江寺（14）。
（朝日遠州版11/10）
11/14 第4回東京国際版画ビエンナーレ於東京国立近代美術館（12/20）。北川民次《愛情》
11/14 良明会第2回展於浜松ナカムラ画廊（20）。
（浜松民報11/16,17朝日遠州版11/17）
11/15 澤田政廣（雪の会生松本雄次郎肖像）公開於東京
澤田政宣自宅アトリエ。《美術年鑑S.40》
11/15 中村敷とその友人展於神奈川県立近代美術館
（12/20）。成宮一念《冬月》
11/16 眞田和茂展於清水中電ショールーム（21）。
（朝日静岡版11/18,読売静岡B11/19,静岡11/20）
11/17 遠州美術会員小品展於浜松松栄（23）。（毎日静
岡西部版11/14,浜松民報11/24）
11/17 三行舎第15回展於浜松商工会館（19）。
（浜松民報11/9,19,朝日遠州版11/17）
11/21 成瀬康展於沼津マルモール（23）。
（朝日絵葉版11/21,沼津朝日11/22）
11/24 佐野繁次郎展於東京文藝春秋画廊・中林画廊・
フォルム画廊（12/5）。《友だちの画家》（日本美術年
鑑S.40）
11/25 あーとぐるーぶ独第2回展於県民会館（12/1）。《読売
静岡版11/6,27,29,朝日静岡版11/24,静岡12/3）
11/ 堤達男《柵の東馬》除幕式於御殿場。
（読売静岡版9/26）
11/30 伊豆民俗館開館。（沼津毎日11/20,12/5）
/ 堤達男《慈母親音像》於沼津。（静岡S38.6/11）
12/1 矢呂長治・杉山有二人展於靜岡谷鳥屋書店（7）。
（毎日静岡中部版11/29,読売静岡版B12/1,3,4,6, 
静岡12/2,3,4）
12/1 林鶴雄漫游作品展於浜松ナカムラ画廊（7）。
（浜松民報12/3.7）
12/ 中部版S39.12/23, 静岡1/1, 7, 朝日静岡版1/7, 読売静岡版1/9, 16）
1/5 第16回選抜秀作美術展於東京日本橋三越（-10）。
北川民次（唯美）。
1/5 長谷川竜石, 読売（沼津毎日S39.12/3）
1/11 大江直七展於清水久松（-31）。（静岡1/13）
1/14 新春日本画壇展於沼津大手町会館（-17）。
（静岡1/15, 朝日駿豆版1/16）
1/15 岡本精一郎作品展於富士し陽堂書店（-20）。
（静岡1/14）
1/15 浜松美術家選抜第1回展於浜松市民会館（-18）。
（朝日駿豆版1/17, 浜松民報1/20）
1/15 江崎武夫, 澤洲旅行より寄稿。（静岡1/16）
1/21 曽根浩二・サイゴンへ出発。（静岡1/26, 5/13, 7/1）
1/23 虹人会第6回展於県立会館（-30）。（朝日静岡版1/19, 毎日静岡中部版1/20, 読売静岡版1/20, 26, 静岡1/22）
1/28 現代日本画壇を代表する新作第2回展於静岡美術画廊。（静岡S39.12/20, S40.1/28, 毎日静岡中部版1/27, 朝日静岡版1/27, 3/13, 静岡1/28, 読売静岡B版1/28, 2, 3）
1/29 戦中世代の画家展於東京国立近代美術館（-2/28）。
野田好子出品。
1/29 東海道塩査板画展於沼津西武（-2/3）, 斎藤松坂（2/18, 23）, 斎藤松坂（4/20, 25）, 斎藤松坂（15-19）, 斎藤松坂（5/19, 15）, 斎藤松坂（6/26, 30）。（沼津毎日1/14, 30, 静岡1/26, 30, 2/16, 4/16, 19, 5/13, 6/23, 聖蹟駿豆, 斎藤, 専州版1/29, 新民1/30, 駿豆版2/2, 17, 5/16, 静岡版2/23, 6/26, 佐州版4/23, 毎日静岡東部版1/21, 2, 3, 18, 5/2, 中部版2/18, 新民S39.6/22, 読売静岡B版2/18）
2/1 サヨン・ド21世紀画壇第4回展於静岡扇子屋（-15）。
（読売静岡B版2/1, 7, 聖蹟駿豆, 静岡版2/2, 毎日静岡中部版2/3, 静岡2/4）
2/ 現代日本画壇特展新作展於静岡美術画廊（-15）。
（読売静岡B版2/3）
2/ 鈴木慶之展於東京国立近代画廊（-7）。
2/ 杉山長雄展於静岡書院（-7）。（毎日静岡中部版1/27, 朝日静岡版1/27, 読売静岡B版2/1, 6）
2/ 大庭祐輔展於浜松松栄（-7）。（毎日速州版1/31, 浜松民報1/28, 2/12）
1965 昭和40年
1/1 新春作品第8回展於静岡扇子屋（-31）。（毎日静岡
2/4 日本伝統武具名宝展於静岡松坂屋 (-14)。（静岡1/22,2/2,4,5,10,11,毎日静岡中部2/4,読売静岡B版2/5,9）
2/8 小川安夫,山田に滞在 (-12)。（朝日倶楽部,静岡版2/13）
2/9 高橋幸子自己書写祭於静岡市新市街 (-14)。（毎日静岡中部2/7,読売静岡B版2/9,13,朝日静岡版2/9,静岡2/11）
2/10 塚本雄作・荒井孝・斎藤長和・森川良男近作洋画展於阪神丸ビル静岡新聞坂本支局 (-13)。（讀売朝日2/10,静岡2/11,黎明2/11）
2/10 現代洋画入門作家新作展於浜松ナカムラ画廊 (-17)。（浜松民報2/11,毎日静岡西部2/12,朝日遠州版2/12）
2/16 青年作家[県 - 高野 - 伊藤三雄]展第2回展於浜松松梅 (-21)。（浜松民報2/19,毎日静岡西部2/19）
2/16 武政安子展於浜松松梅 (-21)。（朝日遠州版2/14,毎日静岡西部2/16,浜松民報2/19,22）
2/17 現代的日本美術展於県民会館 (-23)。（読売静岡版1/18）
2/18 柴田隆二「春の足音」（静岡2/18）
2/18 杉本宗一「大谷佳多邦畫像」展募式於清水公園。（静岡3/27,4/20,12,18,朝日靜岡版3/29,毎日静岡中部2/9）
2/18 ブラジル舞台美術展於県民会館 (-23)。（毎日静岡中部2/18）
2/20 沼津美術協会小品展於沼津赤のれん (-28),色紙展 (3/2,8),デッサン展 (3/10,21)。（沼津毎日2/21,黎明2/21,沼津2/22,沼津朝日2/23）
2/24 障壁展於静岡中央公園 (-28)。（読売静岡版2/23,24）
2/25 柴田隆二「時間」（静岡2/25）
2/25 柴田哲男水彩画展於清水中電ショールーム (-3/2)。（毎日静岡中部2/23,読売静岡B版2/27,清美協no.34）
3/1 和田金剛,カンボジア他を3ヶ月の予定で旅行。（沼津朝日2/17）
3/1 光風会静岡支部第1回展於清水市青少年会館（-7）。（静岡2/8,毎日静岡中部2/10,3,4,朝日静岡版3/5,清美協no.34）
3/1 鈴木裕常小品展於靜岡扇子屋 (-10)。（毎日静岡中部2/3,読売静岡B版3/6）
3/2 鈴木慶則個展於東京春美術展館（-7）。
3/2 杉山良雄德川家康遺跡スケッチ展於静岡産業会館（-7）。（読売静岡B版3/6,1,4,24,静岡3/3,毎日静岡中部2/23,3/5,朝日静岡版3/3）
3/2 市野三接展於浜松松梅（-7）。（朝日遠州版2/3,浜松民報3/2）
3/3 第25回美術文化協会展於東京都美術館（-16）。
3/3 第6回サランボデジー作品展於東京国立近代美術館（-14）。（静岡3/4,11）
3/6 柏木俊一色紙展於沼津市上土センター赤のれん（-15）。（沼津毎日3/6,朝日静岡版3/6）
3/9 緑青会第1回展於浜松松梅（-14）。（朝日遠州版3/7,浜松民報3/10）
3/11 市野三接展於東京都美術館（-16）。
3/11 柏木俊一色紙展於沼津市上土センター赤のれん（-15）。（沼津毎日3/6,朝日静岡版3/6）
3/12 沢村美作子エリジェットスケッチ展於東京小田急（-17）。（朝日3/8）
3/12 田中栄展於浜松彩画展（-31）。（朝日遠州版3/11,14,毎日静岡西部3/11,浜松民報3/11）
3/13 杉本宗一「山口平右衛門胸像」展募式於焼津昭和通二区会堂。（静岡3/12,8/40,2,28,3/12,朝日静岡版2/3,14,読売静岡B版3/14）
3/14 現代美術連合美術展於浜松商工会議所（-15）。（朝日遠州版3/12,中部版3/12,朝日静岡版3/16）
3/15 野田好子展於東京サエグサ画廊（-20）。（朝日3/15）
3/7 朝日静岡版3/16,23,24）
3/16 京都版画院展於浜松松梅（-21）。（朝日民報3/15,毎日静岡西部3/21）
3/18 野田好子展於東京サエグサ画廊（-20）。（朝日3/15）
3/18 池上春彦「春の野辺」土方小学校へ寄贈される。（朝日静岡版3/18）
3/18 第24回水彩展於東京都美術館（-31）。
3/18 入選者発表。（朝日3/12）
3/18 尾形月山「観音示現図」展募式於東京浅草寺。
3/21 淡津美術協会展於淡津赤のれん(-31)。（淡津毎日3/24）
3/21 山田安観光船はがき原画展於長崎市読書に(31)。（読売静岡B版3/24, 朝日静岡中部版3/24,静岡3/25）
3/21 さんそくからす作品展於浜松工芸師会館(-28)。（見崎泰中, 仲山進用, 久邇記子, 柳澤記子）。（浜松民報3/9, 27, 朝日遠州版3/24）
3/22 太田京子個展於東京中央公論画廊（-27）。（静岡3/18）
3/24 新象静岡支部七人展於東京銀座画廊（-29）。 （浜松民報3/20）
3/29 佐藤真一展於浜松ナカムラ画廊（-4/4）。（浜松民報3/30, 朝日遠州版3/30）
3/30 志木町松尾紀展於沼津市公会堂（-4/2）。（沼津朝日3/28, 30, 朝日駿豆版3/30, 5/9, 静岡4/1）
伊東深水小品展於浜松工芸師会館（-4/2）。 （朝日遠州版3/30）
3/31 久能山東照宮博物館開館。（静岡S39.5/16, S40.1/31, 4/1, 10/4, 朝日静岡, 中部, 朝日遠州版4/1, 15, 16, 17, 18, 20, 22, 24, 25, 27, 29, 5/2, 4, 5, 7, 8, 9, 11, 12, 朝日駿豆, 静岡, 朝日遠州版4/2, 4/1, 13）
第33回日本版画家会展於東京都美術館（-19）。 （静岡4/2, 15）
4/1 第15回モダニズム展於東京都美術館（-19）。 （静岡3/30）
4/1 近藤至弘作品展於長崎市読書（-10）。 （静岡4/2, 朝日静岡中部版4/3, 朝日駿豆版4/3, 読売静岡B版4/6）
4/2 第51回美術展於東京都美術館（-17）。 （朝日駿豆, 中部版4/1）
4/6 鈴木重康個展於東京中央画廊（-10）。（浜松民報3/29）
4/6 仲矢会第20回展於浜松彗星（-11）。（朝日静岡中部版4/6, 朝日遠州版4/8, 浜松民報4/12）
4/8 久野繁・松本美・鈴木義平三人展於浜松彩画堂（-13）。（朝日遠州版4/8）
4/10 和田均作（井部直司巨像）除幕式於淡津工業高等専門学校。（静岡4/11, 沼津朝日4/2, 聖明4/3）
4/10 千葉県第9回作品展於沼津上土センター街赤のれん（-20）。（静岡4/15, 沼津朝日4/10, 沼津朝日4/11）
4/10 浜松チャールズ会発足。（浜松民報3/31, 5/10）

4/11 第13回写真展於東京都美術館（-29）。 淺井行雄（裸婦写真）長崎建治（愛）澤田政遠（見） 淡路市 Looks at the future, 静岡近現代美術展於静岡市（-27）。 （毎日静岡東部版4/7, 朝日駿豆版4/14, 原作目録）
4/11 山本雅彦（高崎竹堂肖像）除幕式於清水鉄舟寺。 （朝日静岡版4/7, 浜松4/11, 朝日静岡中部版4/13, 17）
4/11 丹羽勝次デッサン小品展於静岡市讀書（-20）。 （毎日静岡中部版4/10, 朝日静岡B版4/11, 読売静岡B版4/14, 16）
4/12 保土昌邦展於清水中電ショールーム（-16）。 （毎日静岡中部版4/11）
4/13 鈴木三朝展於浜松彗星（-18）。 （每日静岡西部版4/2, 浜松民報4/19）
4/16 織田駿吉展於浜松彩画堂（-28）。 （朝日遠州版4/13, 浜松民報4/20）
4/17 津波書道展個展於清水中電ショールーム（-19）。 （静岡4/16）
4/18 芋沢昔春個展於東京紀伊國屋画廊（-24）。 （朝日4/19, 沼津朝日4/20, 30）
4/20 望月一-----原田英雄展於清水中電ショールーム（-）。（朝日靜岡版4/20）
4/22 第39回国画展於東京都美術館（-5/8）。 淺木達弘（ゴンベツの寺院）浜川栄治（海女達）宮一見（平野夕水）八々谷夏雲（八々谷爆発）伊藤勉（これからの夜）尾西二雄（熊谷大輔）雨乞（山口源（雨乞）遊歩）脇沢信介（野木文著物） （披露文著物）出展。
初入選者。（朝日駿豆, 静岡4/21）
4/22 第42回春陽展於東京都美術館（-5/8）。 小栗哲郎（向う）山出。
入選者。（朝日静岡版4/20）
4/22 美術会展於熱海長崎屋（-27）。 （伊豆毎日4/22, 朝日静岡東部版4/24）
豆版4/25，速州版4/27，静岡版5/12,22,27,鍬豆，静岡，速州版5/15，読売静岡B版5/12,15,23,28）

4/22 安達経・斎藤豊・久保田武藤・鈴木栄一展於浜松
商会会館（-25）。（浜松民報4/22）

4/24 甲斐義成逝去，享年71。（静岡4/26）

4/25 日華美術友展於台北国立歷史博物館。（）。
増田大男，望月利，下井泰輔他出品，吉野不二
太郎訪日。（静岡4/29,30,5/20,27）

4/29 小山勇雄展於浜松彩画堂（-5/4）。（浜松民報4/26，
朝日速州版4/28）

4/29 矢原放生《聖観音尊摩利震》於長江公園。（浜松民報
4/17,30,朝日速州版7/13,544.8,8,静岡S44.8/7）

5/1 芦沢晋吾展於沼津上土センター街（-10）。
（沼津朝日5/2,沼津5/4,静岡5/6）

5/2 加田裕子版画個展於静岡扇子屋（-10）。（毎日静岡
中部版5/2,静岡5/6,朝日速州版5/1,9,読売静岡
B版5/9）

5/2 沖六鶴古稀展於県民会館（-4）。（毎日静岡中部
版5/2,朝日速州版5/2,読売静岡B版5/4）

5/3 柴田俊・柴田秀夫・柴田秀二展於清水中電ショールーム（）。（毎日静岡中部版5/2,朝日速州版5/2）

5/3 月刊《創元会浜松版》第8回展於浜松松菱（-9）。（朝日
速州版5/4,朝日速州版5/5,浜松民報5/6,10）

5/5 井上三郎展於浜松彩画堂（-11）。
（朝日速州版5/5,浜松民報5/8,10）

5/6 重岡建治別展於伊東マルコー喫茶店（-12）。
（朝日徳版4/14,毎日静岡東部版5/5）

5/10 第8回日本国際美術展於東京都美術館。（-30）。
北川次次《せつも》佐野繁次郎《ある画家》野田好子
《無辺山口原》（日本美術年鑑5.41,静岡5/20）

5/1 伏見重雄小品展於静岡扇子屋（-20）。（静岡5/13,
毎日静岡中部版5/13,15,朝日静岡版5/15,鍬豆，静
岡，速州版5/16）

5/11 小川竹生展於浜松松菱（-16）。（朝日速州版5/11）

5/11 静岡奎星展於浜松松菱（-16）。毎日静岡西部
版5,浜松民報5/8,21,静岡5/13）

5/13 鈴木三郎《黃昏》浜松市へ寄贈。
（浜松民報5/13,毎日静岡西部版5/14）

5/13 福井市郎展於浜松彩画堂（-18）。朝日速州版5/12）

5/14 近代日本の画史展於東京国立近代美術館
（-6/6）。北川次次《大地》

5/14 山根七郎治 仏頂子回顧展於県民会館（-16）。　
（浜松民報5/7,毎日静岡西部版5/9,朝日速州版5/9，
中部版5/11,静岡5/14,27,読売静岡B版5/14,15）

5/17 新島静岡支部展於清水中電ショールーム（-23）。　
（毎日静岡中部版5/15,読売静岡B版5/21）

5/18 柴田俊一展於沼津東電サービスセンター（-23）。
（沼津5/19,沼津朝日5/20）

5/18 遠州美術第9回展於浜松松菱（-23）。（朝日速州版
5/18,20,29,6/1,浜松民報5/19）

5/18 熊谷光夫展於浜松松菱（-23）。毎日静岡西部版
5/18,朝日速州版5/18,浜松民報5/19）

5/19 加藤大亀日本画個展於県民会館（-26）。　
（静岡5/20,毎日静岡中部版5/21,朝日徳，静岡，速州版5/23）

5/20 北川次次展於東京飯田画廊（-29）。朝日5/26）

5/20 今泉一展於靜岡彩画堂（-6/4）。（浜松民報5/21）

5/21 小林義司小品展於静岡扇子屋（-31）。毎日静岡中
部版5/19,朝日静岡版5/20,読売静岡B版5/21,26,　
静岡5/27）

5/25 岡本太郎講演会於清水市公会堂。（静岡5/23）

5/28 よこいたいすく童画図絵展於沼津いさみや（-6/6）。　
（沼津朝日5/26,沼津5/28,朝日徳版5/28）

5/5 高津川郁作品展於静岡安心堂（-30）。静岡5/29）

5/5 一土展於静岡谷間屋書店（-6/2）。　（朝日徳，静
岡，速州版5/30,静岡5/31,毎日静岡中部版6/1）

5/29 静岡美術家展第2回展於県民会館（-6/2）。　（静岡
4/29,5/30,毎日静岡中部版5/13,19,6/1,朝日徳，静
岡，速州版5/18,30,6/1,読売静岡B版5/29,6/1,3）

5/31 藤本東一展於東京動画効（-5/5）。朝日5/31）

5/31 土井俊泰展於東京いとう画廊（-6/5）。　（朝日5/31）

6/1 岡本昭彦動画のベテナム写真展於静岡中屋（7）。
於浜松松菱（22-27）。（静岡6/1,3,毎日静岡東，中
部版6/3,西部版6/22,23）

6/1 丹羽勝次個展於静岡吉見書店（-13）。　（毎日静岡中
部版6/8,朝日静岡版6/8,静岡6/10,17,読売靜岡B版
6/11）

6/11 木村素彦造形写真展於県民会館（-16）。朝日徳，　
静岡，速州版6/6,毎日静岡中部版6/8,静岡6/11,読
売静岡B版6/11）

6/11 柴田俊一展於靜岡扇子屋（-20）。読売静岡B版
6/10,静岡6/17）

6/1 杉山良雄徳川家康遺跡スケッチ展於清水戸田書
7/21 鈴木重一展覧会於浜松松楼(25)。《浜松市民7/20,8/4,毎日静岡西部版7/20,中日遠州版7/21》
7/22 板谷房展於静岡松坂屋(27)。東京日本橋三越(7/14-18)。大阪阪急8/2-8。《静岡6/24,7/22,23,24,26,27,8/5,読売静岡B版7/23》
7/23 相澤常樹・武藤セイ子二人展於沼津静岡新聞沼津支局(26)。《沼津朝日7/20,静岡7/22,29》
7/27 竹内勝行展於浜松松楼(31)。《朝日遠州版7/27,浜松民報8/4》
7/ 岩田正己・望月春江・森白南展於静岡安心堂(8/1)。《朝日駿豆,静岡版8/1》
7/28 堤達男「狩野川放水路完工記念レリーフ」(静岡7/5,8,28)
7/28 佐藤隆功陶術展於県民会議(8/3)。《毎日静岡東,中,西部版7/27,30,朝日駿豆,静岡,遠州版8/1》
7/ 西原光子作品展於県民会議(8/1)。《朝日静岡版7/30》
7/29 杉山良雄大隅根戦線吹雪画展於静岡市産業会館(8/2)。《毎日静岡東,中,西部版7/23,読売静岡B版8/1》
8/1 桃源郷クラブ完成於小山(静岡8/6)
8/ 河合亭小品展於静岡県立(10)。《読売静岡B版8/3,4,朝日静岡版8/3,毎日静岡中部版8/3,静岡8/5》
8/6 自由美術グループ展於浜松彩画堂(10)。《朝日遠州版8/4,朝日駿豆,静岡,遠州版8/3,浜松民報8/11》
8/ 望月清浄展於清水戸田商店(14)。《毎日静岡中部版8/7,読売静岡B版8/7,清美協no.40》
8/ 県民美術展於第11回於県民会議(13)。《読売静岡B版8/10,11》
8/11 サロン21世紀12人小品展於静岡県立(20)。《朝日靜岡版8/10,静岡8/13,読売静岡B版18》
8/14 平井俊男展於清水中電ショールーム(17)。《毎日静岡中部版8/17,清美協no.40》
8/15 小野忠次版画展於浜松ナカムラ画廊(22)。《朝日遠州版8/14,22,中日遠州版8/15,浜松民報8/17》
8/20 土居川真央【松本正夫】逝去。48歳。
(日本美術年鑑5,41)
8/20 日本水彩画会講習会於下田(22)。講師:石井鶴三・小山信夫(静岡8/23)
8/21 山本正次展於静岡県立(31)。《朝日静岡版8/20,静岡県立8/20》。
7/21 広住道夫陶器展於浜松松楼(20)。《静岡7/22,読売静岡B版7/24,28,29,30》
7/22 鈴木正一展於浜松松楼(25)。《浜松市民7/20,8/4,毎日静岡西部版7/20,中日遠州版7/21》
7/22 板谷房展於静岡松坂屋(27)。東京日本橋三越(7/14-18)。大阪阪急8/2-8。《静岡6/24,7/22,23,24,26,27,8/5,読売静岡B版7/23》
7/23 相澤常樹・武藤セイ子二人展於沼津靜岡新聞沼津支局(26)。《沼津朝日7/20,静岡7/22,29》
7/27 竹内勝行展於浜松松楼(31)。《朝日遠州版7/27,浜松民報8/4》
7/ 岩田正己・望月春江・森白南展於静岡安心堂(8/1)。《朝日駿豆,静岡版8/1》
7/28 堤達男「狩野川放水路完工記念レリーフ」(静岡7/5,8,28)
7/28 佐藤隆功陶術展於県民会議(8/3)。《毎日静岡東,中,西部版7/27,30,朝日駿豆,静岡,遠州版8/1》
7/ 西原光子作品展於県民会議(8/1)。《朝日静岡版7/30》
7/29 杉山良雄大隅根戦線吹雪画展於静岡市産業会館(8/2)。《毎日静岡東,中,西部版7/23,読売静岡B版8/1》
8/1 桃源郷クラブ完成於小山(静岡8/6)
8/ 河合亭小品展於静岡県立(10)。《読売静岡B版8/3,4,朝日静岡版8/3,毎日静岡中部版8/3,静岡8/5》
8/6 自由美術グループ展於浜松彩画堂(10)。《朝日遠州版8/4,朝日駿豆,静岡,遠州版8/3,浜松民報8/11》
8/ 望月清浄展於清水戸田商店(14)。《毎日静岡中部版8/7,読売静岡B版8/7,清美協no.40》
8/ 県民美術展於第11回於県民会議(13)。《読売静岡B版8/10,11》
8/11 サロン21世紀12人小品展於静岡県立(20)。《朝日靜岡版8/10,静岡8/13,読売静岡B版18》
8/14 平井俊男展於清水中電ショールーム(17)。《毎日静岡中部版8/17,清美協no.40》
8/15 小野忠次版画展於浜松ナカムラ画廊(22)。《朝日遠州版8/14,22,中日遠州版8/15,浜松民報8/17》
8/20 土居川真央【松本正夫】逝去。48歳。
(日本美術年鑑5,41)
8/20 日本水彩画会講習会於下田(22)。講師:石井鶴三・小山信夫(静岡8/23)
8/21 山本正次展於静岡県立(31)。《朝日静岡版8/20,静岡県立8/20》。
8/22 大熊正邦色紙展於清水戸田書店（-28）。（静岡8/18,朝日静岡版8/22,読美版no.40）
8/24 山下太郎・山下邦男展於浜松杉茂（-29）。浜松民報8/19,28,朝日絵豆,静岡,遠州版8/22,静岡8/23,中日遠州版8/24,26)
8/26 太田昭徳展於清水中電ショールーム（-31）。（読美版no.40）
8/26 県 wäh三郎・伊藤輝彦・武政安子展於浜松彩画堂（-31）。（朝日遠州版8/25,中日遠州版8/27,浜松民報8/25,31）
8/30 沢村美佐子個展於東京資生堂ギャラリー（-9/4）。（朝日8/31）
8/30 キュウ・ド・コション第1回展於静岡吉見書店（-9/5）。（毎日静岡新聞8/30,読売静岡版8/29）
8/31 形象派静岡西部展於浜松杉茂（-9/5）。（朝日絵豆,静岡,遠州版8/29）
9/1 第50回千葉展於東京都美術館（-20）。日本民新聞「二十二月の悲しみの夜」（中日10/6）
大木克己,入選。（静岡9/9,新入選者,毎日静岡中部版8/29,朝日絵豆,静岡,遠州版9/1）
9/1 第50回静岡展於東京都美術館。（-20）。
中島多茂男。（静岡8/31）
9/3 木野伊孜子個展於浜松彩画堂（-7）。
（朝日遠州版9/3）
9/3 静岡在住作家による静岡スケッチ4人展於東京松屋（-15）。
9/4 院展芸術歩き（戦前）展於東京国立近代美術館（-10/10）。
新藤浩一、「巅頂」、「大山夜漁」、「雨余貯水」、「中村岳陵」「輪廻物語」、「杜廓斎」、「砂丘」
9/7 院展芸術歩き（戦後）展於東京銀座松坂屋（-17）。
中島多茂男。(静岡8/31,静岡9/7,9,10)
9/7 吉野不二郎・吉野由生展於県民会館（-11）。
吉野不二郎,吉野由生,静岡。（毎日静岡中部版9/9,朝日静岡版9/11,読売静岡B版9/11）
9/7 形象派4人展於浜松彩画堂（-14）。
9/9 望月長視展於清水戸田書店（-11）。
（毎日静岡中部版9/9,朝日静岡版9/11,読売静岡B版9/11）
9/11 望月長視展於清水戸田書店（-12）。
（毎日静岡中部版9/8,朝日静岡版9/8,静岡9/9,読売静岡B版9/11）
9/12 保坂昌男個展於清水戸田書店。（毎日静岡中部版9/9,朝日静岡版9/9,読売静岡B版9/11）
9/15 大木克己写真展於静岡谷岡書店（-21）。静岡9/15,16,毎日静岡中部版9/9,朝日絵豆,静岡9/12,読売静岡B版9/15,16)
9/15 若尾和呂展於浜松彩画堂（-30）。
（朝日遠州版9/15,浜松民報9/19,28）
9/18 平尾花笠古希記念展於県民会館（-23）。静岡9/18,読売静岡版9/21)
9/21 鷹坂博規・鷹坂せつ子小品展於静岡扇子屋（-29）。
（静岡9/21,24,毎日静岡中部版9/25,読売静岡B版9/29,10/1）
9/22 第29回新制作展於東京都美術館。（-10/10）。
秋野不矩。（毎日新聞）
9/22 第27回水木展於東京都美術館。（-10/13）。
入選者。（毎日静岡東部版9/21）
9/22 第11回一陽展於東京都美術館。（-10/13）。
入選者。（毎日静岡東部版9/21）
9/23 上田臥牛個展於東京日動サロン（-30）。
（朝日9/20）
9/26 佐野和夫色紙展於清水戸田書店。（-10/2）。
静岡9/25,30,毎日静岡中部版9/25,朝日靜岡B版9/26)
9/28 サロンド21世紀小品展於静岡産業会館（-10/1）。
（静岡9/25,27,毎日静岡中部版9/28,読売静岡B版9/29,10/2）
9/28 美術文化協会県支部展於浜松杉茂（-10/3）。
（朝日遠州版9/28,30,中日遠州版9/28,浜松民報10/2）
9/28 清水秀耕展於浜松杉茂。（-10/3）。
（浜松民報9/30,10/1）
9/30 館野観光「飛躍」公開於熱海駅。（朝日絵豆,静岡2/5,7,3/10,6,伊豆毎日6/1,7/1,9/5,18,30,10/1,読売静岡B版10/1）
9/30 保坂昌男展於清水松中電ショールーム。（-10/4）。
（静岡9/30）
9/ 伏木洋彩杯制作,藤枝一里山レストランに展示。
（静岡9/28）
10/1 サロンド21世紀第7回展於県民会館（-5）。
（静岡9/10,1/2,読売静岡B版10/1,2）
10/1 椒鈴二斎展於靜岡扇子屋(-10)。（朝日靜岡，
東州版10/6, 読売静岡B版10/6, 静岡10/7）
10/1 北川民次展於東京大丸(-10/6)。（朝日10/4）
10/1 第1回現代日本影形展於山口県宇部市野外影形
美術館（31）, 勝野五郎出席。
10/3 慰切澄夫水彩展於清水戸田書店(-9)。
（朝日靜岡版10/3, 静岡10/7）
10/5 東國慶年展於清水中電ショールーム（8）。
（朝日静岡版10/5, 静岡10/7）
10/5 澤井清展於靜岡美術館記念館-10), 靜岡美術館記念
館（24）。（毎日静岡中部版10/6, 靜岡10/7, 靜岡10/21）
10/6 郡山日岡美術展第8回展於県民会館（9）。
（朝日静岡版10/1, 静岡, 遠州版10/3, 読売静
岡B版10/5, 毎日静岡中部版10/7）
10/9 大村克夫（長濱騏）原作披露於御殿場南高。
（静岡10/10）
10/ 月見里シュール展於清水中電ショールーム（15）。
（朝日静岡版10/12, 読売静岡B版10/13, 静岡10/15）
11/1 萬本辰展於静岡扇子屋（20）。（毎日静岡中部版
10/12, 読売静岡B版10/14, 靜岡10/15, 朝日靜岡
版10/16）
10/12 第4回国际形象展於東京日本橋三越（24）。
（朝日静岡版10/12, 読売靜岡B版10/14, 静岡10/15, 朝日靜岡
版10/16）
10/12 第33回独立展於東京都美術館（30）。
（毎日静岡版10/12, 読売静岡B版10/14, 静岡10/15, 朝日靜岡
版10/16）
10/12 第19回紀念展於東京都美術館（30）。
（毎日静岡版10/12, 読売静岡B版10/14, 静岡10/15, 朝日靜岡
版10/16）
10/12 六燈会第9回展於兵松松幸（17）。（朝日駿豆, 靜
岡, 遠州版10/12, 毎日静岡中部版10/12, 読売松
岡10/13, 20, 中日遠州版10/15）
10/12 塩沢逸平展於清水中電ショールーム（20）。
（朝日静岡版10/17）
10/16 岡本太郎・浮田克明・奇藤義重展於松松彩画堂
（11/2）。（朝日遠州版10/14）
10/19 森大造《渡辺保雄像》出展於渋谷町。
（毎日静岡東部版10/17, 朝日駿豆版10/19）
10/19 青美展於神奈川長崎（21）。（伊豆毎日10/13）
10/19 楨実派協会第23回展於静岡美術館（24），
（毎日静岡中部版10/16, 読売静岡B版10/19, 20, 朝日駿
豆, 靜岡, 遠州版10/24）
10/19 県工芸家協会第1回展於県民会館（23），
（毎日静岡中部版10/17, 読売静岡B版10/19, 朝日静岡版10/21）
10/21 石神白石書展於清水戸田書店（26），
（毎日静岡中部版10/17, 朝日静岡版10/21, 静岡10/21）
10/21 松本長三郎展於浜松市立図書館（24），
（中日遠州版10/21, 浜松市民報10/23, 27）
10/ 杉山有宮展於静岡婦人文化新聞社（31）。
（静岡10/28）
10/26 鈴木照之展於浜松松幸（31）。
（毎日静岡西部版10/27）
10/30 池田正司水彩展於清水戸田書店（11/5）。
（静岡11/4, 5, 毎日静岡中部版11/27）
11/1 第8回第日展於東京都美術館（12）。
中村岳陵（rico）野村清芸（母子像）塚田廣作（門）藤
本一良（江ノ島ヨットハーバー）澤田政廣（栃木）
杉本宗一（子供）館野親光（想堤達男＝ pense平野敬
吉＝平和への願い＝大久保陽子＝光芒＝日本美術
年鑑S.41*, 静岡10/26, 11/12, 11/12 2)
堤達男, 調査員に選ばれる。（毎日静岡中部版6, 8）
初入選者。（静岡10/26, 浜松民報10/27, 11/3, 静岡
11/11）
11/ 萩浦大悦作壁画於熱海浜浜ホテル。
（伊豆毎日11/2）
11/2 現代日本民芸展於静岡松坂屋（7）。
（静岡10/3, 11, 朝日静岡版11/5）
11/3 澤田政廣, 熱海市特別市民賞受賞。
（伊豆毎日10, 11, 3, 5）
11/3 加藤大雄日本画大師展於雅里根美術館（5），
（毎日静岡中部版11/2, 静岡11/3, 朝日静岡版11/2, 3, 
読売静岡B版11/3）
11/3 水野欣三郎《やらざりの像＝平和像》図著於
浜松市動物園。（朝日遠州版7, 10, 11/4, 浜松民報
7, 11, 11/2, 中日遠州版10/10）
11/3 藤本泰弘展於浜松彩画堂（9）。
（浜松民報11/3, 朝日遠州版11/4, 毎日静岡西部版
11/5）
11/4 加藤善九郎講演会於津浪大手町会館。
11/6 村松浩平色紙展於清水戸田書店（-12）。
（毎日静岡中部版10/29,朝日静岡版11/6）

11/9 市川正三透吹作品展於静岡吉見書店（-14）。
（毎日静岡中部版11/9,朝日静岡版11/10,静岡11/11,読売新聞B版11/11）

11/9 大道邦夫・作本太平・北原昭三郎・上野博展於浜松 excluded
（朝日静岡版11/7）

11/11 行動美術第20回展於浜松市民会館（-16）。
初の浜松展。（浜松民報7/22,11/6,10,19,中日速報版10/22,11,11,朝日新聞,静岡,遠州版11/7,14,每日静岡西部版11/9,13）

11/11 塚本広行水彩画展於静岡扇子屋（-20）。
（静岡11/5,18,朝日静岡版11/14,読売新聞B版11/16）

11/17 県芸術祭第8回展於県民会館・田中屋・松坂屋
（-21）。審査員：ヨシダヨシヒ、西村昌生、森太郎、小城進、水野和、螺野達夫、松山南木。

11/21 式場隆三郎逝去。享年67。（日本美術年鑑S.41,静岡11/22,25）

11/ 矢谷長次・小泉浄二二人展於東京中央公論画廊
（-27）。
（静岡11/25）

11/24 市内外影写小品展於浜松市民会館（-27）。
（毎日静岡西部版11/9,24,中日遠州版11/23,浜松民報11/25,28）

11/27 三行舎第16回展於浜松商工会館（-28）。
（毎日静岡西部版11/23,浜松民報11/26,12/1）

11/28 吉野不二郎個展於清水戸田書店（-12,4）。
（毎日静岡西部版11/28,静岡12/2,読売新聞B版12/2）

11/ 高橋竹杖（書体字典・漢字編）出版。
（静岡11/25）

11/ 堂達男（雄飛の像）（茨城県産業団地組合学校に来5月除幕予定）原型完成。
（毎日静岡版,中,西部版11/25）

12/1 日影会会員21名、来沼。（沼津朝日11/23,12,2）

12/1 杉山有個展於静岡谷島屋書店（-7）。
（毎日静岡中部版12/1）

12/1 虹人会日本画展於静岡産業会館（-3）。
（毎日静岡中部版11/30,朝日静岡版12/1）

12/4 鈴木大麻・須藤一雄・辻谷勝三・松下忠雄四人展
於熱海長崎屋（-6）。（伊豆毎日11/30,毎日静岡東部版12/2,朝日新聞B版12/2）

12/4 《金子塚太郎畫》除幕式於吉野市立図書館（朝日新聞B版2/17,毎日静岡東部版12/4,朝日新聞B版12/4）

12/6 赤穂線平展於掛川信用金庫ホール（-8）。
（毎日11/21,28,12/12）

12/6 遠州美小品展於浜松彩画堂（-12）。
（浜松民報12/8,9）

12/9 戸田吉三郎個展於清水戸田書店（-15）。
（毎日静岡中部版12/7,静岡12/9,朝日新聞B版12/9）

12/10 杉本美一展於三島ララ洋蔵店（-20）。
（毎日静岡東部版12/12）

12/10 伊東深水・長倉千秋門下上田住草・三村司邦・栄宗広三人展於浜松商会工房（-14）。
（毎日静岡安心堂（-23）。
（浜松民報12/10,14,毎日静岡西部版12/12,朝日遠州版12/12,朝日新聞B版12/21）

12/11 松永哲之水彩小品展於静岡扇子屋（-20）。
（毎日静岡中部版12/9,16,読売新聞B版12/11,静岡12/16）

12/ 山崎豊（白鳥）熱海市へ寄贈される。
（伊豆毎日12/14）

12/15 馬場喜孝近況。（毎日静岡版,中,西部版12/15）

12/18 第9回安井賞候補新人展於東京国立近代美術館
（-S41,1/18）。
（浜松民報12/18,朝日新聞B版12/21）

12/ 横松真男・冨井健二二人展於静岡扇子屋（-31）。
（朝日新聞B版12/24,毎日静岡中部版12/24,静岡12/24,25）
はじめに

浜松市楽器博物館では、従来より博物館外の個人や機関などの協力を仰ぎ、共催または共同企画、あるいは協力という形で、いくつかの事業を実施している。これは、楽器を単なる音楽を演奏するためだけのものととらえるのではなく、仕組みや象徴性、価値や評価、また美術など、他の様々な文化との関連に注目しながら、楽器という文化財の奥深さを人々に理解しもたいいためである。また、楽器の種類はあまりにも多く、そのすべてを博物館スタッフで演奏することは到底不可能であるから、それぞれの専門家に演奏してもらい、楽器の本来の音や音楽を正しく人々に伝えたいからである。

平成30年度は3つの大きな企画を実施した。1.)「足踏みリードオルガンDAY」「（足踏み式オルガンのコンサートとワークショップ）2.)インドネシアの伝統芸能体験～影絵・ガラム・宮廷舞踊～」「（世界遺産影絵人形居舎の島の芸術芸能であるガラムの演奏ワークショップ、宮廷舞踊のワークショップ、ワヤン・クリの人形作りと人形芝居ワークショップ）3.)「羊毛フェルトで楽器の絵を描こう」（羊毛フェルトを使い世界の楽器の絵を描くワークショップ）である。1は日本リードオルガン協会、2はインドネシア伝統芸能団ハナジス、3は静岡市美術館の協力を得た。また2は、静岡県・ふじのくに子ども芸術大学実行委員会が主催する「ふじのくに子ども芸術大学」プログラムにも採用していただいた。

本稿では、それぞれについての実践を報告する。

1. 「足踏みリードオルガンDAY」「（足踏み式オルガンのコンサートとワークショップ）

足踏みリードオルガンとは、足踏みベベルでふいごを動かして空気を送り、本体内の金属片であるリードが振動して発音するオルガンのことである。足踏み式リードオルガン、または単にリードオルガン（以下オルガン）という。リードオルガンには20世紀になってモーターで送風する電気式も出現しているが、リードオルガンと言う時には、通常は主に電気を使わない足踏み式のものを指す。

この楽器の発祥は19世紀中頃のヨーロッパであるが、アメリカ合衆国で発展し普及した。キリスト教のハイドオルガンの代替品として重宝されたのだが、そのうちに教会を離れして家庭に入り、豊かな文化生活のシンボルとなった。日本には幕末に明白にかけて、キリスト教の宣教師が持参し、布教のための讃美歌の伴奏楽器として活躍した。

19世紀半ばといえば日本では開国から大政奉還、新政府創設、文明開化といった明治維新の時期である。日本は早くも明治5年（1872年）に、近代国家を樹立すべく、近代教育制度である「学制」を定めた。この学制で特筆すべきことは、小学校教育において音楽の教科である「唱歌」を設置し、歌を中心として西洋音楽の教育を開始したことである。伝統的な日本音楽ではない、西洋音楽教育のこのスタートによって、日本人すべてに西洋音楽の素養が育まれ、今回の日本における西洋音楽のレベルの高さにつながることになる。

当時の文部省でこの西洋音楽の研究や人材育成を行った機関が音楽講調、のちの東京音楽学校、現在の東京芸術大学であるが、その初代校長で、東京音楽学校の初代校長にもなったのが伊澤修二（1851-1917）であった。かたは唱歌授業における歌の伴奏楽器の選定を考えていたが、従来の日本の琴や胡弓などよりも、西洋のピアノやオルガンが適しているという結論に。しかし、日本製のピアノやオルガンは無く、外国製を輸入せざるを得ない。これはあまりにも高価であるため全国の学校に普及するのは困難であった。したがって唱歌の授業は実際はすぐに実施されなかった。

唱歌の教育が実施されるようになったのは、日本製のオルガンが登場してからである。東京や横浜で最初の日本製オルガンが作られたが、大量生産には至らなかった。そこで登場するのが、浜松の山葉良（1851-1916）である。良は明治20年ころからオルガン製作を始め山楽風琴製造所（現ヤマハ株式会社）を創設、安価で上質なオルガン製造を始める。これにより、日本全国の小学校でオルガンの使用が可能になっていくのである。

現在の浜松の楽器産業はピアノ、管楽器、電子楽器を主とした西洋楽器だが、始まりはこの足踏み式の小さなリードオルガンの
ルガンであったことは、知らない人も多いし、知っていてもさほど重要視されていない。しかし、単なる楽器製造史にとどまらず、近代国家日本を成立させるための国民教育における文化装置のひとつであるオルガンが、この浜松から日本全国に送り出されたとすれば、これは文化への大きな貢献といえる。

楽器博物館には明治から大正、昭和にかけて作られたオルガンが数多く所蔵され、その多くが寄贈されたものである。製造されたメーカーにも残っていないこれらの貴重なオルガンは、博物館に貯蔵されることもなく、現代に生かしたいし、オルガンの機能としてのすばらしさを知ってほしい。そんな願いから、博物館では、展観会をしたり、コンサートをしたり、CDを作製したりしてきた。もう1歩踏み込んで、次世代を担う子供たちにオルガンの魅力に気づかせてほしい。またオルガンを愛する成人にももっとオルガンのことを知ってほしいと考え、今年度は、日本リードオルガン協会との共催で「足踏みリードオルガンDAY」と称して、6月9日（土）10日（日）の2日間わたり公開コンサート、オルガン解体ショー、オルガン演奏ワークショップ、ミュージアムサロンを実施した。

日本リードオルガン協会は、リードオルガン（主に足踏みリードオルガン）の愛好家、演奏家、研究者、調律・修理業者などが集う非営利の任意団体で、平成8年に創設された。東京に本部事務局を置き、年に2回の全国大会と不定期の研究例会を開催、年2回の会報や、研究レポートなどを発行している。平成27年には創立20周年を記念し、浜松で全国大会を開催し、楽器博物館との共催で公開記念演奏会を行った。

今回浜松で全国大会と公開演奏会を行うことになったが、これは、①楽器博物館にリードオルガンのコレクションがあり演奏可能であること ②浜松が日本のリードオルガンの産地のひとつであり、全国からも参加しやすい地理的環境にあること ③楽器博物館やホール、研修室など、大会開催の環境が整っていること ④今後も定期的に浜松で大会を開催し、リードオルガンのふるさと浜松からリードオルガンの魅力を発信していくことが望まれること、大きな理由である。

平成27年の公開記念演奏会との違いは、オルガン→唱歌→小学校→児童、また、唱歌→文部省唱歌・童話→国民的文化遺産、という歴史的脈絡から、オルガン伴奏での児童合唱を取り入れたことである。児童合唱団は地元浜松で活動している民間の合唱団で幼児から高校生までの団員で構成される「浜松ライヴァンネット児童合唱団」の参加が実現し、これにより多くの市民が来場された。児童合唱のプログラムは、「夏は来

①明治150年記念コンサート
「足踏みリードオルガンの魅力〜児童合唱とともに〜」
日 時 平成30年6月9日（土）15:00〜16:30
会 場 アクシティ浜松研修交流センター音楽工房ホール
出演 加藤千加子（オルガン・日本リードオルガン協会会員）
大代恵（オルガン・日本リードオルガン協会会員）
中村亜二（オルガン・日本リードオルガン協会会員）
三輪保志（フルート）佐渡戸輝子（ソプラノ）
浜松ライオンネット児童合唱団（児童合唱）
初川順子（児童合唱指揮）
入場料 無料 要申込 未就学児同伴可
共催 日本リードオルガン協会
入場者 165人
使用楽器
・1891年 エスティ（アメリカ）61鍵 11ストップ
・大正 日本楽器製造株式会社（浜松）61鍵 7ストップ
・昭和初期 日本楽器製造株式会社（浜松）61鍵 19ストップ
・昭和12年 日本楽器製造株式会社（浜松）61鍵 ストップ無
ぬ」「茶摘み」「われは海の子」「紅葉」「花」「仰るは」「冬景色」「お正月」「火」「春の小川」「春よ来い」「めだかの学校」「熱いのは」「海」「富士山」の16曲をメドレーで披露し、アンコールでは「ふるさと」を聴衆とともに歌った。
また、児童合唱以外では、クラシック作品、讃美歌、日本の歌曲、現代作品が紹介され、オルガノ音楽の幅広い魅力と可能性が紹介された。

③ 中はどうなっているの？
リードオルガノ解体ショー
日時 平成30年6月9日（土）13：00～14：15
会場 アクトシティ浜松研修交流センター音楽工房ホール
出演 和久井真人（解説：日本リードオルガノ協会会員）
日本リードオルガノ協会会員（解体）
入場料 無料 要申込 未就学児同伴可
共催 日本リードオルガノ協会
入場者 83人
使用楽器
・明治後半 長尾木琴製造所（松阪）61鍵 7ストップ
・昭和初期 日本楽器製造株式会社61鍵 11ストップ
足踏みリードオルガノはアナログかつ非電動楽器である。小型の単純なものから、音色が異なる複数のリードを備えた中型大型の高級機までその種類は多い。内部は木、金属、布、紙で作られ、精密な工芸品であるが、内部構造はなかなか目にする機会がない。そこで、今回のリードオルガノは解説を交えながら解体して行く工程を公開することにした。実物のオルガノは小さかったが、解体の様子を大型スクリーンに投影した。空気を送るふいご、空気をたるめる風袋、空気の送路、音を出すリードや空気の出る孔を開閉する蓋、キーから蓋につながる機構、ウィンドルームをかけた装置など、内部の複雑な構造と製作者の知恵が紹介され、大変好評であった。

③ 子ども・おとなワークショップ
足踏みリードオルガノをひいてみよう！
日時 平成30年6月10日（日）
A 10：00～11：45 B 13：30～15：15
会場 アクトシティ浜松研修交流センター音楽セミナー室
講師 中村聡二（日本リードオルガノ協会会員）
三宮理枝（日本リードオルガノ協会会員）
対象 小学生～成人 AB各10人
参加料 無料 要申込（先着順）
共催 日本リードオルガノ協会
参加者 19人（大人13人 小学生6人）
使用楽器
・大正 日本楽器製造株式会社（浜松）61鍵 7ストップ
・昭和12年 日本楽器製造株式会社（浜松）61鍵 ストップ無
ことで、ペダルを踏みながらの演奏はなかなか難しく、ペダルは講師に任せて指だけチャレンジする子もいた。しかし、操作の面白さや、ペダルの操作によって音色や音量が変わることに気付く、「難しいけど、とても楽しかった」との感想が多く、オルガンに興味を持ってくれたようだ。

ミュージアムサロンとは、不定期であるが日曜日の開館時間中に、展示室で開催する20～30分程度のレクチャー付きミニコンサートである。今回はリードオルガンDAYの一環として行った。J.C.F.バッハの作品や讃美歌などを演奏した。

2. ふじのくに子ども芸術大学
「インドネシアの伝統芸能体験〜影絵・ガムラン・宮廷舞踊〜」
楽器博物館にはインドネシア、ジャワ島の中部ジャワに伝わる伝統楽器ガムランのフルセットが所蔵展示されている。これまでにも大人や子供対象の演奏入門ワークショップを何度も開催してきた。また、ガムランと深く関係する伝統文化である皮人形の影絵人形芸術やジャワ・クリのレクチャーを含む、親子で人形を作りワークショップ、また宮廷舞踊の実技入門ワークショップも開催してきた。平成29年度には、小学生を対象に、人形づくり、ガムラン演奏、宮廷舞踊のワークショップを1日で行うという試みも実施し、大変好評であった。募集対象は浜松市に限ってはいないが実際には市の広報誌やチラシを配布する地域の制限があるため、浜松市とその周辺在住の人にしか周知が行き渡らなかった。そこで30年度は、できるだけ広く周知できるようにするため、開催経費の助成金の確保の2つの観点から、静岡県が主催する「ふじのくに子ども芸術大学」のプログラムに応募したところ、幸いにも採用していただいた。以下の3つのワークショップを通じて、子供たちはアジアの国インドネシアの文化に触れ、親子でインドネシアに行ってしまいたいという声も聞かれた。

④ ミュージアムサロン「リードオルガン」
日時　平成30年6月10日(日)
11:00 14:00 15:30 各30分間
会場　楽器博物館展示室内天空ホール
出演　多田なおみ(日本リードオルガン協会会員)
対象　楽器博物館入館者
共催　日本リードオルガン協会
入場者　168人
使用楽器
・1891年 エスティ(アメリカ)61鍵 11ストップ
① 影絵人形づくり

日 時　平成30年10月14日（日）10:00～12:30
会 場　アクティビティブ松研修交流センター音楽工房ホール
講 師　ローフィット・イプチム（インドネシア伝統芸能団ハナジョス）
佐々木宏実（インドネシア伝統芸能団ハナジョス）
対 象　小学1～6年生 20人（低学年は保護者同伴可）
参加料　500円
共 催　ふじのくに子ども芸術大学実行委員会
参加者　18人（市内16 市外2）

ワヤン・クリは世界無形遺産にも指定されているインドネシアの伝統芸能で、ジャワ島とバリ島に伝承する。水牛の皮で作られた人形を使い影絵芝居である。グラマンという人形使いが何体もの人形をひとりで操る。ラマーヤナやマハーバーラタなどの古典や、道教、倫理、政治や社会への風刺などを、庶民にも楽しく理解できるように、グラマンが語りながら上演する。音楽の伴奏はグラマンの合奏で行う。本ワークショップでは、この人形をボール紙で作り、完成後はそれを使ってグラマン音楽に合わせながら、即興で影絵芝居を実演するもので、子供にも親しみの人形と影絵芝居を通じて、インドネシアのグラマン音楽とその関連文化を理解することが目的である。あらかじめ人形の輪郭が印刷されたボール紙から好みの人が選ぶ、切り取って、カッターナイフで透かし文様を作り、好みで色セロファンを張ったり着色し、最後に操り棒を取り付ける。難しい部分は付き添いの親が手伝いながら、和やかな雰囲気で真剣に製作していた。自作の人形での影絵芝居も盛り上がり、互いに鑑賞して楽しい時間を過ごした。
② ガムラン演奏

日 時 　平成30年10月14日（日）13:30～14:30
会 場 　アクシティ浜松研修交流センター音楽工房ホール
講 師 　佐々木宏実（インドネシア伝統芸能団・ハナジョス）
　　　　ローフィット・イプラヒム（インドネシア伝統芸能団・ハナジョス）
　　　　西岡美恵（ガムラン演奏家・インドネシア宮廷舞踊家）
対 象 　小学3～6年生 20人（低学年は保護者同伴可）
参加料 　500円
共 催 　ふじのくに子ども芸術大学実行委員会
参加者 　13人（市内9 　市外4）

ガムランはインドネシアジャワ島とバリ島に伝承する伝統楽器群の総称で、その音楽もまたガムランと呼ぶ。ジャワ島のガムランのほうがバリ島よりも歴史的には古く、幅広くも大きい。もともと宮廷の楽器で、庶民にも広まったのは近年である。楽器は鈴銅打楽器のゴング類、シロフォン類を中心に、太鼓、笛、弦楽器20種類以上を使う。鈴銅打楽器の種類は13種類ほどで、それぞれに個別の名前がある。本ワークショップでは、11種類の鈴銅打楽器を使用し、時間の関係で自分の好きな楽器をひとつ選んでそれを担当した。取り上げた教材は伝統曲のひとつで、戦いの場面などに使われる勇ましい曲である。講師の指導で順番に楽器の演奏を増やしていき、40分ほどで、かなりしっかりした合奏ができるようになったため、見学の大人も手拍子と歌を加わり、迫力ある演奏となった。できればいろいろな楽器を体験できればよかったのだが、今回は時間がなくひとつの楽器しか体験できなかったことが悔やまれる。
③ 宮廷舞踏
日 時 平成30年10月14日(日)15:00～16:30
会 場 アクトシティ浜松研修交流センター音楽工房ホール
講 師 西岡美緒（インドネシア宮廷舞踊ダンサー）
ロワイヤル・バラム（インドネシア伝統芸能団ハナジス）
佐々木宏実（インドネシア伝統芸能団ハナジス）
対 象 小学2～6年生 20人（低学年は保護者同伴可）
参加料 500円
共 催 ふじのくに子ども芸術大学実行委員会
参加者 2人（市内1 市外1）

本ワークショップは参加者が少ないのが残念であった。昨
年は10人の参加があったが、今年は10月という時期と学校
行事の時期と重なったことが原因のひとつでもあろう。申し込
みは4人であったが当日2人が病欠となった。2人という参加
者だったのでは個人レッスンのように中身の濃い指導をす
ることができた。取られた舞踏は、お姫様の踊りと鬼の踊り
の2つで、その違いを楽しむことができた。また少人数であった
ために、親子一緒に踊りに参加したり、簡単なバティックの衣装
や髪飾り、腕飾りなどの装飾品身に着けることができたという
プライムに喜んでいた。親子でカラフルな生演奏に合わせ
て踊った表情で踊っていたのが印象的であった。

3. 親子ワークショップ「羊毛フェルトで楽器の絵を描こう」
楽器博物館でのワークショップといえば、美術で楽器の演
奏のワークショップが挙げられる。しかし、楽器の演奏という
のは、たとえ初心者入門コースであっても、人によってはハード
ルが高い。楽器を演奏することがひとつの大きな魅力であり魅
力であるが、美術としての楽器をそれととらえない。変形、色
彩、形態など、ビジュアルアートとしての魅力満載である。そこ
で、美術的アプローチによる楽器のワークショップが考えられ
る。すぐに想像されるのは楽器作りワークショップである。しかし
これは材料や製作時間の制限があり、やってみると発表ボト
ルや空き缶、ボール紙などを使った「おもちゃ」的なものの製作
に終わってしまう。完成品を持ち帰ったとしても、家に飾ったり
演奏に使うことはほとんどされることなく、ごみ箱行きとなって
しまう。次に思い浮かぶのは、楽器を写生することであるが、ク
レヨン、クレパス、色鉛筆、水彩絵の具などを使うことになり、水
が必要だったり、壁や床や衣服を汚す可能性もある。また個人
の得失を得手があるし、ありがたいと魅力がない。

そこで、楽器が演奏できなくても楽器を楽しむこと、音楽
が苦手でも楽器が楽しめるように、さらに、子供が喜び、作品も自
宅に長く置いておけるものがあればIDXと、考えていていた
ところ、発見したのが、羊毛フェルトを使っての楽器の絵の製
作である。
きっかけは、静岡市美術館に行っている子供や親子を対象
としたワークショップである。この館の教育普及担当生員2人
は大変優秀な方で、素晴らしいワークショップを数多く実践さ
れているのだが、そのひとつに、羊毛フェルトを使って息子さん
の全身像の肖像画を作り、子供から親にプレゼントするとい
うワークショップがあった。この作品はなかなか素晴らしいも
ので、手芸をしている人はわかると思うが、羊毛・フェルト細工は、
素材の性質から、とても温かみがある。そして、染色した羊
毛やフェルトが今はたくさんあって、どれもが奇抜である。ビビッ
ドなもの、パステル調のものなど、絵の具やクレヨンなどに負け
ない色彩を持っている。製作では羊毛フェルトをカンバスとする
フェルト布に針で刺して留めていくのだが、留めても刺せる
ので、失敗しても何回でもやり直せるができる。刺針を刺さないように注意しきれれば、誰でも簡単にできる。作品は
額縁に入れれば、温かみのある一逸の素敵な美術品になる。

静岡市美術館に協力をお願いしたところ快く承諾して下
さった。担当生員2人をお呼びして、平成29年の12月に第
1回目の実施した。親子10組の参加で、工程としては、①羊毛
のお話を作る先生から聞く、②会場に展示されている所蔵楽器の説
明と演奏を聴いたのち、自分の楽器を選ぶ、③下絵を描く、④
色付けの羊毛を選んで切ったり描いたりすることからフェル
ト布に針で刺して留めていく。ひときかも身に着けてもらう。⑤先生
のいろんなアドバイスをもらう。⑥みんな一緒に素描の作品が
できていく。⑦最後に一人ずつと全員で記念撮影を行うもの
だった。
これが成功したので、今年度もまた、静岡市美術館のご協
力をいただき、開催することにした。

羊毛フェルト1色を選ぶ。③羊毛フェルトを針で刺して下地に留め、アウトライナーを作る。④細部を描き完成させる。という工程になる。

子どもが、スケッチや実物の楽器を見ながら、羊毛フェルトの色を選び、レイアウトを決め、親が針で刺し固定するという、親子の共同作業が基本であるが、高学年の子どもは、自分で針を刺す作業をした。鉄直は実物の色合いのままにフェルトを選んでいた子供も、講師のアドバイスで、自由な色彩使いをするようになった。同じ楽器がモデルでも、子供が異なる作品となり、大人たちはその出来栄えに感動していた。完成した作品を額縁に入れると立派な美術作品となった。各自工夫した部分やこだわった部分などを発表し、全員で記念撮影をして終了した。

音楽と美術の融合がこれのワークショップの目的のひとつである。楽器＝音楽＝演奏、という絶妙な発想にこだわることなく、楽器を違った視点から見えることは大切なことである。このワークショップは楽器博物館と美術館がコラボしたひとつの大きな取り組みであると考える。

日 時　平成30年10月28日(日) 13:30～16:30
会 場　アクトシティ浜松研修交流センター
講 師　安岡真理(静岡市美術館学芸員)
　　　大田純世(静岡市美術館学芸員)
対 象　小学生の親子10組(20人)
　　　(親子2人の参加、未就学児の同伴ならびに付き添い者の見学は不可、親1人と小学生2人の参加を希望の場合は要相談)
参加料　子供1人に500円
協 力　静岡市美術館
参加者　親子11組

今回も多様な楽器を会場に並べ、館長の解説と簡単な演奏のあと、子どもたちはそれぞれに自分のイメージに合う楽器を選んだ。国語で学習する「スネの白い馬」に登場する「頭鼻琴」、南米のハープ「アルハ」、「ヴァイオリン」、「トランペッター」、アフリカの「指ピアノ」が選ばれた。楽器別にグループを作り、作業を始めた。

作業は、①楽器をよく観察し、構図を決めながら、紙にスケッチする。②下地となるフェルトシートと、楽器のイメージに合う
なんばり

南張富士講、200年のあゆみ
～「南張富士講関係資料」の分析を中心に

富士市 文化振興課・元富士山かぐや姫ミュージアム　井上 卓哉

はじめに

平成25年に世界文化遺産に登録された富士山。その普遍的な価値は、信仰の対象と芸術の源泉という視点から説明されている。こうした信仰の対象としての富士山ということを示すものとして、山中の各所に奉納された様々な仏像の存在が挙げられる。それらは主に、中世から近世にかけて奉納されたものであるが、その多くは江戸時代の神仏分離令とそれに伴う僧侶覚醒運動により失われてしまった。しかし、一部は失われることなく、館に下ろされ、さまざまな場面で保管されてきた。その一つが富士山かぐや姫ミュージアムに寄託されている鍍造の大日如来坐像である（写真1および2）。この仏像は、かつて富士山の宗教拠点の一つである村上の地で修験者（法師）として活動していた僧侶が造ったもので、その銘から、享保2年（1717年）に習志野市鳥藤之町（三重県鳥羽市藤之町）や渡会館大斎（三重県伊勢市大斎町）の人物が施主となっていることが知られている1）。この仏像の存在からは、富士山に対する信仰が、遠く伊勢志摩地方まで広がっていたことが指摘できる。本論では、伊勢志摩地方における富士山に対する信仰の姿を示すもう一つの資料として、三重県志員市浜名町南張において組織されていた富士講で受け継がれてきた資料に注目し、そこに織られた情報から、その変遷について明らかにしたい。

1. 東海地方を中心とする富士山信仰の特徴

鉢釜を鎮めるための選挙に端を発するとされる富士山に対する信仰は、中世より山中を修行の場とする登拝の性格を持つのやすいものである。その後、近世において、富士山のそれぞれの登拝の接地となる信仰施設で活動する宗教者ごとに、異なる展開を見せることになる。たとえば吉田口では、北口本宮富士浅間神社の門前に居を構えた御師の活動により、江戸を中心とする富士講が組織された。特に、富士講の指導者の一人であったり伝行身骨が吉田口登拝の七合五階迷宮の峰々と岩ににおいて命名して以降、江戸を中心とする富士講は隆盛の時期を迎え、吉田口は多くの登拝者を集める登拝道となった。

一方、表口（大宮・村口）では、平安時代末期に富士登山を練り出し、富士講に呼応された末法を栄える修験者たちが、村山興法寺を拠点に活動した。彼らは、各地を練り出して富士山に対する信仰を広め、富士講への参詣を奨励した。また、各地に先達先達を発行し、先達の名が得た先達は、担当する地域の人々を引き渡して富士山に訪れた。その活動範囲は、富士山の西方、紀伊半島や関西まで広がり、各地で参詣前に行進錦舞をおこなう坂戸場や、富士山の仏を祀り、主に浅間山と呼ばれる場所が存在した。それとともに、先達を中心にとする講（富士講）が組織され、富士讲への参詣や、富士講の行事が盛んでおくことができたようになった。さらに、在地での活動のみで参詣を同様の利益を得ることができるとされた地域もあった。

その後、明治初年の神仏分離令、あるいは修験道禁止令によって、村山興法寺を拠点とする西国富士山に対する信仰活動の一形態である富士講は衰退することとなる。しかしながら、本論で注目する三重の伊勢志摩地方では、現在でも富士講への参詣や富士講の行事などをおこなっている場所がある。また、こうした行事自体は流れてきてしまったものの、富士講に関わる伝承や資料が残されている場所もある。このように、明治時代以降、村山興法寺とのつながりは薄まったものの、伊勢志摩地方における富士山に対する信仰は、さまざまな展開を経て、現在へと至っている。

写真1 鍍造の大日如来坐像
※写真1、2とともに富士山かぐや姫ミュージアム提供

写真2 仏像の拡大
2. 志摩市浜島町南張の富士講

南張は、現在の三重県志摩市を構成する旧志摩郡五町（浜島町、大王町、志摩町、阿見町、磯部町）のうち、浜島町に属した集落で、志摩市の最西端に位置する（図1）。集落の南側は熊野灘に面し、それ以外の三方は山に囲まれている。伊勢志摩地域の海沿いの集落の多くは、漁業が主たる生業の一つであるが、南張については、古くから農業を中心とした生活が営まれてきた。それに加えて、大正から昭和にかけて、南張メロンに代表される農芸、乳牛飼育などの酪農が導入されている。

現在の南張の人口は274人（男性131人・女性143人）、世帯数は138を数える（平成30年10月31日時点・志摩市ホームページより）。ただし、平成2年の国勢調査時の人口は452人（男性218人・女性234人）、世帯数は134であり、平成の約30年間において、世帯数に大きな変化は見られないものの、人口については、約40パーセント減少している。

さて、南張では、地域の男性により「南張富士講」が組織され、平成23年まで講に関わる行事がおこなわれていた。この講のルーツを示すほっきりとした資料はご存じのいないもの、近世に富士山本宮浅間大社の僧侶を勤めた四国尚宮崎氏が、元禄2年（1689）の富士山に登った者を記録した道者帳の中の六月十七日の項に「志州南針 先達伊豫守下 助左衛門 新蔵 喜平太 又十郎 道行四人」の記載が確認できる。ここに見られる「南針」が南張を示しているとすれば、当時から南張においてある程度の集団による富士山への参詣がおこなわれていた可能性が高い。

上記の参詣が南張富士講によるものかどうかについては定かではないが、南張富士講最後の講員の一人である髙尾氏が氏（昭和2年生まれ）のお宅に江戸時代から平成にかけての南張富士講に関わる132点の記録や、富士山を描いた掛軸が遺されていた（写真3および4）。そこで本稿では、これらの記録類のうち、以下の8点の記録（講帳）の分析とともに、髙尾氏や同じく南張にお住いの西井博氏からの聞き取り調査の内容を加え、約200年にわたる南張富士講の変遷についていくつかの視点から検討してみたい。
3. 本帳で取り上げる帳簿の概要

南張富士講に関わる132点にのぼる記録類は、先に述べた帳簿とともに、当番となった講員から次の当番となる講員へと伝達され、受け継がれてきた。その多くは、昭和から平成にかけての領収書や配布資料であるが、中には、江戸時代から明治時代まで遡ることができる記録も含まれている。それらのうち、本稿では、以下の8点の帳簿を取り上げたい。

①「富士上塚離諸々入用帳」
文化6年（1809）から嘉永2年（1849）にかけての南張富士講に関係する行事の歳出（入用）と歳入（請取）の項目や費用について記したもの。

②「浅間様記録帳簿」
天保3年（1832）に南張富士講で、当地で「浅間さん」と呼ばれる大日如来を祀る堂舎を造営した際の記録。造営に必要な品々や費用、関わった講員名などが記されたもの。

③「御富士様江参詣諸々入用帳」
文久3年（1863）に、南張富士講で富士山に参詣する際に準備した様々な品物やその費用、参詣にあたっての祝儀などを記したもの。

④「富士上塚離定帳」
文久3年（1863）、南張富士講の行事の一つである「上塚離」に関する規則や講員名について記したもの。

⑤「富士講間造営勧化帳」
明治6年（1873）に南張富士講で、大日如来を祀る堂舎を造営した際の記録で、集められた寄付の内容や寄付者の名前、造営に関わる費用などを記したもの。

⑥「揚垢離規類帳」
明治16年（1883）、南張富士講の行事の一つである「揚垢離」に関する規則を8条にわたって記したもの。

⑦「富士講間御造営詣出諸々費用並之講費記載簿」
明治20年（1887）に南張富士講で、大日如来を祀る堂舎を造営した際の記録で、講員名、造営にかかわる準備品や費用、寄付などについて記したもの。なお、本帳には明治20年とか、同年の記載に基づいて、明治39年（1906）の造営に関する記録もある。

⑧「南張富士講帳簿」
明治28年（1895）から平成20年（2008）にかけての記録。
非常に多様な内容が記されているが、大きく分けると南張富士講の行事の参加者・内容・歳出歳入に関すること、講の規約に関すること、講員の加入・退退に関することの3点に分類することができる。なお、本資料に関しては、表彰が判読できなかったため、便宜的に「南張富士講帳簿」という名称を付与した。

次章では、これらの記録類の記載をもとに、講の特徴やその変遷について分析したい。

4. 記録類にみる南張富士講

・講の目的

講とは、ある目的のために結ばれた集団のことであり、宗教活動を目的としたもの。経済活動を目的としたもの、社会活動を目的としたものなど多様な種類がある。南張富士講については、[[南張富士講帳簿]]の36頁には、南張富士講の行事を実施するにあたり、講員に通知する文面の控えが記されており、それによると、行事の目的は「講員諸氏の家運隆盛と家業の繁栄を願い念いたす為」とある。

・講の行事

上記の目的のために南張富士講では、大きく分けると富士
山への参詣、定式祭礼、下向例拝、浅間さん前造立といった行事が実施されていた。以下では、記録類の記載から、それぞれの行事の概要とその変遷について取り上げてみたい。

① 富士山への参詣

南張富士講による富士山への参詣については、「御富士講参詣諸々入用帳」、[[南張富士講帳簿]]の記載によると、表1に示したように、文久3年（1863）から昭和52年（1977）にかけて、13回実施されていたことが確認できる。なお、富士山が出現したとされ、60年に一度巡ってくる庚申の年は縁年とされ、通常よりも多くの登山者が富士山へと挑んだが、南張富士講においては、庚申の年に実施されただのは大正9年（1920）のみである。また、縁年とされる12年に一度の年の年に横浜を広げても、該当するのは大正9年（1920）と昭和7年（1932）の2回だけであり、南張富士講においては、必ずしも庚申あるいは「申」の年の参詣にこだわっていなかったようである。

表1 富士山への参詣年と参加者数

<table>
<thead>
<tr>
<th>No.</th>
<th>実施年</th>
<th>参加人数</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1</td>
<td>文久3年（1863）癸亥</td>
<td>11名</td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
<td>明治25年（1892）壬辰</td>
<td>不明</td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
<td>明治28年（1895）乙未</td>
<td>24名</td>
</tr>
<tr>
<td>4</td>
<td>明治31年（1898）戊戌</td>
<td>不明</td>
</tr>
<tr>
<td>5</td>
<td>明治39年（1906）丙午</td>
<td>15名</td>
</tr>
<tr>
<td>6</td>
<td>明治43年（1910）庚戌</td>
<td>14名</td>
</tr>
<tr>
<td>7</td>
<td>大正元年（1912）壬子</td>
<td>11名</td>
</tr>
<tr>
<td>8</td>
<td>大正6年（1917）丁巳</td>
<td>6名</td>
</tr>
<tr>
<td>9</td>
<td>大正9年（1920）庚申</td>
<td>14名</td>
</tr>
<tr>
<td>10</td>
<td>大正14年（1925）乙丑</td>
<td>16名</td>
</tr>
<tr>
<td>11</td>
<td>昭和7年（1932）壬申</td>
<td>10名</td>
</tr>
<tr>
<td>12</td>
<td>昭和17年（1942）壬午</td>
<td>22名</td>
</tr>
<tr>
<td>13</td>
<td>昭和52年（1977）丁巳</td>
<td>27名</td>
</tr>
</tbody>
</table>

昭和52年（1977）に富士山に参詣した塚尾氏からの聞き取り調査によれば、この参詣にかかる費用については、講内での事前の賄い立ては実施されておらず、各自が準備したとのことであった。この時の参詣については、[[南張富士講帳簿]]の52頁にも決算資料が掲載されており、確かに会費制であったことがわかる。

また、富士山参詣際に準備した様々な品物やその費用、参詣にあたりての仏具などについて記された文久3年（1863）の「御富士講参詣諸々入用帳」にも、参加者総割りで共通経費を負担することが記されている。江戸を中心とする富士講などでは、講員の間で参詣ともなる費用を日常的に積み立て、選ばれた講員がその費用を使い全て登頂するという、いわゆる無尽の形が取られていたことが報告されているが、南張ではそれとは異なる形で富士山への参詣に伴う諸費用が負担されていたようである。

南張富士講がこのような形を取っていたのは、講への加入の必須条件として富士山への参詣が位置づけられていたためである。参詣を終えたグループは「新山」と呼ばれる集合となり、初めて南張富士講へと加入することができた。また、「新山」が加入した段階において、すでに講員となっているメンバーについては、「古山」と呼ばれた。ただし、富士山の参詣が起こる度に「新山」が加入し、講員としていくのではなく、「古山」は後述する定式祭礼の行事の当番（宿元・宿本）を務められた後、講を抜けることができた。この取り決めについては、[[南張富士講帳簿]]の106頁に、「講員ハ講宿ヲ済マセテ退蔵スルコトナク新山ノ出来ルマテ講員トシテ止マリ年々日待仕ヘマリ新山ノ出来タル時宿ヲ済マセル者ノ退蔵スルコト」とあるほか、133頁に、「新入者ハ其都度白ヲ遂テ署名シ、現在講員ハ宿本當番ヲ終リタル時、共退社ノ年次ツ未入姓名ノ上二記入スベキ」とあり、明文化されていた。

なお、富士山への参詣の行程であるが、時代によって変化しているが、聞き取り調査や記録類の記載から明らかになった。文久3年（1863）の「御富士講参詣諸々入用帳」によれば、「一 壬戌 六分 舟ちらん 右者伊勢行之節」「一 七欠 木谷舟資」とあることから、南張から伊勢までは何度か船を乗り換えて向かったようである。ただし、伊勢からの行程は記されていないため、この時の参詣においては、陸路の伊勢参宮街道を用いて東海道に入ったり、あるいは、伊勢から吉田（豊橋）まで海路を用いて東海道に入ったりのないことについては不明である。

その後、明治44年（1911）に参宮線が山田から鳥羽間まで延伸されると、船の利用は、南張から鳥羽間へと変更になり、鳥羽からは鉄道での移動となったという。さらに、昭和4年（1929）に鳥羽駅から宮島の真珠湾駅（現在は廃駅）にいたる志摩電気鉄道が開通すると、南張から追問駅
（現志摩鉄道駅）までは徒歩、通間駅からは鉄道を使った
という。そして、南張富士講の最後の参詣では、旅行会社
が用意したバスで南張から富士山上まで移動したことが「[南
張富士講帳簿]」の52頁に記されている。
② 定式祭礼
上記の富士山への参詣は定期的に実施されていた行
事であるが、ここで取り上げる定式祭礼は、一年に一度、南
張の地で定期的に実施されてきた行事である。なお、この
行事については、上（揚）塚崎、縄塚崎、日待、定式祭礼と
いういくつかの呼称が存在している。また、記録類をつぶさ
に見ていくと、この行事も変化していることがわかる。そこで、
以下では、実施日、内容、食事、経費という点から、その変
化について分析してみたい。
・実施日
文化6年（1809）から嘉永2年（1849）にかけての南張
富士講に関する上塚崎の歳出（入用）と歳入（請取）の
項目や費用について記した「富士上塚崎諸入用帳」によ
れば、実施日は、5月28日あるいは5月30日との記載が
見られる。さらに、文久3年（1863）の「富士上塚崎規
則」に記されたものにおいても、実施日は5月28日となっていることから、旧暦から
新暦へと改暦されても同じ日付で実施されていたようであ
る。さらに、明治28年（1895）以降の記録である「[南張富
士講帳簿]」においても、当初は5月28日に実施されている
ことがわかる。
ところが、理由についての記載がないため、その詳細は
不明であるが、明治39年（1906）に講の規約が改正され、
実施日が4月2日に変更されている（「南張富士講帳簿」、103頁）、以降、しばらくの間、実施日は4月2日であっ
たが、昭和37年（1962）に3月2日へと変更されている。この
時も理由は記されていないが、「南張富士講帳簿」139頁
には、「全講員合議の上、右の通り定める一、期日の変
更 昭和三十七年以降は毎年三月二日を定例祭日と定め
る」とあり、講員全員の了承をえて、実施日が変更されたよ
うである。
その後、昭和50年（1975）の定式祭礼の際に、翌年から
定式祭礼の実施日を3月2日から3月1日曜日日とすること
を決めた旨が「南張富士講帳簿」49頁に記されている。
ただし、次頁に記された翌年の記録によると、都合により3月
第一日曜日が実施されることわらず、昭和52年（1977）からは再び
3月2日の実施としたようである。だが、翌年も予定通りの日
付で実施することができなかったため、以降は、3月1日を実
施日としつつも、2月下旬から3月上旬にかけての期間で、
講員の都合が合う日に行事が実施されていることになる。
内容
一年に一度、南張富士講で実施されてきた定式祭礼で
あるが、上（揚）塚崎という名称もあることからもわかるよ
に、かつては塚崎を主体とする行事であった。そして、その
塚崎も定式祭礼の一環だけ実施されるのではなく、何度か
の塚崎を経て定式祭礼の日を迎えていたことが、「[南張富
士講帳簿]」に記された「富士講社規範条覚」（明治31年・
123頁～129頁）から窺える。それによると、定式祭礼に至る
過程は、以下のようなものであった。
4月6日 山巡りを行う
5月1日 未明に竹塚崎を取る。
5月15日 未明に竹塚崎を取る。その後当番（宿本）宅に集まる。
5月24日 未明に塚崎を取る。
5月28日 定式祭礼
このように、定式祭礼に至るまで重いが集落内の塚崎場
にて塚崎を取り、講員たちは自らの身を清めて定式祭礼を
迎えることとなる（写真5）。特に、5月24日から5月28日におけ
ては、一層品行方正であることが求められたほか、肥料等
の荷担が厳禁とされた。

写真5 南張の塚崎場
こうして迎えた5月28日の定式祭礼では、朝8時ごろ到
着講員が集まり、当番の家に集まり、2回の食事を取りなが
ら日待を行う。さらに、5月6日には28日と同様に当番の家
に集まり、午後6時から塚崎という行事が実施される。この
山陽についての詳細な記載はないが、おそらく精進明けの
行事であり、これをもって南張富士講による一年に一度の定期的な行事は終了となる。

こうして定式祭礼の次第について見てみると、明治31年
の段階では、南張富士講の定期的な行事は4月朔日から5月朔日の一ヶ月間に渡っており、その間、拝殿を通じて、自らの身を清浄な状態で維持していくことが求められていたことが
わかる。

しかしながら、この状況は、明治39年になると大きく変化
することとなる。[[南張富士講帳簿]]の103頁に記された
明治39年の定式祭礼の規約改正では、以下のように記されている。

「本講更正規約
一、本講定式祭典ハ四月廿日ト改ム
二、講員ハ當日午前八時(白米六合携帯)講宿へ参集シ
午後二時ノ食事ヲナシ 午前零時過マデ日待ヲナス
三、講宿ハ各講員ヘ使ヲネスコト
四、當日ノ御酒ハ二升トス 但シ飲ノモノ多寡ヲヨリ増減ス
五、酒魚ハ除キ講関係者ヲ除キ講員全体ヲ負担ス
明治参拾九年四月廿日ヨリ施行
富士講員 印」

この規約でもわかるように、明治39年の段階で南張富士
講では、山帰りや割離を取るというが実施されなくなった
ようである。以降、定式祭礼の主要な行事は、南張集落の
氏神である橘宮八柱神社への参拝したのち、会食を伴う国
待を実施する形へと変化したのである（写真6）。

なお、日待の場所であるが、[[富士上垢離定帳]]、[[塗垢離規
則帳]]、[[南張富士講帳簿]]によれば、昭和48年までは宿本
の家で実施されていたが、その後、日待の場所は南張の公民
館へと変更となっている。

さらに、平成12年には定式祭礼に大きな変化が起こる。それ
では、橘宮八柱神社に参拝した後の日待が、伊勢神宮の参拝へ
と変更されたのである。

・食事

先に述べたように、定式祭礼の際の日待には食事が伴ってい
た。その食事は、宿本において準備することができていたが
（[[富士上垢離定帳]]、[[塗垢離規則帳]]、[[南張富士講帳
簿]]等）。また、提供される食事についても様々な取り決めが
あったようで、[[富士上垢離定帳]]（文久3年）には「賛部之儀者
等之通りむし（蒸）物なし」との記述や、[[塗垢離規則帳]]（明
治16年）には、「第四条 本膳之義ハコト一菜ニテ相順べき
事 但し豆腐青物ナシ」とある。

また、[[南張富士講帳簿]]の中では、昭和4年（1929）に
定められた規約に、「一、本膳ハ者はトス[[ゴロク飯]]又ハ[[ス
シトス]]中略」と、酒魚トス出時刻ハ午後三時ト本膳（夕
食）ハ午後七時トシはあるが、昭和51年（1976）の定式
祭礼の際に定められた規約では、「本膳（昼食）として、[[煮
メシ]]、[[蒸し豆腐]]、[[煮魚]]、[[刺身]]を。さらに、夕食には
寿司又は五目飯が提供されていたことが記されている。[[南
張富士講帳簿]]には、定式祭礼の際に提供された料理の
詳細な献立が記載されている年もあり、以下に昭和55年
（1980）の例を紹介したい。

「本膳献立
一、 刺身 六皿
二、 煮メシ 六皿
三、 酔の物 六皿
四、 寒天 六皿
五、 寿し 六皿
六、 赤飯
七、 味噌汁
 夕食
一、 寿し
二、 五目飯
一、酒魚ハ全員より徴収し他のものは宿本にて」

このような宿本により提供されていた食事であるが、平成
2年の定式祭礼の際に、会食は夕食1回のみにするというこ

写真6 橘宮八柱神社
とが決定されている。この決定を受けて、平成3年からは夕食を営むが準備するのではなく、飲食店における食事となり、飲食の後に公民館で深夜まで待つをすることが平成12年まで続けられていた。

・経費

定式祭礼の実施にかかる経費については、『南張富士講セット講談録』に詳しく記されており、これらの記録によると、明治30年代半ば、定式祭礼の際に、御幣料、寄付料、十二灯（心付け）、といった形での収入（請取）があった。これらは、定式祭礼の際に実施された山飾りに対するものと考えられる。収入に対して、支出（入用）としては、酒代、代代、紙代（山飾り用か）が挙げられている。

そして、収入より支出が多い場合、差額については、講員で総割して補填するという形が取られていることが記されている。一方で、支出より収入が多い場合は、差額を講員に繰り越している他、差額を講員に貸付している事例を確認することができる。この点から見れば、当時の南張富士講は、経済的な支援を行う機能も有していたということを指摘できる。

しかしながら、明治39年（1906）以降の記録によると、定式祭礼の際の収入の項目は確認できず、支出の項目として、酒代、代代、酒代、とあり、この金額を、宿本を除く講員で総割して負担するという形となっている。その詳細な理由が不明であるが、前述のように、この時期には南張富士講の定式祭礼において山飾りや塚抜が実施されなくなったことも無関係ではないであろう。

なお、飲食店における会食が実施されるようになった平成3年以降においても、かかった経費については講員で総割して負担するという方法が取られた。

③下向後世

前述した定式祭礼は一年に一度、定期的に実施されていった行事であるが、ここで取り上げる下向後世は、富士山に参詣したグループが南張に残してきた際に実施される行事で、この行事に関しては、『南張富士講セット講談録』の127頁から130頁にかけて明治30年代の規約が、そして、104頁から105頁に明治43年（1910）の規約が掲載されている。

それによると、新たに富士山の参詣に向かうグループ、いわゆる「新山」は、すでに参詣を済ませている「古山」に付はずれて見送りを受け、参詣へと出発する。そして、「新山」が留守にしている間に、「山差し」と呼ばれる行事が行われたようだ。「古山」の代表者が「新山」の家に挨拶に回ることが記されている。

「新山」が南張に帰ってくる際には、「古山」の当番者は酒と太鼓を持って南張と北部の木谷集落との境にある木谷峠まで出迎えなければならない旨が記されている。木谷峠においては、祝杯が挙げられることと、盛大に出迎えが行われたようで、その後定式祭礼に準じた形で待つが実施された。

ただし、明治30年代の規約と明治43年30年代の規約の間には、明確な違いが見られる。明治30年代の規儀では、出迎えの後は、「新山」「古山」ともに南張の浅間山（「浅間さん」）に詣でてお勤めた後、氏神である楠御前八柱神社に参詣すべきことが記されている。さらに、山差しや帰途には複数の塚抜を取なければならないとされている。一方で、明治43年30年代には、出迎えの後の浅間山（「浅間さん」）への参詣が記されておらず、直接氏神を参拝することとなっている。また、明治30年代の規儀では複数回実施しなければならないとされていた塚抜けについての記載が全く見られない。

この変化については、前述した定式祭礼において、明治30年代に浅間さんの山飾りや塚抜けが実施されなくなったことと密接に結びついている可能性は高いのではないだろうか。

①「浅間さん」の造営

南張の集落を見下ろすことができる高台には、享保12年（1727）に奉納された大日如来を祀る場があり、「浅間さん」と呼ばれていた（写真7）。現在は、コンクリート製の祠に祀られているが、かつては堂舎の中に祀られていていたようである。南張富士講の講員によって堂舎の造営が実施されていったことを示す記録冊（『浅間様記録帳簿』、「富士浅間造営勧化帳」、「富士浅間造営二付諸入費並計請書記載簿」）が遺されている。

これらの記録によると、天保3年（1832）、明治6年（1873）、明治20年（1887）、明治39年（1906）の4回、堂舎の造営が実施されていることがわかる。これらの記録冊には、造営に必要な木材等が記されているが、天保3年の『浅間様記録帳簿』によれば、杉材の材が20本、小松太30本用意されていたようである。それなりの規模の建物であったようである。

この4回の造営では、地鎮祭や上棟式も挙行されており、上棟式では供拝として、榛積（三重）、柱積（四重）、大工衆への餅（一重）、大日如来への餅（一重）、九宿観への餅（九重）、秋葉山への餅（一重）が準備され、各所に供えられたことが記されている。
士講の行とその変遷について取り上げることを大きな目的とした。
分析の中では、南張富士講の行事は約200年の間、大きな変化をせずに実施されてきたわけではない、様々な変化があったことを取り上げる。その中でも、明治30年代後半から40年代前半かけての時期に、南張の地で実施される主要行事である定式祭礼の中で、大日如来を祀る浅間山への参詣や崇拝を取るということが実施されくなり、地域の氏神である楠宮八柱神社への参詣を中心とする行事となったという、大きな変化が見られた。この変化は、修験道の影響を受け、富士山への信仰がベースとなっていると思われる徳川の南張富士講の性格が失われ、氏神の信仰を中心とした講となっていったことを示すものとも捉えることができるであろう。

その背景にどのような要因が関係していたのかを明らかにするためには今後の課題の一つで、その一つの可能性として、明治中期からの鉄道網の発達ということが挙げられるかもしれない。従来であれば、南張から船で乗り継ぎ、東海道へと入った後は陸路で富士山へと参詣するという形が取られていた。それは現在では考えられないほどの困難な旅である、まさに修行の一つであったといえる。そうした富士山の参詣を終えた人々が組織する講であり、その講によって厳しい規約に基づいて行事が実施されていたからこそ、浅間さんの堂舎の造営の見え方に、地域の人々からの支援を受けることができていたのではないだろうか。

その後、明治中期に鉄道が敷設され、南張からの富士山への参詣は従来ほど困難を伴うものではなくなくなり、さらに修行の要素を示す崇拝を取るこの地域の浅間山への参詣というものの重要性が失われた可能性も指摘できる。

しかしながら、上記のように講の性格が変化したとしても、南張富士講は、家風隆盛と家業の繁栄を祈願するための重要な組織であるとともに、会食が伴う様式も講員の楽しみの一つであったからこそ、講が続けられた証左となるだろう。しかし、富士山への信仰が薄れて行くのでは、講に加入するためには富士山の参詣を清ませなければならないという条件は維持されており、昭和52年まで富士山への参詣が続けていたのである。

本稿では、伊勢志摩地方における富士山に対する信仰の一体性として、南張富士講に注目し、その変遷を明らかにした。しかしながら、伊勢志摩地方では、南張富士講とは異なり、現在でも富士山への参詣や崇拝、浅間さんの祭礼を実施している地域が存在している。今後、こうした事例を比較することによって、

写真7 南張の「浅間さん」

また、造営にあたっては、南張の人々から多くの寄付があったので、富士浅間造営動機帳によると、米や金の寄付73件が挙げられている。これは講員の数よりも多い数字であり、天保3年は20名、明治20年は28名、大日如来を祀る南張の浅間さんが、地域全体から重要視されていた様子を伺うことができる。

さらに、明治20年、明治39年の造営の際の記録である『富士浅間御造営名付諸入費用並講費載筆簿』によると、供帳は造営に携わった大工に手でされただけではなく、村内の全ての人々が納されていることが記されている。南張の富士講の講員にとっても、浅間さんの造営が地域の人々に支えられているということを認識していたのではないだろうか。

しかしながら、南張富士講において引き継がれてきた記録類においては、明治39年以降の造営の記録を確認することはできない。浅間さんの造営からも、この時期から南張において、富士山と結びついていた浅間さんとの関わりが薄れていき、結果として山飾りや崇拝が実施されなくなり、浅間さんへの参詣もおこなわれなくなった姿が見えてくるのである。

5. おわりに

本稿では、伊勢志摩地方における富士山に対する信仰の一体性として、南張富士講において受け継がれてきた約200年にわたる記録類の記載をもとに、富士山への参詣、定式祭礼、下向日、浅間さんの造営といった南張富士講の行事とその変遷について取り上げることを大きな目的とした。

分析の中では、南張富士講の行事は約200年の間、大きな変化をせずに実施されてきたわけではなく、様々な変化があったことを取り上げた。その中でも、明治30年代後半から40年代前半かけての時期に、南張の地で実施される主要行事である定式祭礼の中で、大日如来を祀る浅間山への参詣や崇拝を取るということが実施されくなり、地域の氏神である楠宮八柱神社への参詣を中心とする行事となったという、大きな変化が見られた。この変化は、修験道の影響を受け、富士山への信仰がベースとなっていったと思われる徳川の南張富士講の性格が失われ、氏神の信仰を中心とした講となっていったことを示すものとも捉えることができるであろう。

その背景にどのような要因が関係していたのかを明らかにするためには今後の課題の一つであるが、その一つの可能性として、明治中期からの鉄道網の発達ということが挙げられるかもしれない。従来であれば、南張から船で乗り継ぎ、東海道へと入った後は陸路で富士山へと参詣するという形が取られていた。それは現在では考えられないほど困難な旅である、まさに修行の一つであったといえる。そうした富士山の参詣を終えた人々が組織する講であり、その講によって厳しい規約に基づいて行事が実施されていたからこそ、浅間さんの堂舎の造営の見え方に、地域の人々からの支援を受けることができたのではないだろうか。

その後、明治中期に鉄道が敷設され、南張からの富士山への参詣は従来ほど困難を伴うものではないようになり、修行の要素を示す崇拝を取るこの地域の浅間山への参詣というものをの重要性が失われた可能性を指摘できる。

しかしながら、上記のように講の性格が変化したとしても、南張富士講は、家風隆盛と家業の繁栄を祈願するための重要な組織であるとともに、会食が伴う様式も講員の楽しみの一つであったからこそ、講が続けられた証左となるだろう。しかし、富士山への信仰が薄れて行くのでは、講に加入するためには富士山の参詣を清ませなければならないという条件は維持されており、昭和52年まで富士山への参詣が続けていたのである。

本稿では、伊勢志摩地方における富士山に対する信仰の一体性として、南張富士講に注目し、その変遷を明らかにした。しかしながら、伊勢志摩地方では、南張富士講とは異なり、現在でも富士山への参詣や崇拝、浅間さんの祭礼を実施している地域が存在している。今後、こうした事例を比較することによって、

5 富士市市民部文化振興課編『富士市文化財調査報告書 第五集 岩淵鳥居講』富士市教育委員会、2017年、47頁参照。

6 岩淵小一郎『富士講の歴史』（著者出版、1983年、243～244頁）参照。現在でも12年に一度の年に富士山への参詣を実施している伊勢市神社地区では、参詣に伴う費用は12年間住み立っていることから（大高康正氏のご教示による）、南張富士講のように参詣の数に各自で用意するということの伊勢志摩地方で一般的なのか、それとも独特なのかについては、今後の課題とした。

7 志摩地方の郷土誌研究の大著『志摩の民俗 上』（鈴木敏雄著、三重県郷土資料刊行会、1969年）には、南張富士講の講員が富士参詣の際に歌ったという『富士講の唄』が採録されている。歌詞には、参詣の道中の様々な場面が登場しており、その内容から、幕末から明治初期の道中を歌ったものと推測される。この中に、「三宮寄いの夜はかずやる 四軒塀はかずやる」の歌詞があり、伊勢から吉田（豊橋）までは船で移動する情景が広われていた。

8 ここでいう山とは、南張で『浅間さん』と呼ばれる大日如来を祀る場所のこと。

9 この規約には年代が記されていないが、規約の最後に記されている当番の一軒、鈴木春太氏が明治31年に講を抜けたことが『南張富士講帳簿』134頁に記されているため、規約の年代を明治30年代とした。
ふじのくに茶の都ミュージアムにおける静岡茶の愛飲促進に向けた教育普及の取組について（事例報告）

ふじのくに茶の都ミュージアム 学芸課 新聞 知子・永谷 隆行

ふじのくに茶の都ミュージアムは、お茶の産業、歴史、文化、民風を広く紹介し、本県茶業の振興に寄与する施設として、平成30年3月24日に開館した。ミュージアムの常設展では、お茶の起源と世界への広がりや日本及び静岡のお茶について展示し、身近な存在である「お茶」を様々な角度から紹介している。

本県にとってお茶は重要な基幹産業であるが、静岡市における1世帯当たりの年間の緑茶(リーフ茶)購入量・金額は、平成10年の2,234g、12,361円から、平成29年の1,517g、6,600円と減少している。自分でお茶をいれて飲むことは、茶どころ静岡の一般家庭においても日常的な光景ではなくなりつつある。

こうした背景もあり、静岡県では、開館に先立つ平成28年12月27日に「中小学校の児童生徒の静岡茶の愛飲の促進に関する条例」（以下、愛飲条例」という。）が制定された。この条例は、中小学校において、児童生徒が静岡茶を飲む機会及び児童生徒に対する静岡茶の食育の機会を確保することにより、児童生徒の静岡茶の愛飲を促進することを目的としている。

お茶への関心を高め、理解を深めていただき、ひいては静岡茶の愛飲へつなげていくことは当館の責務のひとつである。特に次世代を担う子どもたちに、いかにお茶への関心を持ってもらうかは重要な課題であるため、学芸課職員が中心となり、今年度は以下の取組を実施した。

１ 学校教育における取組
（1）学校団体の見学の受入れ
当館では学校団体の見学を積極的に受け入れているが、常設展示の解説パネルは、中学校卒業程度の水準で作成されているため、小学生が見学しても展示内容を十分に理解できない場合がある。そこで、学校団体が見学を行う場合、希望校を対象に見学前のオリエンテーションの実施や子ども向けワークシートの配布を開始した。

子ども向けワークシート

常設展を見学する小学生
子ども向けワークシートでは、展示室の中から「体験」ができるコーナーを中心に、重要な約20箇所を抜粋して紹介している。学校見学の受け入れを行うなかで把握した「来館する小学校の多くは3年生」、「見学に当てる時間は60分程度」、「触る・香りをかぐといった体験やクイズ形式の投げかけに興味を持つ」といった傾向を反映させ、加筆修正を重ねてワークシートを制作した。また、子ども向けワークシートは当館のウェブサイトからダウンロードできるようにし、見学前に学校教諭に確認してもらえるようにした。

(2) 教諭向け研修会の実施
日時：平成30年6月20日(木)及び21日(木)
13:20～16:00（2回実施）
会場：ふじのくに茶の都ミュージアム多目的ホール
参加者：県内の栄養教諭等職員103人

県教育委員会及び県お茶振興課とミュージアムの共催で、学校の栄養教諭等職員向けのお茶の研修会を実施した。初めに、当館副館長とお茶の生産者の講話でお茶の基礎を学んだ上で、常設展示の見学、数種類の静岡茶の飲み比べを行った。愛飲条件の制定を受け、栄養教諭の中には日本茶アドバイザーの資格を取得する方もおり、学校においてもお茶への関心が高まっている。ミュージアムでお茶の歴史や喫茶文化を学び、実際にお茶に触れたり、香りをかぐといった体験を通じて理解が深まったと考えられる。「今日学んだことを子どもたちに伝えたい」「子どもへの指導方法の参考になった」といった感想も多く聞かれた。

2 保護者と子ども向け事業の実施
子ども及びその保護者を対象とした事業を実施し、学校以外の余暇の時間を利用してミュージアムに来館してもらうよう取組を行った。

(1) 夏休みに会期を合わせた企画展
「知って得するお茶のヒミツ」
会期：平成30年7月14日(土)～9月9日(日)
会場：ふじのくに茶の都ミュージアム企画展示室

お茶の機能性、お茶の香り・味・色など、様々なお茶の秘密を子ども向けに分かりやすく展示した企画展を実施した。難しい内容を身近に感じてもらうように、「カテキン」、「テアニン」などお茶の成分をイメージしたオリジナルのキャラクターを登場させる工夫を凝らした。また、会期中は、エチュードレートによる展示解説を毎日行うとともに、自由研究の参考になるような子ども向けのお茶関連書籍なども紹介し、子どもお茶に関する学習を支援した。

(2) ホットプレートでお茶作り体験（企画展関連イベント）
日時：平成30年8月5日(日)
9:30～11:30, 14:00～16:00（2回実施）
会場：ふじのくに茶の都ミュージアム多目的ホール
参加者：40人（小学生以下の子どもと保護者）

ミュージアムの敷地にある体验茶園において茶摘みを行い、ホットプレートでお茶を作るイベントを行った。摘んだ葉を炒って揉む、という作業を何度も繰り返してお茶を作り、最後に自分が作ったお茶を各自でいって味わった。茶摘みから製造、いわゆる体験しながら多くのことを学べる良い機会となった。夏休みの自由研究を行う子どもを主な対象としたが、同伴した保護者も熱心に取り組んでいた。日ごろ飲んでいるお茶の製造工程を正しく理解している人は大人でも少なく、一杯の教育普及が必要であると感じた。
３　課題と今後の展望

開館からまだ1年を経過していなかったため、通年における学校団体の動向などはまだ把握できていないが、平成30年度は12月末時点で、32校、1,556人の小中学生（特別支援学校、高校、大学まで含めるとき36校、2,264人）が学校行事として見学に訪れている。現在は近隣の学校が1校とんどであるため、より多くの学校に利用してもらえるよう、情報発信に力を入れていきたい。

課題としては、学校団体は春や秋の観光シーズンの見学が多く、混雑のため子どもが展示を見つからなくなってしまうこと、また、大人数で来館した場合に人気の体験展示に子どもたちが集中してしまうなどの点があり、これから受入れ方法等を改善していく必要がある。さらに、遠方から来館が難しい学校がお茶を学ぶためのプログラム（出前授業や資料貸出等）を検討していきたい。学校教諭等への研修は、学校が必要とする情報を的確に提供できるよう、より発展させた内容で継続的に実施していく必要がある。また、子ども向けの講座については、開始時間や所要時間、運営方法をより工夫して実施するとともに、観客の気持ちを念慮していきたい。

ミュージアムの様々な企画を企画して、お茶は世界中で愛されている素晴らしいものであるということも知ってもらい、子どもたちが静岡県の茶業業であるお茶に誇りを持ち、お茶好きとなることにつなげていきたい。

(1) 総務省家計調査による
(2) NPO法人日本茶インストラクター協会が認定する資格。
消費者への日本茶に関する助言等を行う初級指導者。
新収蔵品紹介

上原美術館所蔵　大日如来坐像

公益財団法人上原美術館　菅野　龍雄

上原美術館では新たに鎌倉時代に作られた大日如来坐像（図1）を収蔵いたしました。この大日如来像は大きさ30.9cmばかりの小さな像ですが、様々な情報が読み取れています。その一端をご紹介したいと思います。

大日如来は真言密教の世界観において宇宙の真理そのものとされる中心的な仏です。日本では平安時代以降に多く供された仏像が作られました。大日如来の形は大きく分けて二つに分類されます。一つは側面で様を描き左側の人差し指だけを立て、その指を右手で覆う形の「印（智拳印）」を結ぶ、金剛界大日如来。もう一つは坐禅するように膝前で手を重ね合わせる印（法界定印）を結ぶ、胎蔵界大日如来です。上原美術館の大日如来像は胎蔵界の形となります。もともとは胎蔵界大日如来であるとわかります。胎蔵界の大日如来像は金剛界の大日如来像よりも比較的残っている作例が少なく、そういった点で貴重な像と言えます。

上原美術館の大日如来像の魅力は、その造形美をもることから、像の内蔵に墨書で制作年代と思われる年号や注文主と制作者の名前が記されている（図2）、像の作られた背景の読解が読み解ける点です。この墨書からわかると、鎌倉時代後期にあたる文永7年（1270）に大師「行顕」が作ったことが、僧侶の「金剛仏（仏師）」が仏主（注文主）となり、手代師（仏師）の手を借りて大日如来像を供養したことがわかります。

仏像の内部に文字を記すことが可能ならば作り方に秘密があります。この大日如来像は頭から体の大部分を一本のヒノキ材から彫り出しています。これに替わり、頭上の髪を結いあげた表現）を、肩から先の腕、足を組んだ脚部などは別の材を足すという構造で作られています。この時点では内部が空洞になっていないため、頭と体の主要な部分をある程度彫り入れたタイミングで、耳の後ろ辺りで前後の二つの材に割り離します。こうすることで像の内側を形することが可能となり、墨書を記す空間が作れます。本像の首には三通りという本本のたわみを表しますが、その下に頸の痕が線状に見えます（図3）。これは造点と言え、志図的に一度首を割り離す加工の痕跡です。剣首は刀に玉（水晶）を装い「印」を鋲入れるために行われます。様々な角度から顔を仕上げられるメリットもあります。小さい像ながらも丁寧に作り上げていく「行顕」の姿勢が感じられます。

「行顕」という仏師についてですが、今のところ本像以外の作例・記録が確認されておらず、どのような仏師であったかは詳しく述べられません。「行顕」については記録手がかりの大日如来像に表れた特徴にあります。彼の作風は、鎌倉時代前期の温かみある仏像に比べると顔立ちも厳かな表情に落ち着き、全体的に滑らかにまとめられている印象を受けます。体の立体感の表現は自然な人体表現から離れて、胸や腹部がやや扁平になるなど、鎌倉時代後期の仏像全体に見られる特徴が表されています。
像を模してみとれる、心より肉実の-au-の奥行を深く（図4）、
正面からはあまり感じられなかった仏像があることに気づきます。
体に奥行を持たせる表現は、鎌倉時代の慶派仏師が
作った仏像に見られる特徴の一つです。慶派仏師は鎌倉時
代期に活躍した慶雲（？～1223）が有名ですが、慶雲の作
る仏像は量感ある人体表現が特徴です。1270年という時代
は既に慶雲や、鎌倉の仏像を作ることで知られる慶雲長男の
善慶（1173～1256）も世を去り、新しい世代へと変化しつつ
ある時代です。善慶の後を継ぎ慶派の中心を担っていたのは
康円（1207？）という仏師です。康円が文永12年（1275）に
作った京都・神護寺の慶円明王坐像という仏像が残っています
が、この像も台座から見ると腹部を突き出して、奥行をしっ
かりと持っていることがわかります。本像に見られる作風は慶
雲の量感表現と共に、映像的極端にまとめ上げる造形
感覚も織り上げた時代の作風と言えるのではないでしょうか。こ
のような作風の特徴から、「行順」は慶派仏師に近い立場の
仏師であった可能性が考えられます。

残念ながら本像が元々どの寺院に安置されていたのか
まではわかりませんが、頼主である「静快」が制作の背景を考えて
いくうえでのヒントになります。「静快」は「金剛仏」という号
を名乗っていること、大日如来に信仰を寄せている点から真
言宗の僧侶であると考えられます。共に銘文に記された「靜
賢」も、「静快」と同じく「静」の字を冠することから、両者は師弟
関係にあった可能性もあります。頼主である「静快」の願いが
記されていないため、何を願って大日如来が作られたのかは
詳しくわからないのですが、像の大きさが30.9cmと小柄なこと
を考えると、恐らくは「静快」が自身の念仏（個人的な信仰の
ための仏像）として、制作を依頼したものではないかと考えら
れます。当初は眉子に納められて安置されていたのでしょうか。

大日如来坐像が作られてから上原美術館に所蔵されるま
での約750年間、様々な人の手を渡ってきたと想像されます
が、南米のアルゼンチンにあったという話も伝わっています。
「静快」の手を離れてのち、どのような経緯で海外に渡ったか
は定かではありませんが、その話を裏付けるかのように像底
にはスペイン語で書かれたラベルが貼られています。「行順」
は自分が彫った仏像が地球の裏側まで渡り、再び日本に戻っ
てきて、美術館で展示されるなど果たして想像したもので
でしょうか。作られた当初の完璧な姿ではありませんが、本像が
現代まで伝えられてきたことにより、「静快」や「静賢」、「行順」
という人達が鎌倉時代に生きたことを知ることができます。
大きな展示室の中では見過ごされてしまいそうなサイズの仏
像ですが、その小さな体の中には様々な歴史が詰まっていま
す。上原美術館の展示室で足を止め、ゆっくりと時の流れを
感じてみて下さい。

※今回ご紹介した大日如来坐像是上原美術館の所蔵品で
展示いたします。
展示スケジュールの詳細については上原美術館HP
(http://uehara-museum.or.jp)をご確認ください。
展覧会「須田国太郎 - 上原美術館コレクションから -」報告と、その空間表現技法の一考察

公益財団法人上原美術館 齊藤 陽介

はじめに

本論文は大きく2つの章からなっている。第1章では、上原美術館で開催した展覧会「須田国太郎 - 上原美術館コレクションから -」の報告を行う。特に展示照明について記述し、当館で試みたライティングについて紹介したい。第2章では、須田作品がもつ空間性について検討を行う。はじめに先行研究を概観し、彼の作品を須田自身の写実主義芸術論をもとにして検討し、その結果をもとに、その空間表現技法の一端について分析を行う。そこでは、須田がカメラ・写真の工夫を用いた各種実験を検討・実験を通じて、上原美術館の所蔵作品を中心に考察を進める。

1. 展覧会「須田国太郎 - 上原美術館コレクションから -」報告

上原美術館近代館では2018年9月22日（土）から同年12月9日（日）まで展覧会「須田国太郎 - 上原美術館コレクションから -」を開催した。本展では6年ぶりとなる須田国太郎の回顧展であり、当館コレクションの中心である須田作品を39点紹介した（資料1・2、図1-7）。本展では彼の「水墨」をテーマとして、その色彩表現に迫ることを企画している。第1展示室では、作品はおおよそ年代に沿って展示している。第2展示室では鷹や能、銅版画に加えて、当館旧工房である自筆原稿「マチネスの素描」などを紹介。須田芸術の広がりと、彼の美術史家としての姿をかがえる資料を紹介した。第3展示室では、第2展示室の自筆原稿と絡めてマチネス作品、京都生まれで同じ画業出身である須田、梅原龍三郎、安井春太郎の初期作品と、彼らが師と仰いだセザンヌ、ルノワールからの作品を並べるなど、須田以外の作家作品も紹介している。

さて、須田作品がもつ色彩の奇妙さは、彼の作品の特徴である。それは印刷物での色彩再現や、照明による色の変動にともない変化を追求するため、照明強度によって見え方が大きく変わるということである。美術館学芸員によって報告されている。これにより、実物が大きく異なるが、実物の照明による見え方が大きく変わってしまう。どんな作品でも照明の照度によって見え方は変わるが、須田作品はそうしたギャップが大きいように思われる。

須田作品に強い光を当てると、一見、黒ずんで見えていた部分にも、多くの色彩が見られることがある。例えば、農村展観（小野風景）（図8）の画面左下部（図9）には、山陰の風景の中に朱砂、緑、紫、青など様々な色彩が重層的に施されている。本展示では、こうした暗部の色彩と、須田が面にほどこした「墨色」を如何に見るかが展示の肝である。それを実現するため、今回の照明作業は株式会社工事に実施いただいた。

ライティング作業において、作品の照度を下げれば墨色は出るが、それ以外の色彩が失われることもある。逆に上げ過ぎると墨色が見せかけてしまう。また、展示室内の照度差が激しいと、作品の照度は十分だと鑑賞者にとっては作品が見えにくい環境になってしまう。こうした課題を克服するために、展覧の中心となる第1展示室では、複数のスポットライトを組み合わせながら照明を行っている（図10、11）。

まず、作品下部の壁面をスポットライトで照らす（図10上段の1灯）、スポットライトの光をつけて壁全体をウォールウォッシュのように照らすことで、部屋のベースとなる照明を作っている。次に作品には2種類のライトを使う（図10下段の2灯）。一方のスポットライトは作品全体を照らし（図10下段左）、もう一方のカターライトは作品の画面のみを照らしている（図10下段右）。前者は約20lxで作品全体を照らし、後者はあわせて画面中央が明るい100lx前後になるように調整されている（紙作品では70lx程度）。この組み合わせで画面の照度を保ちつつ、鑑賞の妨げとなる額縁などの反射光を低減している。作品の色彩を最大限引き出すとともに、鑑賞しやすい展示空間となることが期待されている。表現手法は、照明の下で須田作品を観察し、彼が実践していった微妙な色彩変化の手法や、その空間構成、発色の工夫に改めて気づかされた。そして照明次第では、彼の作品がもつ印象を大きく変えると感じた。今回の展示照明が、来館者の目を導くようになることを期待する。
と違う段階に入ったといえるだろう。
さて、以下ではこうした展示環境のもとで、須田作品の空間表現技法について得た知見を記述していく。まず、先行研究を確認し、そこで指摘される非遠近法的空間および、実際の風景と作品に見られる差をもって、須田芸術を「反自然主義」と評することについて検討を加えたい。そこでは、須田の卒業論文「写実主義」で述べられている芸術論に依拠しながら、彼の作品を、あくまで、その独自の写実主義にのっとった作品として捉えることを提案したい。次に、非遠近法的空間と言われるその作品が、いかに観客を獲得しているかを、作品に即して具体的に検討する。特に油絵具のヴァルールとマティエールに注目する。最後に、カメラ・写真がもたらす視覚体験を、須田が絵画制作に利用した可能性を指摘したい。そこでは、余白の上に見える背景表現や輪郭の処理の仕方に注目する。

【資料1】「須田国太郎-上原コレクションから-」展示図

【資料2】出品リスト
第1展示室

<table>
<thead>
<tr>
<th>作家名</th>
<th>作品名</th>
<th>制作年ほか</th>
<th>材料・技法</th>
<th>サイズ(cm)</th>
<th>備考</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1</td>
<td>須田国太郎</td>
<td>女のトルソ</td>
<td>1920(大正9)</td>
<td>鉛筆,紙</td>
<td>25.4×17.6</td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
<td>須田国太郎</td>
<td>山の斜面</td>
<td>1920(大正9)</td>
<td>油彩,カンヴァス</td>
<td>53.0×65.0</td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
<td>須田国太郎</td>
<td>トマホークに於て</td>
<td>1920(大正9)</td>
<td>鉛筆,紙</td>
<td>49.5×64.0</td>
</tr>
<tr>
<td>4</td>
<td>須田国太郎</td>
<td>聖母像,サン・ヴィセンテ堂</td>
<td>1920(大正9)</td>
<td>鉛筆,紙</td>
<td>27.8×23.7</td>
</tr>
<tr>
<td>5</td>
<td>須田国太郎</td>
<td>男性像,サン・ヴィセンテ堂</td>
<td>1920(大正9)</td>
<td>鉛筆,紙</td>
<td>27.8×23.6</td>
</tr>
<tr>
<td>6</td>
<td>須田国太郎</td>
<td>特別購入デッサン</td>
<td>1920年代</td>
<td>鉛筆,紙</td>
<td>23.5×27.8</td>
</tr>
<tr>
<td>7</td>
<td>須田国太郎</td>
<td>ハッカ</td>
<td>1922(大正11)</td>
<td>油彩,カンヴァス</td>
<td>38.0×49.0</td>
</tr>
<tr>
<td>8</td>
<td>須田国太郎</td>
<td>人体習作</td>
<td>1925(大正14)</td>
<td>油彩,カンヴァス</td>
<td>57.5×40.0</td>
</tr>
<tr>
<td>9</td>
<td>須田国太郎</td>
<td>農村展望(小諸風景)</td>
<td>1934(昭和9)</td>
<td>油彩,カンヴァス</td>
<td>59.0×90.0</td>
</tr>
<tr>
<td>10</td>
<td>須田国太郎</td>
<td>萩絮</td>
<td>1934(昭和9)</td>
<td>油彩,カンヴァスボード</td>
<td>40.4×31.4</td>
</tr>
<tr>
<td>作家名</td>
<td>作品名</td>
<td>制作年ほか</td>
<td>材料・技法</td>
<td>サイズ(cm)</td>
<td>備考</td>
</tr>
<tr>
<td>-------</td>
<td>-------</td>
<td>------------</td>
<td>-----------</td>
<td>------------</td>
<td>------</td>
</tr>
<tr>
<td>11</td>
<td>須田国太郎</td>
<td>幽物</td>
<td>1935（昭和10）</td>
<td>油彩、カンヴァス</td>
<td>64.5×53.0</td>
</tr>
<tr>
<td>12</td>
<td>須田国太郎</td>
<td>樹林</td>
<td>1935（昭和10）</td>
<td>油彩、カンヴァス</td>
<td>45.7×52.9</td>
</tr>
<tr>
<td>13</td>
<td>須田国太郎</td>
<td>悲苦の軸風堂（平等院）</td>
<td>1936（昭和11）</td>
<td>油彩、カンヴァス</td>
<td>52.0×64.0</td>
</tr>
<tr>
<td>14</td>
<td>須田国太郎</td>
<td>スケッチブック「昭和11年日記」</td>
<td>1936（昭和11）</td>
<td>鉛筆、紙</td>
<td>19.6×25.4</td>
</tr>
<tr>
<td>15</td>
<td>須田国太郎</td>
<td>デラのクローのトルソ</td>
<td>1936（昭和11）</td>
<td>エッチング、鉛筆</td>
<td>12.0×9.0</td>
</tr>
<tr>
<td>16</td>
<td>須田国太郎</td>
<td>農村展望</td>
<td>1937（昭和12）</td>
<td>油彩、カンヴァス</td>
<td>40.0×52.0</td>
</tr>
<tr>
<td>17</td>
<td>須田国太郎</td>
<td>鳥と花</td>
<td>1942（昭和17）</td>
<td>油彩、カンヴァス</td>
<td>37.0×45.0</td>
</tr>
<tr>
<td>18</td>
<td>須田国太郎</td>
<td>尾道水道</td>
<td>1946（昭和21）</td>
<td>油彩、カンヴァス</td>
<td>46.0×54.0</td>
</tr>
<tr>
<td>19</td>
<td>須田国太郎</td>
<td>南門</td>
<td>1947（昭和22）</td>
<td>油彩、カンヴァス</td>
<td>37.8×45.0</td>
</tr>
<tr>
<td>20</td>
<td>須田国太郎</td>
<td>卓上静物（バラ）</td>
<td>1950（昭和25）</td>
<td>油彩、カンヴァス</td>
<td>74.0×91.0</td>
</tr>
<tr>
<td>21</td>
<td>須田国太郎</td>
<td>働客</td>
<td>1953（昭和28）</td>
<td>油彩、カンヴァス</td>
<td>37.7×45.5</td>
</tr>
<tr>
<td>22</td>
<td>須田国太郎</td>
<td>畑</td>
<td>1954（昭和29）</td>
<td>油彩、カンヴァス</td>
<td>80.0×65.0</td>
</tr>
<tr>
<td>23</td>
<td>須田国太郎</td>
<td>九重山</td>
<td>1955（昭和30）</td>
<td>油彩、カンヴァス</td>
<td>46.0×54.0</td>
</tr>
<tr>
<td>24</td>
<td>須田国太郎</td>
<td>水車</td>
<td>1955（昭和30）</td>
<td>油彩、カンヴァス</td>
<td>50.0×60.6</td>
</tr>
<tr>
<td>25</td>
<td>須田国太郎</td>
<td>スケッチブック「F」</td>
<td>－</td>
<td>鉛筆、紙</td>
<td>24.7×38.4</td>
</tr>
</tbody>
</table>

第2展示室

<table>
<thead>
<tr>
<th>作家名</th>
<th>作品名</th>
<th>制作年ほか</th>
<th>材料・技法</th>
<th>サイズ(cm)</th>
<th>備考</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1</td>
<td>須田国太郎</td>
<td>高貴寺通望</td>
<td>1933-34（昭和8-9）</td>
<td>油彩、カンヴァス</td>
<td>41.0×53.0</td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
<td>須田国太郎</td>
<td>北条</td>
<td>1934（昭和9）</td>
<td>油彩、カンヴァス、板</td>
<td>23.6×33.0</td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
<td>須田国太郎</td>
<td>狗鶏</td>
<td>1936（昭和11）</td>
<td>エッチング、紙</td>
<td>9.0×12.0</td>
</tr>
<tr>
<td>4</td>
<td>須田国太郎</td>
<td>バラ</td>
<td>1939（昭和14）</td>
<td>油彩、カンヴァス</td>
<td>31.6×40.0</td>
</tr>
<tr>
<td>5</td>
<td>須田国太郎</td>
<td>夏花</td>
<td>1939（昭和14）</td>
<td>油彩、カンヴァス</td>
<td>45.0×51.0</td>
</tr>
<tr>
<td>6</td>
<td>須田国太郎</td>
<td>鳥</td>
<td>1942（昭和17）</td>
<td>油彩、板</td>
<td>36.5×45.3</td>
</tr>
<tr>
<td>7</td>
<td>須田国太郎</td>
<td>能「葵上」</td>
<td>1948（昭和23）</td>
<td>鉛筆、紙</td>
<td>25.3×73.8</td>
</tr>
<tr>
<td>8</td>
<td>須田国太郎</td>
<td>能「葵上」</td>
<td>1948（昭和23）</td>
<td>鉛筆、紙</td>
<td>25.3×73.8</td>
</tr>
<tr>
<td>9</td>
<td>須田国太郎</td>
<td>木立</td>
<td>1950（昭和25）</td>
<td>鉛筆、紙</td>
<td>38.0×45.5</td>
</tr>
<tr>
<td>10</td>
<td>須田国太郎</td>
<td>蓼</td>
<td>1950（昭和25）</td>
<td>水墨、和紙</td>
<td>56.5×67.5</td>
</tr>
<tr>
<td>11</td>
<td>須田国太郎</td>
<td>横蔭著婦習作</td>
<td>1950-55（昭和25-30）</td>
<td>エッチング、紙</td>
<td>12.0×15.2</td>
</tr>
<tr>
<td>12</td>
<td>須田国太郎</td>
<td>蓼</td>
<td>1955（昭和30）</td>
<td>油彩、板</td>
<td>33.5×23.5</td>
</tr>
<tr>
<td>13</td>
<td>須田国太郎</td>
<td>草稿「マティスの素描」</td>
<td>－</td>
<td>ペン、原稿用紙</td>
<td>19.5×26.5</td>
</tr>
</tbody>
</table>

第3展示室

<table>
<thead>
<tr>
<th>作家名</th>
<th>作品名</th>
<th>制作年</th>
<th>材料・技法</th>
<th>サイズ(cm)</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1</td>
<td>ポール・セザンヌ</td>
<td>Paul-Cézanne</td>
<td>ウルビノ壁のある静物</td>
<td>1872-73</td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
<td>オーギュスト＝ルノワール</td>
<td>Pierre-Auguste Renoir</td>
<td>アルザス風の橋</td>
<td>1873</td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
<td>アンリ・マティス</td>
<td>Henri Matisse</td>
<td>霊の前に立つ白いガウンを着た裸婦</td>
<td>1937</td>
</tr>
<tr>
<td>4</td>
<td>アンリ・マティス</td>
<td>Henri Matisse</td>
<td>アネリーズの肖像</td>
<td>1914</td>
</tr>
<tr>
<td>5</td>
<td>アルベール・マルケ</td>
<td>Albert Marquet</td>
<td>ルーヴルのヴェルニエおよびマルセイユ</td>
<td>1915</td>
</tr>
<tr>
<td>6</td>
<td>パブロ・ピカソ</td>
<td>Pablo Ruiz Picasso</td>
<td>酒窓のある静物</td>
<td>1937</td>
</tr>
<tr>
<td>7</td>
<td>ジョルジュ・ブラン</td>
<td>Georges Braque</td>
<td>素晴らしくて</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>8</td>
<td>梅原龍三郎</td>
<td>夜景</td>
<td>1909（明治42）</td>
<td>油彩、カンヴァス</td>
</tr>
<tr>
<td>9</td>
<td>安井直子夫人</td>
<td>静物</td>
<td>1912（明治45/大正元）</td>
<td>油彩、カンヴァス（板張り）</td>
</tr>
<tr>
<td>10</td>
<td>須田国太郎</td>
<td>丹波口</td>
<td>1914（大正3）</td>
<td>油彩、カンヴァス</td>
</tr>
<tr>
<td>11</td>
<td>奥村士一</td>
<td>静物</td>
<td>1919（昭和45）</td>
<td>紙本金地彩色、顔料</td>
</tr>
</tbody>
</table>
図1：第1展示室左面・正面
図2：第1展示室右面・入口面
図3：第2展示室正面
図4：第2展示室入口面
図5：第2展示室入口面展示ケース。須田国太郎自筆原稿「マヌスの素顔」と、マディスの複製画（須田国太郎旧蔵）
図6：第3展示室正面
図7：第3展示室入口面
図8：《農村展望（小諸風景）》1934年、上原美術館蔵
図9：《農村展望（小諸風景）》部分図
図10：スポットライト
図11：作品を外した後の壁面。残された照明が壁に当たっている。四角い光は画面のみを照らすカッターに光で、その周りにはほかに見えるのか横線も照らすスポットライトの光。
2-1. 先行研究

須田国孝郎の絵画空間についての先行研究を概観しておこう。

須田の絵画空間の分析として、まず近景と遠景が対峙する二項対立的構図が指摘される。これは、しばしば「近景側角/暗部／遠景側角/明部」と言われ、留学以来から1930年代頃まで、風景画を中心に見だされる特徴である。先行研究において、例えば、留学中の作品であれば《アートライア》[1]、帰国後であれば《発掘》[44]、《花山文書合望遠》[46]などについて、こうした構図が指摘されている。

この遠・近景を対する構図という分析を基に、須田作品では中景が省略され、漸次的奥行・遠近法的空間が破られているという分析が導かれる。遠近法によらない空間は、平面的な印象を与えててしまう。そこで奥行を生み出すために、色彩のヴァルセイや色彩を作る風景色、塗抹法の工夫によるディエールの創出などによって、奥行のある作品が登場してくるという。

2-2. 遠近法の崩壊と須田の写実主義

先行研究では、第1に遠近法的空間との関係が取り上げられている。「中景の省略」といった言葉も、各論者が暗に須田作品を遠近法的見方で捉えようとしていることを示している。しかし、遠近法を須田作品の評価基準とすると、その独自の取り組みが見落とされてしまう可能性がある。

加えて、ここでは現実世界との関係で、作品を捉えようとする視点が温存されている。風景画であれば、作品制作の契機となったと思われる実際の風景を基に、実景とのぞレンにおいても作品が判定されている。一例として《樹木》[12、95、57]についての、下山氏のコメントを取り上げる。

「例えば、《風景（樹木）》10号Fは、「号数別作品目録」10号の項に《囲木 モチ 竹野寺前より昭和10（独立秋季）》とあてて、この絵の具体的モチーフと制作経緯が知られる。ところでは本作が1935（昭和10）年10月初めの第5回独立美術秋季展出品作であるから、少なくとも夏期を用いて描かれた木の木が裸木である筈はない。」

須田の見たモチの木が現実に裸木であったかどうか、いわては実景との類似については本文ではなく立ち入らない。その理由として、実景を基準にその「芸術的変更」[3]の程度をはかるのは、主に2つの点から困難がつまとうからだ。

はじめに、私たちは実際に須田が目にした造形の契機としての現実を、再現することはできない。それは須田固有の経験であり、我々が目にするのは、あくまで我々が自分の目を通じて見る現在の景色である。次に、実景を基準としても、作品が新たに創造した現実や、そこに働く造形原理、それが生み出されるプロセスを明らかにすることできない。それらは作品をみることでのみ明らかになっていくものである。

さてここでの、須田の卒業論文「写実主義」をみてみよう。その要点は、概ね次の3点にあてはまる。第1に複製的模倣説の否定とそれに伴う芸術的変更の肯定、第2にアリストテレス『詩学』にみられる「作品内統一」（必然性）の理論、第3にシャーリング／フォードバーが提起する芸術がもっと現実の能力の指摘である。

先に挙げた実景と作品との比較は、結局須田の「複製的模倣」に陥らざるを得ないであろう。複製的模倣は、対象のあたりまえの姿を描き、少しの変更や想像上の存在を描くことも写実主義からの逸脱をするような考えである。例えば絵画であれば絵具などの材料で対象を捉えることから、文字通りあたりまえの姿を捉えることは、そもそも不可能であるなどの理由から、須田自身そう考えた考えを退けている。むしろ現実を契機として新たな現実を生み出し、作品の現実性の能力こそ、写実主義の要旨であると考えている。

制作の契機となった実景の重要性は看過すべきではないが、それとの比較だけでなく、新たに生み出された現実（絵画）がいかなる造形原理を有するかを分析することによっても、須田絵画の価値の一端を示すことになるだろう。また、アリストテレス『詩学』の分析で記されることは、描かれたような情景が、現実にあるかどうかではなく、「作品内での統一」が重要である。須田の写実主義芸術論においてもこの点は重視されている。

そうした点から、本論では須田作品に反自然主義要素をみる岡部氏や下山氏の観点とは異なる立場から分析を行う。あくまで、須田本人の言説を一応の枠組みとして作品に向き合うと、須田作品はどこまでも自由の写実主義で描かれ、統一されるべき努力がなされていると評価するのが、作品の評価として適切と考えられるからだ。

須田も卒業論文のアリストテレスを論じた箇所で述べているように、「『但著者/必然性を有する限り』芸術に於て現実上に不可能の事物をもこれを許せり」という立場をとる。

先の《樹木》において、モチーフとなったモチの木が、実際
2-3. 奥行創出す技法

第2の遠近法によらない絵画空間における奥行の創出という点について述べる。先に色彩のヴァルールや色面を作る賜彩法、塗抹法の工夫によるマティエールの創出などによって、奥行を生み出すことが、先行研究で指摘されていることを述べた。先行研究においてはその具体的な検討はこれまで充分にされてこなかった。なぜこれらの方法で奥行を表現することが可能であるのかなる。

まずヴァルールについて検討したい。本論文においてヴァルールとは「白と黒を含めた色彩の相互関係から生じる色の強さの度合い」とする。色彩は各々固有の強さをもつが、別の色彩同士が並んだとき、自ずと強弱関係が生じる。結果、重なり合う色彩のうちどちらか一方の色も前へ突き出て、あるいは後退し見せる。こうした性質を奥行表現に適用していけることを細部に確認できるのは「南大门」[図13、SG280、U69]である。

本作は1947年に、東大寺南大門を写生した作品であり、日記では「天竺様の壮大はなんとして表わすべきか」と記されているが、作品の、南大門の第1層目の軒と画面左には林が描かれている。木組みの建築構造を描くにあたって、須田はとんと輪郭線を引くことなく、面的に施された絵具が、そのヴァルールとあいまって立体感を生んでいる。軒は画面右上に行くにつれ突出するようになっており、木組み構造の凹凸感もヴァルールによって捉えられている（図14）。

日記に記した「天竺様」つまり建築様式を描くことが本作の目的である。それを、ほとんど輪郭線を使わずに描いたことから、面的に施された絵具のヴァルールを細部に調整することに、須田が苦心した跡を見ることができる。本作では画面右上方にやや光の反射を感じるもの、激しい明暗の対比よりも、中間調におけるヴァルールの描き分けを課題としている。一方で、主眼となる建築構造以外の部分については、現地での写生を思わせる簡略な筆致にとどめられている。

次に塗抹法・マティエールについて検討する。本論で塗抹法とは、「油絵具の物性を生かした上での絵画表面への絵具の載せ方及び載せた後の処理の仕方」であり、マティエールとは「塗抹法によってもたらされる絵画表面上の表現」とする。塗抹法もマティエールも、色彩の問題として先のヴァルールと重なりあう。なぜなら須田は塗抹法を、バロック時代において、失われた色彩に変化をもたらすため考案されたものと考えているからだ。

「（筆者注：バロック時代の色彩混和による）この自然な暗黒調を一掃して再び古の油絵具の美しさをとり戻すには、どうしたらいいか、これが近代油絵の大問題であった。[中略]油絵具塗抹法もその筆の転換、あるいはナイフ、指を以て筆に代える、あるいは拭きぬぐう等の外、盛り上げ法、削り取りなど、油絵色彩の効果を求めることに汲んだ有様であった。」（KR114-115）
テイエールを、色彩表現技法上の問題として捉えているといえるだろう。

例えば『鳥と花』[図15・U67]に描かれた鳥の羽の表現をみてみよう。鳥の体の中央あたりから尾尾に向かって、白い筋状の流れをみることができる。これはパレットナイフやヘラのようなもので、絵具を割り、下部に貼られた白い絵具が露出することで表現されている（図16）。この細く鋭い表現は、筆による賦彩では実現困難であろう。そして割ることによって生まれるマティエールは、絵具を載せることで生まれるマティエールとは異なる。同じ白い絵具を使ったとしても、そこには別種の色彩表現が実現している。

読者にとってはマティエールを色彩表現ということに違和感を感じることがある。マティエールについて記述する際、しばしば「触覚的（性）」という言葉が用いられる。しかし、筆者は、この用語は専門的な表現であり不正確な記述と考える。なぜなら絵具が「触覚的に見える」とき、それは既に視覚の問題であり、一定の距離のもと絵画を見るとき、目は絵画に触れれているわけではないからである。絵画においてマティエールは視覚の問題である。しばしば「でこぼこ」、「ざらざら」といった言葉で表される質感や肌理も、視覚的に受容されている限り、そこでは直接、触覚が働く余地はないだろう。

結局の所、塗抹法とマティエールは色彩を変化させるものとして、絵具のヴァルーリに変化をもたらす。これは限られた絵具であっても、その塗抹法の工夫によって、色彩表現を拡充するものであった。

続く章では、須田の余白のような背景表現を切り口に、作品の空間表現を検討する。
2-4. カメラ・写真がもたらす視覚体験

須田作品の絵画空間がもつ特徴の一つとして、東洋絵画の余白を思わせる背景表現が挙げられる。須田の絵画を指し「東洋的」あるいは「水墨画的」といった評価はしばしばなされており、背景表現への言及がなされることもある。こうした背景表現は《花と驚》[198]の作者解説で記されているように、画家本人も、東洋絵画との類似性を感じていただろう。しかしこれを余白と呼ぶことはできない。その理由は画家本人があらかじめどこにどのように述べている。

「今日は日本の画家栗枝の一枚をとくとすると、その時に全く西洋的な一枝をかきながら余白を余白としておいておならこの余白を誤ってあります。余白が正しければこの描法は不正であります。二つの異なる感情が別々に対立したままであるからであります。」(KR106) 35

《花と驚》で須田は西洋的な驚を描いている。つまり、たとえば余白のように見える背景であっても、そのまま東洋画と同様の余白と呼んでも、須田自らの芸術論を矛盾してしまいます。道には、この余白のような背景表現は、須田の芸術論に照らしてどのように考えると、矛盾なく作品内における統一を保つことができるだろうか。

恐らく、この背景表現には、カメラと写真が須田にもたらした視覚体験が関係していると思われる。いくつかの先行研究が示している通り、彼はカメラを携えて写生旅行に出かけることがあった。そして、それらを制作に利用していた可能性も、作品とよく似た写真が複数枚残っていることからも、須田は師匠との関係で示唆されている。同年、須田の撮影した写真の展示会も開催されて、その効果は徐々に知られつつある。

須田の撮影した写真について、尾崎氏は「カメラは光を客観化する。その光を絵画に取り入れようとしたと考えられる」と述べている。しかし須田が写真の明暗表現を一つの契機として絵画の作画を考察、表現した可能性はあるだろう。

本稿では明暗に加えて、写真特有の合焦点の一部（ピントが合っている部分）とそうでない部分（ピントが部分）の描写の違いを絵画に取り込む可能性を指摘したい。カメラ・写真が見せるピントが合っている部分と合っていない部分の差が生み出す立体感や、ボケによる主題と背景の切り離しは、須田の視覚経験を更新する契機となったかもしれない。

さきの《花と驚》であれば、驚本体とそれが立つ足場にピント

が合っており、その背景となる景色は、ピントが合わずにボケた状態といえるだろう。背景は無地ではなく、複数の色が重層的に施されている。こうすることで、東洋絵画の余白がもっているリーフを浮き上がらせる機能は、須田絵画の背景表現にもとたれる。

さらに、このカメラ・写真がもたらしたような視覚体験は、別の何かでも展開される。

例えば《牡丹》[194]や《禽舍》[407]をよくみると、ボケた牡丹や鳥々は、ピントの合った牡丹や鳥との関係から、絵画の奥行を示唆している。また《牡丹》(174)の画面右上部、咲ききった薔薇の上には、ダークグリーンの淡ぼかし色の花が3グループほど見える(図18)。これは、その色彩および形状から、薔薇のつぼみがピノキオで描かれたものである(画面左に描かれた薔薇のつぼみも類似)。特に真ん中のものは画面右方向へ伸ばしており、薔薇の茎が長くなる。このボケの表現は、モチーフ同一の重なりと組み合わさることによって、奥行をつくりだしている。こうした表現は、遠近法的枠組みでは捉えられない、須田絵画独自の空間表現を構成する重要な要素といえるだろう。

ここでボケた表現とは、モチーフと、モチーフを重ねる絵具同一のヴァルールの差を弱めることで生み出されている。この点から、とりわけ輪郭の表現は重要である。

輪郭について、藤原記述の哲学的な視点から考案を加えたのは、須田の先輩である美学者・植田寿蔵である。植田は「輪郭を意識するのは色彩の差別を意識することを想定する色、差別なき外しが輪郭はない」と指摘する。

作品の統一、とりわけ統一の色彩的存在に着眼するならば、モチーフに輪郭線を使用することは、作品の統一を困難にする可能性がある。それは絵の具の流れや使われる色彩によっては、作品の統一をやぶくかねない。

ここで輪郭線が引かれた作品を1点みてみよう。例えば、《静物》[19, SG100, U56]の背景には、線に輪郭線が引かれている(図20)。さらに果物籠の果物にも同様に輪郭線が見られる。これらは仮想的に引かれた線と思われる。なぜなら、この輪郭線の機能は、線を挟んだ上下左右の空間や、背景とモチーフを区別するためのものと考えられているからだ。線がなかったとすると、この背景の前後関係はかなり曖昧になり、たいていは主役である果物籠の置かれた空間が曖昧になってしまう。また、果物籠の果物が描く弧の内側には、この輪郭線は及んでいない。これが線が及ぶこと、そのヴァルールの強さゆえに主題(果物)が目立たなくなり、作品の組立を邪魔
してしまおう。この点も、本輪郭線が画面に必須のものであるというよりも、色彩処理上、仮設的に入れるを得なかったと考える理由である。

こうした輪郭線の処理において、さきにみた塗抹法の工夫が有効に働く。《鳥と花》において、鳥は周りの絵具を削る・拭うことによって描出されている。こうした対象を直接的に描かず、周囲を塗り重ね間接的に浮かび上がらせる描法は、水墨画などで使われる『煖雲託月』の技法を思わせる。ピントがあたるように輪郭を強調したければナイフで鋸く削り、ボケたように表現したければ布で上部の絵具が多少残るように拭えよう、あるいは、こうした処理の後に、さらに絵具を載せてもボケのこのような表現は生み出せる（図21）。こうすることで、ボケの差が生ずる立体感をモティーフに持ちさせることができる。

次に、モティーフや奥行を我々が見分ける上では、絵具の重なりが生み出す前後関係が重要である。

例えば、《鳥》［図22、SG235、U66］を見てみよう。この作品では、交差する枝、鳥の尾によってモティーフ同士の前後関係が示されている。左側の鳥の尾は、右側の鳥が留まる枝を覆うように交差しており、鳥がこの枝よりも前にいることが表される。さらに右側の枝に留まる鳥の尾は、この留まっている枝に覆われるように交差することで、枝よりも奥に尾あることが表されている。このモティーフ同士が生み出す前後関係は、絵画における奥行表現の基本である。遠近法に携わるない奥行表現を求める際に、須田がしばしば用いたやり方となる。

さらにヴァーレールの見分けがつかないほど細部な観察の場合は、絵具に残された筆の流れの痕跡（筆毛目）を見つける。したがって、いつから何の形態を生み出す筆触が、モティーフや前後関係といった表現を示唆する。

ここまで、早足で須田の絵画技法について見てきた。筆者がここで述べた知見については、なお検討の余地があるだろう。それを深めていくことは今後の課題としてしたい。

おわりに

本論では上原美術館で開催された展覧会『須田国太郎—上原コレクションから—』の概要と、そこで採用されたライティング手法について紹介した。後半では、須田の芸術論に即して彼の作品を分析し、その空間表現技法としてヴァーレールやマティエールの利用について検討した。そしてカメラ・写真がもたらしたであろう視覚体験をひとつの契機として、須田がそれを

図17：《藤鶴》1950年頃
図18：《藤鶴》部分図

制作に活かした可能性を提起した。今後はこうした知見をさらに深めていきたい。
【凡例】
・下記文献については引用と参照箇所を、次の略号のあとにページ数を併記して示した。
  KR：須田国太郎「近代絵画とリアリズム」1965年、中央公論美術出版
  SS：岡部三郎著『須田国太郎画集』1979年、京都市美術館
  NG：須田国太郎「日本現代画家選III17 須田国太郎」1955年、美術出版社
  KS：『検証・須田国太郎の『筆石村』：その成立と展開を通じて須田芸術の意味を問う』静岡県立美術館、1996年。
※なおNGについてはページ数ではなく該当項目名を併記している。
・引用に際しては、旧漢字と新仮名づかいは、新漢字、新仮名づかいに統一し、送り仮名も現代のそれに改めた（一部を除く）。
・須田国太郎の作品については、図版掲載があるものを、『図○○』としている。また『須田国太郎画集』（京都新聞社、1992年）掲載作品は『SG○○』と記し、上原美術館所蔵作品については、『上原近代美術館コレクション日本近代洋画・彫刻録』（2015年）の掲載番号を『U○○』と記載する。
訳
79回で5,701人の来館者を迎えた。なお同期間、上原美術館仏教館では「伊豆の平安仏・半島に花ひらした仏教文化」展を開催している。
3. 同展覧会において「著色」とは、須田にとまって油絵具の黒を指す言葉として用いている（NG「3冬」）。須田は1955年頃には黒色油絵具としてアイボリー・ブラック（ノアール・テボアール、Nair d' ivoire）を使用している。（NG「須田国太郎のパレットのスケッチ」）
4. 山野英嗣「須田国太郎の描法」「須田国太郎展」カタログ、2005年、京都国立近代美術館、174-177頁。
5. 暗部に多くの色彩を施すことは、須田本人が代表作「犬」（1950年）の解釈で記している。
6. 株式会社灯工舎は上原美術館近代館の照明リニューアル事業（展示室照明のLED化）や、当館仏教館の照明設計などで先進的な美術館照明デザインを実現している。当館の照明デザインについては次を参照。藤原工「照明」「上原美術館ハンドブック」上原美術館、2017年、64頁：土森智典「上原美術館のリニューアル」「静岡県博物館協会研究紀要」第41号、2018年、30-35頁。
7. 主な使用機材は次の通り。壁面および作品用スポットライト：CCS製「MUSEUM COB SPOTLIGHT」（3200K、Ra98）、グレアレスリング：作品用カッターライト：ヤマギワ製「VIO MUSEUM SPOT YT31BW・YT31BB」（3000K、Ra98）、カッターユニット。色温度は青色フィルターにて調整。
8. こうした取り組みは上原美術館Twitterにて一般向けにも紹介されている（挙例1、2）。
8. 例えば次の文献を参照。「水木重信「真昼の暗〜」」「須田国太郎画集」、集英社、1975年、157頁・乾由明「平成・作品解読」「須田国太郎-その生涯と芸術」「カンヴァス日本の名画20須田国太郎」中央公論社、1979年、94頁：鳥田康寛「近代の美術57須田国太郎」至文堂、1980年、35頁：下山泰「須田国太郎・画業の独自性-《筆石村》を中心に」「静岡県立美術館紀要」第5号、静岡県立美術館、1987年、38-59頁：下山泰「須田国太郎短く」「須田国太郎油彩展-もうひとつの世界」白壁観音寺、1995年：大伴秀幸「須田国太郎作水浴について」（上）」「東京学芸大学-造形芸術・演劇学講座研究紀要」第1号、東京学芸大学、1996年、18頁：後藤純一「須田国太郎・絵画を読む」テクノネット
展覧会「須田国雄太郎 - 上原美術館コレクションから-」報告と、その空間表現技法の一考察

社, 2011年, 50頁; 土森智典『須田国雄太郎の絵画空間』『須田国雄太郎・珠玉の上原コレクション』上原近代美術館, 2012年, 80頁。

木村, 前掲書, 158頁; 乾, 前掲書, 93頁; 後藤, 前掲書, 210頁; 土森, 前掲書, 81-82頁。

遠近法の成立については次を参照。岩城見一『ヴィジュアル・デザイン学のための几何学的遠近法』(1974年、新角書房、1975年, 152-161頁)。

KS16-17: 後藤, 前掲書, 165-172頁。こうした風景画と実景との比較を行った古典的研究としてはムール・ドマイユの研究が挙げられる。アール・ムール『塞万提スの構図』(1975年, 原著: Erle Loran, Cezanne's composition: analysis of his form with diagrams and photographs of his motifs, with a new foreword by Richard Shiff, University of California Press, 2006)。

下山隆『須田国雄太郎の新たな相貌―未紹介の油彩画と銅版画をめぐって』「第7回須田国雄太郎展」白銅版画展, 1997年。

SS178。

作品が生み出す現実は、我々の視覚体験を更新する、こうした事態は、たとえば画家・安井佐太郎がセザンヌ作品を見た後の感想などに端的にみることができる。「セザンヌの作品はそれまでに見たこともありませんし、セザンヌという名前さえも知らなかった私はそれから、全くには解りませんでしたが、その時はどういう風にみたか今記憶にありませんけれども、当時黒い、あるいは絵だという印象が残っています。」(中略) それからベルタン・コレクションを見ました。そこで、セザンヌの初期から晩年までのやぶれんぶらの絵の集められておりまして、それを見てすっかりセザンヌが好きになりました。随所感心しました。／そのコレクションを見て、外へ出まして、(中略) その辺の風や人々や風景、絵をケッサンヌの絵のように見えるので、なんだかんだセザンヌの絵を見ているような気がしたことを記憶しております。その後、セザンヌの絵が最終的にでて、何を見てもセザンヌの絵のように見えるので困りました。」(安井佐太郎「セザンヌ」「画家の眼」座右本刊行会, 1956年, 54-55頁。)

この模倣される対象と、そこから生み出された作品の関係については次も参照。植田寿蔵「芸術的環境」植田寿蔵「芸術論論集」京都哲学論社第14巻, 岩城見一編著, 燕影舎, 2001年, 23-55頁。

須田の卒業論文の書き起こしは次を参照。SS185-197。

須田は本論文で、写実主義、自然主義、リアリズムなど、似たような用語をもっているが、これらははっきり同じ意味を表していると考えられるため、本論文ではこれを区別しない。本論文についての研究として次を参照。吉岡健二郎「須田国雄太郎の芸術論形成像―深田康成の影響から」「須田国雄太郎・珠玉の上原コレクション」92-98頁。および当該論文の註26参照。

須田自身、「現実と絶対性を芸術は見捨ててはならない」(KR13) 、といわれるように、現実、あるいは自然を契機として写実主義が成立することを繰り返し述べている。KR14, 204f, 216。

芸術が生み出す現実という考えについては次を参照。吉岡健二郎「第7章 芸術と現実」「近代芸術学の成立と課題」創文社, 1975年, 185-203頁。

SS193。

20 高橋三郎「発掘」「須田国雄太郎」美術出版社, 1963年: 下山, 前掲書。

21 林の作品評価の基本的な考えは、次の文献に負うところが大きい。ノエル・キャロル「批評について」芸術批評の哲学」森根次郎, 勁草書房, 2017年。本書の主要な論点は「はじめに」1-13頁を参照。本書では、須田作品の成功価値を再視する立場をたどる。彼の芸術論に依拠しながら、作品の目的を推測し、それがどのように達成されているかを検討する。

22 下山, 前掲書。

23 徳永郁介「油絵展覧会目録 須田国雄太郎」京都美術館, 1934年, 2頁。

24 岡部, 前掲書:「下山, 前掲書。

25 松田千草「色彩に絡んで～絵具とヴァーレル」色彩からみる近代絵画 - ベーネルより現代へ」三元社, 2013年, 445頁。松田氏はヴァーレルに白と黒も含めることから、それが指す範囲には明度の要素も含めて考えていると思わされる。本論でも明度も含めて本用語を扱う。なお、こうしたヴァーレルという用語の使い方が日本人特有のものである可能性を、森田氏が指摘している。森田恒之「名詞それとも誤誤？～ヴァーレルという言葉をめぐって」「近代画論 - 明治美術学会誌第7号, 三好企画, 2003年, 7-12頁。

26 この色彩がもつヴァーレルを全面的な作品化したのはヨーゼフ・アルバス「方形礼拝」シリーズである。このシリーズ
については例えば次の文献を参照。三木順子「形象という経験：絵画・意味・解釈」勤労書房、2002年、89-91頁。

27 SS136。
28 マティエールという用語も多義的な言葉であるが、本稿では下記文献を参照した。長尾真「油絵のマティエール」美術出版社、1953年、1頁。川崎美術「絵画を解釈する：修復からみた日本画史」日本放送出版協会、2002年、68-69頁。
29 特に盛り上げ法について、須田は言及している。「『楽遊』に『盛り上げ』の如き技巧が常検された。」(略)。これは筆触の面上の感触の効果をも借りるもので、正当な明暗技法を用い外の非常手段であつた。」(KR59)。
30 KR207。
31 雑誌『美人』の座談会の席上、須田とも親交のある京都大学教授・井田勉氏は、須田の絵画について「須田さんの絵も相当触覚的ですね」という発言を残している。須田自身、「それはやっぱり触覚のことは非常にあるんです」と答える。続いて、東洋カメラや油絵具に岩絵具を混ぜるなどマティエール作りの話をするが、それが「『光沢をもつ』の最終的には絵画の光沢、つまり視覚の問題へと着地している。須田国太郎は「座談会触覚性」「美人」46号、総社、1953年、29-30頁。
32 なお、このくだりは編集の森田子龍が、須田に「絵を描きになるときのタッチのお気持ちを聞かせてください」という質問から始まっている。この質問自体に須田は「そんなもんずかしいことを考えたったもんじゃない」、「どうしてそうしなければいけないという気持ちがありません」答えている。森田自身は、タッチ（筆触）が、絵画における精神的なものの表現するというウェシューノ・ド・ラクロワの発言などが沿って、須田絵画にみられるタッチにいかなる精神的なものかを抑えているのかを聞きたいと思っていたのかもしれない。
33 タッチとは、絵画において画家の考えを表現するためのひとつの手段である。（原題：La touche est un moyen comme un autre de contribuer à rendre la pensée dans la peinture。）1857年1月15日付、掲載）原題：Journal de Eugène Delacroix 1855-1863、tome 3、Paris、1895、p.219。
34 岩戸美一「感性論」見洋書房、2001年、299頁。触覚の比喩の関係については次を参照。岩戸美一「芸術的共栄精神の現象学（3）」『研究紀要』京都大学文学部美学美術史学研究室、1998年、63-86頁。
35 須田作品に見られるこうした特徴を論じたものは次の一つを参照。須田平作「須田国太郎（1891-1961）の東洋的水墨画的精神とその展開」『日本の近代美術-欧米と比較して-』見洋書房、1997年、396-408頁。また須田の水墨画を「セザンヌの水墨画」と称する岩戸美一の指摘は大変示唆的である。岩戸美一「（解説）「ポール・セザンヌ（サン・テュクトワール山）」ゴッドフリート・ベーム著、岩戸美一・室谷洋次訳、三元社、2007年、206頁。
36 日本における余白表現については、例えば次を参照。鬼頭美奈子「余白の美-日本画における象徴空間-」「特別展 余白の美-象徴空間の魅力」松栄美術館、2006年、9-14頁。
37 「動物を岩に立たせて、その背景をもたせず、動物そのものに尊厳に周囲から描き出して、それぞれの姿を強調する行き方は、広々る絵画の対象は自然の一角ということを頭に置いても西洋画の写実画に於けるよりも、東洋画に於いて可然絵画の撮影や南画などにより多くみられるのは、東洋画と西洋画の伝統の相違からのであろう。ここでは、それが影絵（シルエット）風で現われた。」（大）、（鶴）と多少これと共通のところがあるのは作者の傾向をのおずから示しているのではないかと思われる。」(KG「鷹 屏」)。
38 もちろん、西洋画において余白の表現はありうる。例えば次を参照。永井隆則「マティエリズム／モデルニテー九世紀半ば以降のフランス美術における素描技法の絵画技法への説明」『モダニズム-アート理論再考-雙作の論理から-』思文閣出版、2004年、22-25頁。
39 こうした余白およびそこに描かれる形態の関係について特に深く関心を示した西洋画家としてはアント・マティエが挙げられるだろう。例えば次を参照。アンリ・マティエ「画家のノート」『画家のノート2』見洋史論、みずず書房、40-46頁。（原著 Henri Matise、Note d'un peintre、1908。Ecrit et propos sur l'art、Paris、1972、pp.40-53。)
40 日記から留学時にカメラを持参したことがうかがえる。例えば、1920年（大正9年）10月12日付の日記に「朝 S. Domingo Vicente 午後 写真 西 SSS7。」S. Vicenteとはヴィラ（Avila）のサン・ヴィセンテ聖堂Basilica de San Vicenteことであろう。この聖堂の南門にある受胎告知の彩画を撮影した写真および、マリア像のディッサン（U42）が残されている。
41 また帰国後も《河内金剛山》と似たアングルで金剛山の写真を撮影している。KS40。
42 例えば、《ムセーの一隅》、《グレコ・イピリアの首》、《モヘンジー》
などの作品で、同じ構図の写真が残されている。帰国後の作品については注34参照。

38 田辺彦太郎『須田国太郎の芸術』『須田国太郎画集』京都新聞社、1992年、8頁・KS7。

39 「須田国太郎写真展」(2014年11月13日-12月6日)、「須田国太郎展 油彩と写真」(2015年9月1日-9月30日)、全て白鶴観画館にて開催。

40 京都市美術館・尾崎真人氏へのインタビュー。西岡一正「若き須田、光への関心：欧州での写真 東京で展示」『朝日新聞』(2014年11月19日付)

41 同版は次の文献に掲載あり。「須田国太郎—珠玉の上原コレクション」41頁。

42 植村寿蔵『芸術哲学』弘文館、1924年、44頁。

43 KR198ff。

44 先行研究で輪郭線を線で描かないことに言及しているのは木村氏である。木村、前掲書、162頁。

また修復家の杉浦氏も須田の絵画には極端に輪郭線が見られないことを記している。杉浦美『須田国太郎の油彩技法』三彩、1号・日本美術出版、1991年、58頁。

ただし、油彩画に素描的線が入ること自体を、須田は問題視したわけではない。油彩画においてはあらわれた筆触が線的な性質をもつ例をティツィアーノやレンブラントに見いただしており、また新印象派のシミャックにおいては「小さな態容された線」も必要なものを見ている。少なくとも油彩画における線は、その線の性質が油彩画の技法的変遷に伴ってそのあらわれ方を変えると、須田は考えていた。須田国太郎『油絵の線』『須田国太郎画集』京都新聞社、474頁。

また本論の範囲を超えるが、須田が輪郭線や線的な表現が顕著な作品を残していることも事実である。こうした作品群については改めて考察したい。

45 こうした仮設的な線について、須田は日本画やペルナールの引用などを用いて言及している。KR108、209f。

46 「観雲託月」は、月を表したい場所の周りに雲を描くことによって、月を表す技法のこと。愛知大学中日大辞典編纂所編『中日大辞典』第3版、大修館書店、2010年、701頁。

47 岩城「ヴィジュアル・エディケーションのために—幾何学的遠近法：知覚に埋め込まれた文化」159頁。

48 絵画と写真の在来関係は、西洋においてみればフルメールのカメラオブスクリュから、アメリカのフォトリアリズム、ゲルハルト・リヒターのフォト・ペインティングなどその「写実」の系譜は枚挙に暇が無い。日本に範囲を限定してみても、須田

49 の絵画と写真との関係は、日本にほぼ同時期に伝わってきた油絵技法と写真術の関係を考えると興味深い。例えば次を参照。森田恒之「右前自画像の消滅～写真を見て描くとはいつから悪になったのか」『近代画説：明治美術学会誌』第14号、三好企画、2005年、7-17頁、また日本の近代美術を「写真」を端緒として論じた研究として次を参照。ミカエル・ルッケン『増補改訂版 20世紀の日本美術：国化から越境への軌跡』南明日香訳、三好企画、2016年。
静岡県博物館協会 研究紀要投稿規程

1. 投稿を受け付ける原稿

(1) 内容規定
加盟館員職員が従事している職務（展示・調査研究・保存、教育普及・その他）に関する論文、報告、事例紹介、収蔵品紹介等
※専門分野に関するものに限らず、学会誌誌以外の投稿も歓迎します。

(2) 執筆者規定
加盟館員職員一人もしくは複数人の執筆によるものとします。複数人による場合、全執筆者の1/3が加盟館員職員であることを条件とします。

2. 入稿規定

(1) 原稿の種類
日本語による原稿を基本とします。

(2) 入稿の方法
デジタルデータと印刷原稿、必要なら既製品（ポスター、印刷版写真、デジタルデータ、図面等）等を併せて提出して下さい。
デジタルデータはOSを問いませんが、必ずテキストデータを添付して下さい。図版のデジタルデータはJPGに統一して下さい。
※万が一の場合に備え、原版提出の際には必ず手元に控えを残しておいて下さい。

(3) 分量

<table>
<thead>
<tr>
<th>ページ数目安（1ページ当たり）</th>
<th>事例報告等（1〜4ページ分程度）</th>
<th>事例報告等（1/2ページ分）</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>論文 緒書き 写真無しの場合 2,000字</td>
<td>緒書き 写真無しの場合 2,000字</td>
<td>緒書き 写真無しの場合 1,100字</td>
</tr>
<tr>
<td>写真有りの場合 1,600字</td>
<td>写真有りの場合 1,600字</td>
<td>写真有りの場合 900字</td>
</tr>
<tr>
<td>細書き 写真無しの場合 2,000字</td>
<td>細書き 写真無しの場合 2,000字</td>
<td>細書き 写真無しの場合 1,100字</td>
</tr>
<tr>
<td>写真有りの場合 1,600字</td>
<td>写真有りの場合 1,600字</td>
<td>写真有りの場合 900字</td>
</tr>
</tbody>
</table>

(4) 文字原稿（印字原稿は次の書式でご提出下さい）
死数（1シート） A4版 40字×30行
※誌面レイアウト・フォーマットに従えた入稿も歓迎します。レイアウト見本をご希望の方は、事務局にお問い合わせ下さい。

(5) 原版原稿（1ページの版面はA4）
カラー（彩色原版）掲載希望があればご相談下さい。
モノクロ すべて掲載として扱います。
① カラー原版原稿には、目的用のデータを明示して下さい。
② 掲載原稿裏面に挿図番号とケース名を記入して下さい。デジタルデータの場合は、データ名に明示して下さい。
③ 挿図原稿のコピーは県展示された掲載原稿に、掲載希望箇所を、製作作業の制限にならないよう、明示して下さい。
④ レイアウトが掲載時の大きさの希望がある場合は、その旨注記して下さい。
⑤ 本文の印刷原稿に、挿図番号で挿入箇所を示して下さい。

(6) 原版の著作権申請
写真等掲載に関する作品所蔵者・著作権者からの許諾等取得は、執筆者が行なって下さい。なお、当協会記録は協会ウェブサイトにアップされます。

(7) 執筆者の表示
原稿には氏名・自宅住所および所属機関所在地（それぞれ平、Tel、Fax、番号）・部署・役職を明記して下さい。氏名には読み仮名をつけて下さい。成果品である紀要には、氏名と所属のみ記載します。
3. 原稿の送付先
原稿は、下記宛にお送りいただくか、ご持参下さい。
〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田53-2 静岡県立美術館内
静岡県博物館協会事務局
Tel. 054-263-5857
Fax 054-263-5742

4. 日程および申込・校正手順

(1) 日程（予定）
申込締切 2019年11月末日
入稿締切 2020年1月末日
発行予定 2020年3月末日

(2) 申込方法
申込締切までに、下記項目を静岡県博物館協会事務局宛にご連絡下さい。
・執筆者（複数執筆者の場合は、全員の氏名と所属を明記）
・題名（仮題で可）
・分量見込（レイアウト見本による全ページ数で表示、図版、表等の希望も含む。）
・編集、校訂者の希望
※分量は、1本文当り15ページ以内を基本とします。

(3) 申込の確認
静岡県博物館協会事務局は、申込締切後2週間以内に、執筆者申込時の分量見込みに基づいて現実製作の見込もりを行います。予算上製作が可能であれば、全申込者に申込通りの分量での執筆が可能である旨を連絡します。予算上不可能な場合は、申込者に対して分量についてのご相談を行ない、ご執筆いただく分量上限を決定します。

(4) 入稿の方法及び原稿の掲載
入稿は、上述の「入稿規定」に従って、上述3の「分量見込」に送付するか、ご持参下さい。4～(3)で示した事情により、実際に入稿した原稿が分量見込より増えた場合、執筆者に分量を減らしていただくか、当該号での掲載を取りやめることがあります。

(5) 校正
入稿締切までに入稿された場合、執筆者は文書校正（図版等を含む）2回を行なうことが出来ます。入稿締切が守られなかった場合は、この限りではありません。

(6) レイアウト
レイアウトはフォーマットに基づき、執筆者の希望を尊重して行ないますが、最終的には静岡県博物館協会事務局が決定します。

5. その他

(1) 文責
原稿の内容についての文責は、全て執筆者にあるものとします。著作権や誤植、不適切な表現等の問題については静岡県博物館協会及静岡県博物館協会事務局に一切の責任を負いません。

(2) 執筆者への成果品割当
執筆者には、30部を贈呈します。複数執筆者の場合、全員分を合わせて90部を上限として贈呈することが出来ます。

(3) 抜き刷りの作成
執筆者から希望のある場合、実費をご負担いただくことで、執筆箇所の抜き刷りを作成します。静岡県博物館協会事務局にご相談下さい。